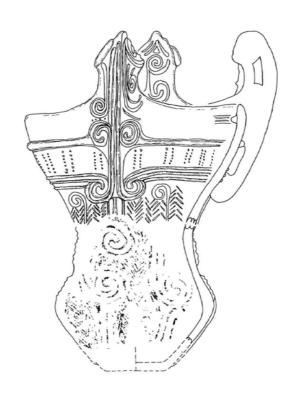


――北信濃中央山地における縄文中期集落址の研究――



1991 小川村教育委員会

小川村筏遺跡の学術調査が、5年次に渡って実施され、ここに調査報告書の発刊を迎えました ことは、誠に慶びにたえないところであります。

この学術発掘調査は、縄文時代の遺跡として古くから知られた小川村最大の遺跡の調査でありました。かつて刊行された大著『小川村誌』にも、「近く学術調査の実施を期待する」旨の記載がありますように、村民の永い間の待望でもありました。機は熟し、千曲川水系古代文化研究所の森嶋稔先生を調査団長にお願いし、昭和55年から基本調査、予備調査を実施し、57年夏から発掘調査が村民の期待の中で実施されました。発掘調査は毎夏・短期間でありましたが4年間4次に渡り、期待をはるかに超える大きな成果を収めることができました。とりわけ縄文中期の住居址群が集中して発見されたこと、またまったく予想もしなかった平安時代の住居址等まで発見されたこと、数多くの土・石器類の発見があいついだことなどは、村民の夢を大きくふくらませました。又その時代、小川村の筏遺跡をめざして多くの地域から集まって来た人々の想いを胸に、小川村の新しい明日の活力の源をも感じさせました。その成果は実に多大であります。

ここに改めて、千曲川水系古代文化研究所の森嶋稔先生をはじめ調査主任の児玉卓文先生、調査員の方々、また終始調査にご協力ご尽力くださいました地権者をはじめ塩沢区民のみなさん、小中高校の児童生徒をはじめ教職員のみなさん、そのほか調査にご参加いただきました多くの村民のみなさん、また更に本事業推進にあたられた筏遺跡調査会委員のみなさん方にも合わせて深甚なる敬意と感謝を申しあげます。

また本書が、わが郷土小川村の歴史をひもとく一助となることを願うばかりか、広く学界研究 者にも多くの寄与となることを自負し、発刊の言葉といたします。

平成 2 年12月23日

小川村長 伊藤 環

例 言

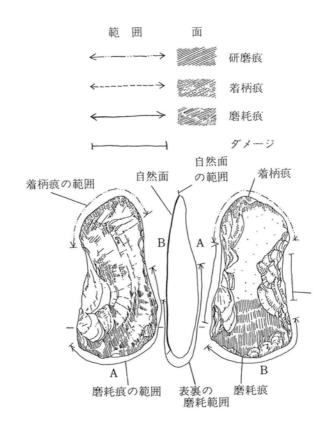
- 1. 本書は、1982年から1985年まで4年間、毎夏1週間乃至2週間をめどに実施した長野県上水内郡小川村小根山筏(いかだ)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査は小川村教育委員の委託により、千曲川水系古代文化研究所が実施した。
- 3. 本発掘調査の概要については、その年度の調査終了次第、概報として『筏遺跡』 I ~ IV として刊行した。本書と合わせ利用されたい。
- 4. 本発掘調査報告書作成にあたっては次のように分担した。
 - ○遺構実測 児玉卓文、大久保邦彦、翠川泰弘、塩崎幸夫、久保田敦子、西香子、前島 卓、森山公一
 - ○遺物整理 森嶋稔、児玉卓文、翠川泰弘、寺内隆夫、森山公一、福島邦男、宮入貞江
 - ○遺物復元 宮原洋子、翠川泰弘、倉見渡
 - 〇遺物実測 佐藤信之、矢島宏雄、森嶋稔、森山公一、児玉卓文、翠川泰弘
 - ○遺構トレース 児玉卓文、森泉かよ子
 - ○遺物トレース 翠川泰弘、森泉かよ子、森嶋稔、森山公一、佐藤信之
 - ○遺構写真 児玉卓文、森嶋稔
 - ○遺物写真 小川忠博、森嶋稔
- 5. 本書の執筆は、遺構関係全体を児玉卓文、遺物関係のうち土器部門を森嶋稔と長野県埋蔵 文化財センター調査研究員の寺内隆夫(第3章第2節3の第4類土器から第10類土器ま で)が分担し、石器部門はすべて森山公一が行い、論考関係も遺構関係を児玉、石器部門 を森山、土器その他の部門を森嶋が行った。
- 6. 本書の編集は、千曲川水系古代文化研究所の責任において行った。
- 7. 本調査の出土遺物はすべて小川村教育委員会に、実測図、写真、そして本書に用いた諸図 版及び原稿については、すべて千曲川水系古代文化研究所に保管されている。
- 8. 本調査、本報告書作成実施にあたって、以下の方々から助言、配慮、参加を得た。記して深甚なる謝意を表したい。

佐藤雅一、酒井潤一、町田勝則、平口哲夫、岡村道雄、寺内隆夫

凡例

石器実測図は下記の方法で表現した。

- 1. 打製石斧は①形態からみて揆形、短冊形、分銅形、②刃部状況では直刃、円刃、斜刃とする分類方法をとらず、本書では器体にみられる使用による磨耗痕を重視した。
- 2. 石器の表現方法は凡例図を参考にしていただきたい。使用による磨耗痕等の面的広がり及 びその範囲について4種類の矢印をもって区別した。
- 3. 図中の
- 4. 石器の実測図展開法のうち縦断面図には、A面が右、B面が左にくる表現方法をとった。
- 5. 石器の折損部については、可能なかぎり点線をもって復元した。



目 次

序文			
例言			
凡例			
第1章 調查	☆の概要		1
第1節	調査に至る経過		
第2節	調査の経過		
第3節	調査要項		
第2章 筏遣	貴跡の位置		
第1節	地理的環境		
第2節	歷史的環境		
第3章 筏遣	貴跡東丘陵の調査		
第1節	筏遺跡の構造		
第2節	遺構の配置		
第3節	遺構及び遺物		27
	1. 住居址		
	(1)第 1 号住居址27	(11)第11号住居址49	(21)第21号住居址67
	(2)第 2 号住居址30	(12)第12号住居址52	(22)第22号住居址69
	(3)第 3 号住居址34	(13)第13号住居址55	(23)第23号住居址71
	(4)第 4 号住居址37	(14)第14号住居址57	(24)第24号住居址73
	(5)第 5 号住居址39	(15)第15号住居址58	(25)第25号住居址75
	(6)第 6 号住居址42	(16)第16号住居址60	(26)第26号住居址79
	(7)第7号住居址43	(17)第17号住居址62	(27)第27号住居址83
	(8)第8号住居址44	(18)第18号住居址63	(28)第28号住居址84
	(9)第 9 号住居址46	(19)第19号住居址65	
	(10)第10号住居址48	(20)第20号住居址67	
	2. 土壙址		86
	(1)第 1 号土壙址86		
	(2)第 2 号土壙址86		
	3. 土器捨て場址		
	4. 土器捨て場址及び包含層出		90
	A. 土器90		
	B. 土製品102		
	貴跡の提起する諸問題	•••••	142
第1節	筏遺跡の住居址群		
	1. 縄文中期の住居址群につい		
	2. 平安時代の住居址群		
第2節	筏遺跡の土器及び石器の様相		
	1. 縄文土器の系統と変遷		
	2. 筏遺跡の唐草文系土器 (
	3. 石材の搬入とその構造		
	4. 石器類の組成とその意味す		
Mr = ats 40	5. 平安時代土器群の搬入とその		
第5章 総	括		····· 166

挿図目次

第1図	筏遺跡出土の土器①3	第	36図	第11号住居址	50
第2図	筏遺跡出土の土器②3	第	37図	第11号住居址出土の遺物①	51
第3図	筏遺跡出土の土器③4	第	38図	第11号住居址出土の遺物②	52
第4図	筏遺跡出土の土器④5	第	39図	第12号住居址	53
第5図	筏遺跡グリッド配置図17	第	540図	第12号住居址出土の遺物	54
第6図	標準層序図18	• 第	541図	第13号住居址	55
第7図	資料の撮影風景19	第	542図	第13号住居址出土の遺物	56
第8図	筏遺跡の位置21	第	543図	第14号住居址	57
第9図	筏遺跡の地形及び遺構位置23	第	544図	第15号住居址	58
第10図	全体遺構配置図24	第	45図	第14・15号住居址出土の遺物	59
第11図	縄文時代の遺構配置図24	穿	546図	第16号住居址	60
第12図	平安時代の遺構配置図24	第	547図	第16号住居址出土の遺物	61
第13図	筏遺跡の遺構配置図25	第	至48図	第17号住居址	62
第14図	第 1 号住居址28	穿	549図	第17号住居址出土の遺物	62
第15図	第1号住居址出土の遺物①28	第	50図	第18号住居址	63
第16図	第1号住居址出土の遺物②29	第	51図	第18号住居址出土の遺物	64
第17図	第 2 号住居址30	第	52図	第19号住居址	65
第18図	第2号住居址出土の遺物①31	第	53図	第19号住居址出土の遺物	66
第19図	第2号住居址出土の遺物②32	第	54図	第20号住居址 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	67
第20図	第2号住居址出土の遺物③33	第	555図	第21号住居址	68
第21図	第 3 号住居址34	第	56図	第21号住居址出土の遺物	68
第22図	第3号住居址出土の遺物①35	第	57図	第22号住居址	69
第23図	第3号住居址出土の遺物②36	第	58図	第22号住居址出土の遺物①	70
第24図	第 4 号住居址37	第	59図	第22号住居址出土の遺物②	70
第25図	第 4 号住居址出土の遺物38	第	60図	第23号住居址	71
第26図	第 5 号住居址39	第	61図	第23号住居址出土の遺物	72
第27図	第5号住居址出土の遺物40	第	62図	第24号住居址	73
第28図	第 6 号住居址42	第	63図	第24号住居址出土の遺物	74
第29図	第 7 号住居址43	第	564図	第25号住居址 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	76
第30図	第 8 号住居址44	第	65図	第25号住居址出土の遺物①	77
第31図	第6・8号住居址45	第	566図	第25号住居址出土の遺物②	78
第32図	第 9 号住居址46	第	567図	第26号住居址	79
第33図	第9号住居址出土の遺物47	第	68図	第26号住居址出土の遺物①	80
第34図	第10号住居址48	第	69図	第26号住居址出土の遺物②	82
第35図	第10号住居址出土の遺物48	第	570図	第27号住居址	83

第71図	第27号住居址出土の遺物83	第100図	打製石斧⑥123
第72図	第28号住居址84	第101図	打製石斧⑦124
第73図	第28号住居址出土の遺物85	第102図	打製石斧⑧125
第74図	第1・2・3・4号土壙址86	第103図	打製石斧⑨126
第75図	第1・2・3号土壙址出土の遺物87	第104図	打製石斧⑩127
第76図	第4号土壙址出土の遺物88	第105図	打製石斧⑪128
第77図	包含層出土の土器①91	第106図	打製石斧⑫129
第78図	包含層出土の土器②95	第107図	打製石斧⑬130
第79図	包含層出土の土器③96	第108図	打製石斧⑭131
第80図	包含層出土の土器④97	第109図	打製石斧⑮132
第81図	包含層出土の土器⑤98	第110図	打製石斧⑯133
第82図	包含層出土の土器⑥99	第111図	打製石斧⑰134
第83図	包含層出土の土器⑦ 102	第112図	打製石斧⑱135
第84図	包含層出土の土偶 103	第113図	石棒・磨石137
第85図	包含層出土の土製品及び石製品 104	第114図	磨石・石皿・多孔石138
第86図	石鏃·尖頭石器·搔器状石器·楔形石器…107	第115図	蓋石139
第87図	石匙・両面加工石器・搔器状石器 108	第116図	磨石・敲石・凹石141
第88図	礫器及び扇状石器 109	第117図	五領ケ台・新崎期の住居址の配置142
第89図	扇状石器及び横刃石器110	第118図	勝坂・上山田期の住居址の配置143
第90図	磨製石斧① 112	第119図	曽利II(筏)期の住居址の配置145
第91図	磨製石斧② 113	第120図	第 5 号住居址の埋甕146
第92図	磨製石斧③ 114	第121図	曽利IV期の住居址の配置147
第93図	磨製石斧④ 115	第122図	堀之内期の住居址の配置148
第94図	蛇紋岩製の半磨製石斧 116	第123図	平安時代住居址の配置149
第95図	打製石斧① 118	第124図	筏遺跡の唐草文系土器群155
第96図	打製石斧② 119	第125図	曽利II期の唐草文系土器群156
第97図	打製石斧③ 120	第126図	全長に対する磨耗痕の割合と表裏の
第98図	打製石斧④ 121		磨耗角度の分布162
第99図	打製石斧⑤ 122	第127図	筏遺跡の断層走行図170
	_		
	表	次	
hda a d		totat-	Mayboli - see BB layly y see BB de Li
第1表	磨製石斧の破壊状況 111		筏遺跡の石器点数と石器素材 158
第2表	打製石斧の磨耗痕		筏遺跡の石製品点数と素材 159
弟3表	縄文・前中、後期土器の系統と変遷 … 151	第6表	剝片の素材別点数159

図版目次

図版	1	1982年調査前の筏遺跡		第12号住居址石囲い炉
		1985年調査後の筏遺跡	図版19	第26号住居址石囲い炉
図版	2	筏遺跡の中央凹地		G-9グリッド土器捨て場出土の土偶
		筏遺跡の環状高地	図版20	第2号・第14号・第18号・第22号住居
図版	3	第1号住居址		址埋甕炉
		第2号住居址		第22号住居址埋甕炉の検出
図版	4	第 3 号住居址	図版21	住居址の切り合い
		第 4 号住居址		住居址の切り合い
図版	5	第5号住居址	図版22	砂岩の岩盤上の住居址
		第6号・第7号住居址		東側の断層陥没斜面
図版	6	第8号住居址	図版23	南東調査区を望む
		第9号住居址		第1次調查団
図版	7	第10号住居址	図版24	筏遺跡全景
		第11号住居址		筏遺跡全景
図版	8	第12号住居址	図版25	筏遺跡全景
		第13号住居址	図版26	筏遺跡遠望
図版	9	第14号住居址		自然にかえる筏遺跡
		第15号住居址	図版27	筏ケ原の秋
図版	10	第16号住居址	図版28	第2号住居址出土の遺物①
		第17号住居址	図版29	第2号住居址出土の遺物②
図版	11	第18号住居址	図版30	第2号住居址出土の遺物③
		第19号住居址		第1・第23号住居址出土の遺物
図版	12	第20号住居址	図版31	第3号住居址出土の遺物
		第22号住居址	図版32	第4号住居址出土の遺物
図版	13	第23号住居址	図版33	第5号住居址出土の遺物①
		第23号住居址	図版34	第5号住居址出土の遺物②
図版	14	第24号・第25号・第26号住居址		第6号住居址出土の遺物
		第24号・第25号・第26号住居址	図版35	第8号住居址出土の遺物
図版	15	第26号住居址		第9号住居址出土の遺物
		第26号住居址	図版36	第10号住居址出土の遺物
図版	16	第27号住居址		第11号住居址出土の遺物
		第28号住居址	図版37	第12号住居址出土の遺物
図版	17	第8号住居址石囲い炉	図版38	第13号住居址出土の遺物
		第9号住居址石囲い炉		第14号住居址出土の遺物
図版	18	第10号住居址石囲い炉		第15号住居址出土の遺物

図版39	第16号住居址出土の遺物	図版66	第13A類土器 第14類土器
図版40	第17号住居址出土の遺物	図版67	第15A類土器(299~303)
	第18号住居址出土の遺物		第15日類土器 (304、305)
図版41	第19号住居址出土の遺物	図版68	第5A類土器 第4E類土器
	第21号住居址出土の遺物	図版69	第4D類土器 第4B類土器
図版42	第23号住居址出土の遺物	図版70	第4G類土器 第10類土器
図版43	第25号住居址出土の遺物	図版71	第6A類土器 第6E類土器
図版44	第26号住居址出土の遺物	図版72	第12類土器
図版45	第27号住居址出土の遺物	図版73	土器捨て場址出土の土偶頭部
図版46	第28号住居址出土の遺物	図版74	包含層出土の土製円板
図版47	第1号・第2号・第3号・第4号土壙		包含層出土の垂飾
	址	図版75	土器捨て場址及び包含層出土の石器
図版48	土器捨て場址及び包含層出土の土器		石鏃及び尖頭石器 楔形石器
	第1類土器、第2類土器	図版76	搔器状石器及び石匙
図版49	第3類土器、第4A類土器	図版77	礫器及び扇状石器
図版50	第 4 B類土器	図版78	扇状石器
図版51	第4 C 類土器 第4 D 類土器	図版79	横刃石器及び扇状石器
図版52	第4 E類土器	図版80	磨製石斧
図版53	第4F類土器 第4G類土器	図版81	磨製石斧
図版54	第5A類土器	図版82	磨製石斧
図版55	第5C類土器	図版83	磨製石斧
図版56	第6類土器 A (135~137) B (139	図版84	打製石斧
	~141) C (138. 142) D (143. 144)	図版85	打製石斧
	E (145~152)	図版86	打製石斧
図版57	第7A類土器 第7B類土器 (166~	図版87	打製石斧
	168)	図版88	打製石斧
	第8類土器 (169)	図版89	打製石斧
図版58	第 9 類土器	図版90	打製石斧
図版59	第10類土器	図版91	打製石斧
図版60	第11A類土器 第11B類土器	図版92	打製石斧
図版61	第12類土器	図版93	打製石斧
図版62	第13A類土器①	図版94	打製石斧
図版63	第13A類土器②	図版95	打製石斧
図版64	第13A類土器	図版96	石棒 磨石
図版65	第13B類土器	図版97	石皿 多孔石

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

1. 筏遺跡の研究史

筏遺跡が知られるようになったのは、大正末期から昭和の初期である。当時戸隠小学校訓導の故坂井典敏氏や、中条小学校訓導の金井喜久一郎氏によって調査され、その存在が広く識られるところとなったのである。当時筏ケ原一帯は桑園となっており、部分的に畑地であったとも言われている。信濃史学界の指導者、故栗岩英治氏も踏査されている。両氏による調査は度々行われていたものと見られ、坂井典敏氏による採集品は相当量のものであった模様であるが、不幸にも火災によって焼失してしまったとの事である。しかし金井喜久一郎氏による採集品は今日でも中条小学校に若干散逸をまぬがれたものは見ることができる。

昭和7年7月号の『信濃』に編集主任の栗岩英治氏による「上水内郡西山部の踏査」の記事があ る。「つるね道(善光寺峯街道)は牛首地形をなしているから、立臼式の人間は、恐ろしくて小便も ひれない。それが、昔の善光寺大町間の太古以来の唯一交通路であったといふのだから驚縮する。 (中略)此処から二三十町程つるねを南に向かった所に、有名な筏が峯の遺蹟地がある。(中略)な ほ其遺蹟といふのは一つの池址の附近である。四十余人程で採集を行った結果としては、内田委員 が臘石の玉を、佐藤委員は磨製の石斧を、佐々木幸雄氏の完全な石鏃採取を筆頭として(中略)なほ 八幡一郎氏の指導で此遺蹟の研究を行った前記の金井氏の言によると、此遺跡は最盛期から最末 期迄の住居地らしいと言ふのである。」極めて興味ある記事であり、筏遺跡についての文献の初見 である。そこには有名な遺跡として紹介され、滑石製の飾り玉も採集されていること、又、中期(最 盛期)から後期(最末期)までの集落址(居住地)であろうとの、故八幡一郎先生の見解までがつけ 加えられているのが注目される。昭和初期には、筏遺跡はまさに注目されていたところのすでに 有名な遺跡であったのである。(立臼式の人間云々については、栗岩氏自身のことを指している。さ しづめ今日ではビヤ樽、ドラム罐式のというところであるが、栗岩氏の風貌は、森嶋をやや小型に したようなずんぐり形で活発に動きまわる方であったと話してくれたお年寄がいたのを思い出す。) 昭和20年代の終り、『信濃史料』第1巻の編集の太めの調査が、故大場磐雄国学院大学教授を 中心に行われた。その際の調査に現国学院大学教授の永峯光一氏が来村し、筏遺跡は再びにわか に注目されるところとなり、同書により梨久保式土器の範囲に所属するものとして、紹介されて いる。又同地名表には、神ノ木式、南大原式、中期初頭型式、勝坂式(多)加曾利E式、土偶な どが記載されており、筏遺跡がこの地域における中心的遺跡であるかの感をもいだかせる。筏遺 跡は、大正、昭和初期を通じ、今日まで研究者等に注目され続けて来た遺跡なのである。

2. 本調査への道

昭和30年代の終りから『上水内郡誌』の編纂が開始された。原始・古代編の調査は森嶋が担当し、上水内郡全域にわたって悉皆調査を行った。その中で40年代初め筏遺跡の存在を知ることとなった。小川村の郷土史家楠恵教、松本史両氏の案内を受け、初めてこの山間の筏遺跡に足を踏み入れた時は、まだ畑地の跡を色濃く残した若い雑木林であった。1 ha程の湿原の横の丘陵地帯に遺跡はのっていたが、驚くことに真中に大きな凹地があり、水気の乾燥した低湿地をめぐるように丘陵がコの字状に形成され、遺物はその内側と外側の斜面に集中して出土していた。このコの字状丘陵上は集落址であって、その斜面は土器捨て場址ではないかと思われた。また、その丘陵上はまったく耕作以外の手は入れられていないとの事でもあった。耕作によっても、その丘の上からは土器などはほとんど得られていないともつけ加えられ、表土の深さと共に、増々住居址の存在を予想できる立地状況であった。乱掘地点は2個所で、両地点とも集落の土器捨て場と見られ、斜面に集中していた。私は集落址の保存状況は極めて良好と判断し、発掘調査によって、集落址は必ず姿を現すだろうと言い、調査の必要性を進言した。それは、出土資料を見ると、中部高地系の土器ばかりでなく、関東系、北陸系、ひいては東北南部系と思われる土器郡を含んでいて、その様相は単純ではなかったばかりか、上水内郡誌や小川村誌の執筆上、最も重要な位置にある遺跡ではないかと思われたからでもあった。

以来、上水内教育会の郡誌編纂室にも筏遺跡調査の必要性を説いたが、実現しなかった。しか し小川村の楠、松本両氏は熱心だった。調査実現へ初志を持ち続けてくださり、その実現のため、 それから15年間もの歳月を、関係機関に働き続け、私とのつなぎの役割りを果たして下さった。

昭和55年夏予備調査、昭和56年事前調査として小川村教育委員会と千曲川水系古代文化研究所の共同学術調査として、筏遺跡の調査は実現のはこびとなった。楠恵教、松本史両氏による積年の努力に負うところが大きい。そして当時の教育長久保田耕平氏の理解もこれをたすけ、機は熟したと言うことができる。昭和56年夏には筏遺跡全体の地形測量調査を実施した。楠恵教、松本史両氏の喜びは格別なものであったが、塩沢区民の全面的応援と小・中・高校生の参加を得て昭和57年夏に行われた筏遺跡第一次発掘調査には、楠恵教氏の姿はなかった。昭和56年秋、筏遺跡調査の開始をよろこびながら、幽明境を越えてしまわれたとの事であった。楠恵教氏が望んだ筏遺跡の本格的な調査、その住居址、集落址の出現を目前にして眼を閉じられてしまった事を悔やんでも足りなかった。慚愧の念を調査の情熱に昇華させた。塩沢区民の皆様も楠恵教氏の遺志を帯して、本当に全面的援助を惜しまなかった。調査の為の土地提供から、雑木林の伐採、草刈り、道普請、調査協力にと、一家をあげて参加体制をとっていただいた。又、小中学生も六年生や郷土クラブ員の参加が行われ、先生方の参加も多数にのほった。更に村内出身の中条高校生も見られ、村民あげての調査となり、一夏の活気みなぎる清涼剤ともなったことは忘れることができない。そうした中に4年間の夏の学術調査が進行した。それは千曲川水系古代文化研究所員と村民の手作りの調査とも言うべきものであった。

3. 調査の準備

昭和55、56年度に筏遺跡の予備調査として事前調査が行われた。小川村公民館所蔵の土器類の 調査を55年度中に、56年度中には筏遺跡の全体地形測量を行った。それより先、すでに上水内郡 誌の調査によってかなりの問題は把握されていた。昭和51年3月『上水内郡誌』原始古代編が刊 行され、とりわけ縄文中期土器群が注目されている。又同53年12月発刊の『長野県考古学会誌』 に「筏遺跡のミニチュア土器」と題する報文が小林孚によって行われている。第1図に示した土

器をめぐるものであって、口縁部に粘土紐を網状 に貼付するこの種の土器は、中部高地も中信平的 な土器であることを指摘している。 又、第2図は 佐藤信之によって、『筏遺跡Ⅰ』に東北地方に核 のあるもので北陸の影響も加えられてもたらされ たものとの指摘を行っている。更に、第3図6、 7、11、第4図4、9、17も北陸系統の土器群で あり、第3図1、13、第4図3、10なども強く関 東的な土器群であることをも指摘している。他の 中部高地的な縄文中期的土器と共に、筏遺跡の複 雑さをも物語っていることを把握した。

また昭和56年夏に行った筏遺跡の全体地形測量 は、その地形の在り方と共に、その全容規模を明 らかにすることが出来た。

筏遺跡は、筏ケ峯からの地辷り崩落地形のテラ スの一つであり、2つの湿原をとりまく丘陵上に



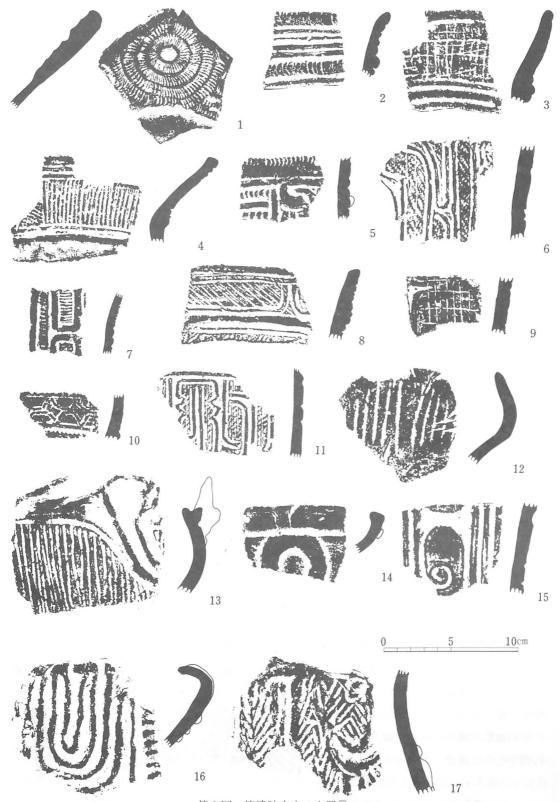
第1図 筏遺跡出土の土器①

位置していること、又、一帯は筏ケ原と呼ばれるテラスで、小湿原をとりまくコの字状の丘陵が、 主とする遺跡地帯であること、コの字状丘陵の中央は、7~12m比高差のある凹地となっており、

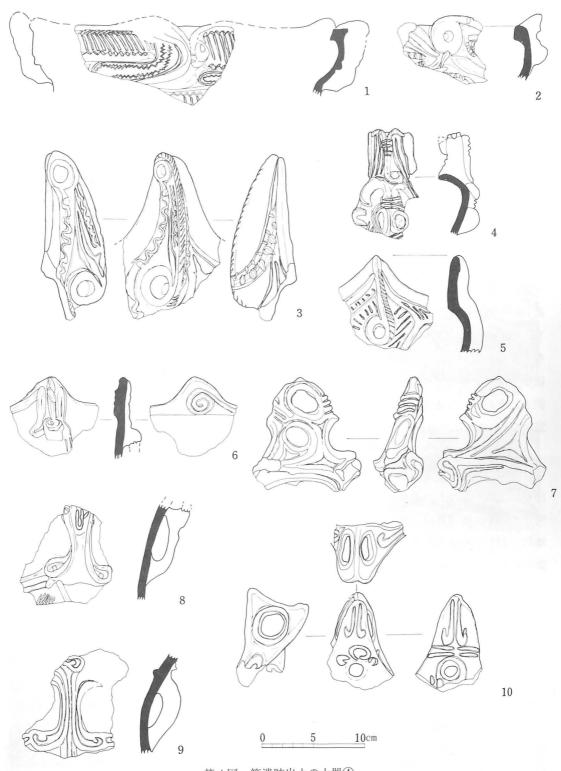
クレーター状をなしていて、中央が陥 没による凹地湿原を形成していたとも 見られ、その遺跡との関係で興味ある 地形となっていることも判明した。薮 の中の測量は難行を極めたが、当初の 目的を充分に達成して調査を終えた。



第2図 筏遺跡出土の土器②



第3図 筏遺跡出土の土器③



第4図 筏遺跡出土の土器④

第2節 調査の経過

1. 事前調查——1981年——

本年は次年度以降の調査地点の選定を行うべく、現地作業として筏ケ原湿原の北に隣接し既に 非湿性化している摺鉢状凹地の周辺地形測量を行い、既出遺物採集位置の確認及びそれに付随す る集落立地構造の予測等、筏遺跡の概況を検討した。同時に既出遺物の整理及び図化調査を進め、

双方の調査から得られたデータにより、発掘調査 行為自体の目的と課題、及び調査成果に関わる学 術的課題について討議を重ねた。

現地調査は、5月の連休を期して行った。

筏ケ峯(835m)より北に張り出す山塊は、標高 約780~800m付近で小規模な準平原状地形を呈 し、これを下ると約650m付近まで一息の斜面を なして落ちている。上記準平原状エリアは、湧水 により湿地をなしてやがて谷へ落ちてゆく二本の 沢と、その沢の分水嶺に当たる鞍部とにより径約 250mほどのエリアが画される。

西側の湿原は南北に狭長で流路が顕著である が、東側の湿原は本来幅が広く貯水のため沢への 出口に土堤が築かれたため、流路及び湧水点が不 明確である。筏遺跡はこの二つの水脈と準平原状 地形を利して成立したものと思われるが、当面の 調査対象は、東西の湿地に画された中心に凹地を 置く摺鉢状地形の地域とし、この地形を1mコン タで図化し、磁北方向を基準に50×50mの大区を 設け、画内に2mメッシュをかけて、南北をアル ファベット、東西を算用数字で呼称することとし た。

やや南に偏して最低部を置く摺鉢状地形を環状 に取り巻く外周高地は、西に高く東に低いが、外 周高地は一定ではなく残丘状に約50×60m間隔で 瘤状丘部と鞍部が連続する。最も低い鞍部は南方 △ 1984 (S. 59) 年夏の筏ヶ原湿原



△ 1982 (S. 57) 年の筏ヶ原湿原



△ 1983 (S. 58) 年夏の筏ヶ原湿原



にあり、凹地最低部と比高差約6mをもって東側の湿原と接している。

周辺一帯は落葉松と杉の植林がなされ、比較的よく手入れはなされているものの、凹地では茅類が繁茂し、東方環状高地は背高に達する熊笹に覆われていた。既出遺物の採集は凹地がかつて畑地として拓かれていた際に、外周高地との界に形成された傾斜面を中心になされたものであるが、西方ではほとんど見られず特に東方で集中的になされたようである。よってこの東方の環状高地には単位集落が形成されていたことが予想された。また既出遺物の時期については、縄文中期の初頭から末葉に及ぶものを中心にして、前期中葉及び末葉のものが少量あるものの、これらの分布傾向は、南部環状高地周辺に前期、東部のそれに中期という状態を示していた。

これらのことから、集落の立地は、前期は環状 高地の一乃至二ケ所、中期は各時期に高所の一角 を占めながら全体としては全域に及ぶことが推定 された。

2. 第1次調查

----1982年----

昨年の地形測量と踏査に基づき、調査地点を最も多くの遺物が採集されている東方環状高地の瘤状丘部間の鞍部と選定した。(50×50mの大区では、S2E1区南部からS3E1区北部に相当)調査期間は、7月29日から8月6日の9日間とし、本年度調査範囲を、東西9~17列、南北S2E1区でT~Y列、S3E1区でA~E列までの約400㎡とした。

雑木の伐採及び熊笹の抜根作業の後、まずS3 E1区より表土の除去作業に入ったが、鞍部の頂 部は薄い表土堆積で地山のローム層に達するもの



7月29日 午前10時、安全祈願と団長挨拶



△ 7月29日 バックホーによる熊笹抜根



△ 8月4日1号住掘り下げ ▽ 1号住カマド址

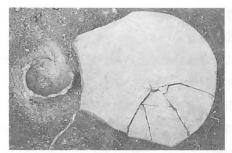


の、瘤状丘部に近い南方は礫岩が地山をなし、部分的にテーブル状に高く残された礫岩ブロックのあることが判明した。鞍部稜線より西方斜面にかけては、礫混じりの黒色及び黒褐色土が下方にかけて順次堆積を厚くしてゆく状態が観察された。

遺物の出土状態は、頂部付近では極めて稀であったが、厚い堆積土層をなす西方斜面では多量の土器破片と打製石斧が出土し、特に東西9~10列付近に集中する傾向が見られた。土器破片の時期は、縄文前期末が数片あるものの大半は中期初頭~中葉のもので、土製スプーン残欠、三角壔土製品等の特異な遺物の出土も見られた。

遺構が存在するものと想定された鞍部頂部付近には、落ち込み状の土層変化は認められず、テーブル状の礫岩ブロックに面取りされたような加工部分辺が何個所か観察されたことと、その直下附近に小埋甕及び石棒残欠の出土をみたことが留意された。西方斜面には幾つかの黒色土層の落ち込み状の堆積が存在し、遺構存在域は斜面部にかけてかと、一応住居址等の存在を想定して精査したが、斜面における黒色土層の層位であることが判明し、この斜面は生活廃棄物の捨て場として使用された事が推定された。

一方平行して作業を進めていたS2E1区では、鞍部の頂部で複合する黒色土層の落ち込みが認められ、西側斜面には礫岩質の地山に幾筋もの浸触による溝が流下している状態が検出された。複合する頂部の落ち込みの内、最も新しいと判断された方形プランを掘り下げたところ、筏遺跡においては予期しなかった平安後期の住居址であることが判明し、切り合っている他の落ち込みの幾つかも前後する時期のものと推定された。遺物には北陸系の割合いが高い事、小形の利器が少ない等が留意され、課題として残された。





△ F-12グリッド 小埋甕と蓋石 ⊲ F-15グリッド (12号住内) 小埋甕

▽ 西方斜面の 土器捨て場



✓ 土器捨て場 U-8グリッド出土の 土器

▽ 8月6日 現地説明会



3. 第2次調查

——1983年——

本年度の調査は、昨年度完掘した平安後期の第 1号住居址に切られて検出されていた落ち込みを 追求するため、調査区を北と東へ約120㎡ほど拡 張することとし、調査日程を7月27日より8月2 日の7日間とした。

雑木の伐採に続いて重機による熊笹の除去後、 表土層を除去し改めて遺構の検出作業を行った。 第1号住居址と西で切り合う第2号住居址は、黒 色土層を切り込んで褐色気味の黒色土層が落ち込 んでおり、楕円形プランの埋甕炉を有する中期初 頭に所属するものであった。

第2号住居址より北側の黒色土層中に少しく褐色を帯びた円形プランを認め、これを第4号住居址とし、精査に入ったところ貼り床と小埋甕を検出したが、調査区域外へ拡がる可能性とさらに北側で他の住居址と切り合う気配があったため、全掘は次年度へ回すこととした。

第2号住の北東(T-15グリッド)の砂質地山 土層中に土壙状に拡がる黝んだ部分を認め精査し たところ、周溝を巡らした床面を検出し、これを 第5号住居址とした。この住居址は改築したと思 われる地床炉を中心に計8箇の小埋甕が環状に検 出され、極めて特異な性格を持つものであること が留意された。

第1号住居址の東方の切り合いは、X-18グリッドに大木の古株が存在した事と地山土層がローム層から砂質土層に変わる変換面に当り、その検出と見極めは難航した。V列18・19及びW列18・19グリッドを中心に黝んだローム層を覆土とする円形プランが認められたため、これを第3号住居址とし、第3号住の西辺を切り、第1号住の



△ 7月27日調査区の拡張



△ 合力は重機に優る! 古株の除去



△ 2号住掘り下げ

7 第2号住完掘



南東半が切っている形状が不明瞭な落ち込みを第 6号住居址とした。

まず第6号住居址よりそのプランの精査を進めた所、大木の古株を除去した下に若干の焼土と石、さらにやや西に離れて埋甕が検出された。

精査の結果、不明瞭ながら第6号住の想定プランは、埋甕を含まないものと観察され、埋甕の時期も第6号住とは異なるものと判断されたため、この埋甕は他の住居址に伴うものと認め、次年度調査に譲ることとした。(第3次調査において第14号住居址の埋甕炉であることが判明した)

また、焼土と石が検出された周囲では、少し黝んだローム層が、コーナーを形成して回っているように観察され、先の第6号住を想定したプランとは重なりながら異なるプランが存在することが推察された。

精査を進める中で、石と焼土は方形プランの南辺と東辺のコーナーに存在するカマドの一部であることが認められ、これを平安期の第7号住居址とした。第7号住の掘り下げの結果、第6号住(縄文中期)は、第7号住にほとんど破壊され、その床面下に僅かに円形プランの東辺を確認するに留まった。

第3号住居址の掘り上げは、雨で一日休止した 後の最終日の作業となった。砂質地山に構築され た床面は軟弱であったが、ほぼ中心に地床炉を配 し、北西部には埋甕が行われた張り出し部を持つ 円形プランであることが確認された。

本年は夕立ちの多い不安定な気候で調査は難行 したが、ほぼ当初の目的は達せられた。



△ 3号住完掘



△ 8個の小埋甕を持つ神秘的な5号住



△ 5号住小埋甕No.:



▽ 5号住測量

4. 第3次調查

---1983年----

本年度の調査は、環状高地の南北両瘤状丘部により限定された地形に占地した集落の全貌を把握することを目指して、調査区を北は東西P列、東は21列、南はG列までの約450㎡を新たに拡げる事とし、その調査に7月25日から8月2日までの9日間を設定した。

昨年までに調査を完了した遺構の仮埋土の除去と、新たな調査区の雑木の伐採及び熊笹の抜根の後、表土剝ぎ作業に入ったが、西側斜面以外の表土堆積は全般に薄く、北の瘤状丘部の南斜面は20cm程で砂岩の地山となり、南の瘤状丘部北斜面は礫岩の地山であった。

第1次調査において小埋甕・石棒残欠が検出され、テーブル状礫岩ブロックに人工的に削った縁辺が観察された K列の14~17グリッドでは、石囲い炉を持つ第12号住居址と、判然さを欠く第13号住居址が、南の瘤状丘部から続くと想定される礫岩に削り込んで検出された。さらに斜面にかかる K-11グリッドでは床面・西壁を斜面に流されながらも第19号住居址が検出された。

また、北側のP~R列の12~16グリッドには幾つも切り合う落ち込みが検出され、新たに拡張したエリア内では、住居址群の北限を極めることは不可能な状態となった。この一画では、昨年検出しながら未完掘であった第4号住居址の他に、第8・9・10・11・15・16・18号住居址が互いに切り合って確認され、第18号住居址より東は砂岩のテーブル状ブロックが露出したため、一応住居址



② 17号住の調査が進行







□ 3号住張り出し部出土の埋設土器







群の構築がないものと予想されたものの、第11号住居址は未掘部分にかかっていたため、さらに北方に住居址群が延びることも予想された。

第18号住は楕円形プランが想 定され、第15・15'・16号住が それに続くものと思われたが、 プランは共に不明瞭であった。 第8号・第9号住は比較的明瞭 なプランが確認された。そして この一画内で最も新しい時期の ものと想定した。また、方形の 石囲い炉が検出された。第8号 住の掘り上げに続いて第18号住 の掘り下げを行ったところ埋甕 炉が砂岩ブロックの横に確認さ れ中期初頭に比定された。円形 の石囲い炉を持つ第10号住は、 第9号住に切られ、第4号住を 切っているが、共に黒色土層中 の貼り床を行った住居址であ る。

X-17グリッドでは昨年検出 した埋甕が炉であると判明し、 これを第14号住居址とした。

新たに拡張した東側と砂岩の テーブル状ブロックに当たった 北東側は後日を期すこととし た。

土偶の頭部残欠が西側斜面の G-9グリッドで検出された。



△ 4号住出土の土器



△ 12号住出土の石皿残欠



△ 折り重なる廃棄土器



△ 土器捨て場でまた検出



△ 土器捨て場の石斧と土器片



△ 信州では異様な文様



遺跡眼下煙 る塩沢集落

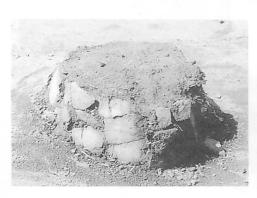
5. 第4次調查

——1984年——

本年の調査は東丘陵鞍部の調査最終年と位置付け、昨年までに解明できなかった北部瘤状丘部と調査区東側への住居址群の拡がりを把握することに全力を傾注することとした。調査期間は7月30日から8月5日の7日間とした。グリッドは北辺追求のため2列を、東辺追求のため3列を拡張することとした。

表土剝ぎが順調に進んだ北辺においては、昨年 その一部が把握されていた第18・11号住居址の全 貌把握と、プランが不明瞭であった第15・15'・ 16号住居址の追求、及びこれより北へ住居址群が 展開するか否かの追求をした。

砂岩のテーブル状ブロックが露呈したR~V列



の18~22グリッドでは、昨年砂岩を掘り抜いたような方形プランと多数のピット群が確認されていたため、それが住居址となるか否かの検出作業が進められた。

20列より東においては、環状高地が筏ケ峯の東の谷へ落ちてゆく地形変換点を確認し、この居住区域の東の界を確定すべく、表土剝ぎと遺構及び地山地形の検出作業を行った。

第15・16・16'号住居址と命名した部分は、炉址



△ 難航する調査区南東



△ ポールの持ち方も板について

▽ 縄文後期の埋甕 (C-20グリッド)



▽ 無文の甕の時期はいずれか



▽ 東断で 検れた 浅鉢

痕も無く一部の壁状掘り込みとピット の存在により住居址を想定した一画で あったが、精査の結果第15'号住居址は 砂岩を削 消滅し、第16号住は第8号住・第18号住 20号住 に、第15号住は第9号住・第10号住・第 4号住に切られているものと確定した。

昨年一部が未掘となっていた第18号 住は、東半分が砂岩のテーブル状ブ ロックからの掘り出しによって造り出 号・16号▷ された楕円形プランを呈することが確 住の精査 認され、同じく昨年存在を想定したま まとなっていた第11号住居址は、西側 の壁と床は斜面により失われてはいる ものの、円形プランを呈し、南壁の一 部を第9号住に切られているものであ ることが確認された。

住居址群の北への拡がりの追求につ いては、第11号と第22号住居址の検出 によりほぼ確定された。第22号住は、 第11号住の北の瘤状丘頂部の西南で、 東壁が砂岩ブロックを削って構築され たもので、西半の壁は斜面により失わ れているものの、西辺床面に北陸系中 期中葉の埋甕炉を検出した。第22号住 は、他の住居址群より北東によって独 立して存在するが、砂岩ブロックの テーブル状断層平面を利して構築され ており、北壁は断層崖を削り込んで造 り出されていた。南壁は失われている もののほぼ円形プランを呈し、中央に 埋甕炉が存在する。

RとS列の21・22グリッドに昨年確 認されていた砂岩を掘り抜いたような 方形プランは、平安時代の住居址であ

り込んだ ▷





24号住の 床面ピッ▷ トの土器





△ 25号住床

24号 · 25 号 · 26号 ▷ 住居址





ることが確認され、第23号住居址とした。 それは一辺約4mの規模で、40~50cmの 壁高をまるまる砂岩をくり抜いた稀有な もので、南東隅にカマドを配置していた。

この第23号住に南接する砂岩のテーブ ル状ブロックには幾つものピットが存在 することを昨年留意していたが、精査の 結果それらピットは中央に焼土痕を置い て楕円形に回ることが確認され、これを 第27号住居址とした。またその東南にも 小振りのピットが楕円形に回る面を確認 したため、これを第28号住居址とした。

東丘陵は23列より急激に東へ断層面を 伴って落ちるが、西斜面と異なって浅鉢 の半残欠以外まとまった遺物は観られ ず、東斜面は集落にとって日常的にはあ まり意識的に利用されない空間であった かのように思われた。この東斜面の縁に 近いA~G列の20~22グリッド付近に は、遺構を複数想定できる土層の変化が 認められ、この追求のため調査期間を8 月8日まで延長することとした。A~B 列の20・21グリッドでは、覆土層に大量 の焼土が含まれるプランが確認され、第 △ 団長を囲んで・小学生 26号住居址としたが、円形の石囲い炉と 二段の床面が確認された。その南には黒 色土層中に後期の大形埋甕が存在し、そ △ 8月8日19時30分、太 れを取り上げた後の検出作業で壁の立ち 上がりが緩慢な大形の遺構を認め、立ち 上がり緩慢な壁に小ピットを巡らすもの を第24号住、それと切り合う大きなピッ トを持つものを第25号住とした。

以上で夏季のみの短期間ではあったが 4年次にわたる調査を終了した。







- からオジチャン、オバ チャン、4年間御苦労 様でした。
- 陽はすでにアルプスに 沈んで。
- △ 測量原点とスコップは 5年間の終止符
- ▷ 夕暮れの紫煙ひととき



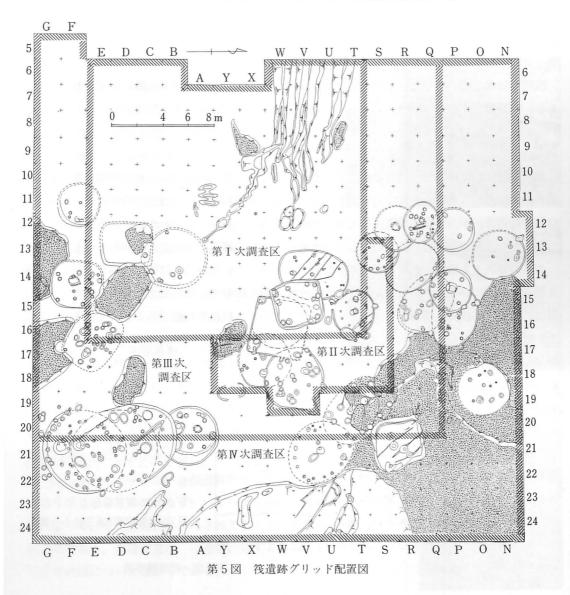
第3節 調査要項

1. 調査の組織

1、調査会				2、調査団				
	久保田耕平	教育長	(1次)	調査団長	森嶋	稔	(千曲川水系占	代文化研究所主幹)
"	松本 智	11	(2~4次)	〃 主任		卓文	(TEMPINORE	TO TOWN JOYN TETT
委 員	森嶋 稔	調査団長		調査員	矢口	忠良	林 和!	男 矢島 宏雄
	村越 敏明	教育委員長	(1次)	"		呆邦彦	森山 公	
"	11	教育委員	(2次)		原田	勝美	宮下 健	,,
"	柳沢 光恵	教育委員長	(2・3次)	補助員	翆川	泰弘		光 塩崎 幸夫
JJ.	11	教育委員	(1次)	1111 297 32	白沢	勝彦	久保田敦	
11	和田 雅彦	"	(1~3次)		宮坂	直子	竹節美知一	
11	宮下 明盛	教育委員長	(4次)	調査協力員	北田	忠弘	建設課長	1 10.00 -4
11	"	教育委員	(1~3次)	W 7.34. (III) 7 3 7 C	宮林	晨晴	国土調査係	Ų.
11	坂口 博美	"	(4次)		小林	光良	前塩沢区長	~
"	夏目 和子	77	(3 · 4 次)		小林	国利	小林 良-	_
11	松本 文雄	11	(4次)		小林	勇	小林 完	
"		文化財審議委			楠	幸一	小林はつ	
11	松沢 一夫	"	副委員長		伊藤	義信	小林 定!	
11	西沢 己利	"	委員		楠	幹夫	楠 たもっ	つ 楠 喜弘
11	松本 栄嶽	11	11		伊藤紫	大一郎	楠きの泊	2017
"	宮入 英治	<i>11</i>	"(1·2次)		伊藤	宗善	小林 尊	and the second
"	高山伊豆彦	"	" (3・4次)		伊藤	良春	小林とみ。	
"	丸山 弘雄	小学校長	(1次)		楠	勝教	伊藤 明」	良 伊藤 国光
"	滝沢 耐三	"	(2~4次)		小林	高	小林 久	子 伊藤 幸子
"	藤沢 充	中学校長	(1~3次)		小林	清敏	楠みち	子 小林 光秋
"	小林 治夫	11	(4次)		楠	広志	伊藤 房	男 楠 きのえ
11	大久保元久	公民館長			伊藤	正輝	伊藤 宗	子 小林 数成
11	小林 光良	塩沢区長	(1 · 2次)		楠	修吉	楠 洋	明 伊藤 充男
"	小林 国利	塩沢区長	(3 · 4 次)		楠	裕隆	小林ゆき	子 西沢 春伊
11	小林 良一	塩沢組長	(1 · 2次)		小林	国武	小林 竜	男
11	小林 勇	JI .	(3 · 4次)		楠	定子	小林 松	圖(以上塩沢区民)
11	松下 俊毅	教育次長		高校生等	中沢	章嘉	松本 哲	你 宮島 俊也
事務局					伊藤	秀一	小林 栄	- 笠井 清高
事務局長	大久保 豪	社会教育係長			伊藤	亨		_
11	宮尾 勝繁	"	(2~4次)	その他	三水	文隆	7/71-	豐 西條 晴好
事務局員	"	社会教育係	(1次)		西沢	久憲	染野 吉	
"	藤倉 孝嘉	"	(2~4次)		伊藤	忠	筝村 茂	-
"	峰村 長男	JI .	(1・2次)	中学生			66名	
11	大日方浩和	11	(3次)	小学生			121名	
11	前島やい子	"	(4次)					
11	小林 義人	学校技師	(1・2次)	3 、報告書F	200		tut	
11	市川 勝利	"			,	公一	教育長	
11	松本 久治	"			大西	國利	教育次長	As form to a
11	和田 直一	n			久田	文人	前社会教	18. 2.2.0000
"	伊藤 隆喜	//	1 - 11 5		松本		現社会教	
11	川浦 由江		(1次)			孝嘉	社会教育	
"	滝沢三七子	11	(2~4次)		戸谷	かづ枝	(小)	川村教委事務局)

2. 調査区の設定と調査の方法

雑木の山林は、下草は主として熊笹であったが、地元小川村塩沢区民の奉仕によって、事前に伐採され、下草刈りも一部を除いて行われていた。その現場で魂鎮め、鍬入れ、安全祈願の行事を行った後、中型バックホーによる表土除去を行った。南北に盛り上がる小丘陵の鞍部を中心として $22m \times 22m$ 、484mを開け、そこに南北方向へ主軸グリットAを $2m \times 2m$ として設定した。直交するように下方中央凹地から東方向に、グリッド番号を1より順につけることとした。Aグリッド軸より北方向へB~E列、南へY~T列とし6~16番号に杭打ちを行いグリッドの設定をした。A-7、A-8グリッドのように命名し、第1年度の調査区を設定した。



調査方法は平面調査法とし、特に傾斜角の強い西域土器捨て場では層位調査法を併用した。この基本方法は4年次にわたる調査の基本方法とした。遺構の検出、遺物の取り上げもその範囲内で行いできる限り原位置の確認記録方法を採った。第1年度は平安時代後半期の方形竪穴住居址を検出するにとどまったが、基本層序の確認、土器捨て場の確認も行われ良好な遺構調査を来年度おくりとした。

第2次調査は前年度調査の精査、拡大調査を目的として行った。平安時代住居址周辺の切り合いによる重複住居を主たるものとし、一部東側に22グリッドを拡張、縄文時代中期前半を中心とした住居址群の検出へと展開させた。第3次調査は南、西、北側にF、G列、Q~S列を拡大し、東西15グリッド、南北16グリッド、960㎡に展開させた。これによって、筏遺跡東丘陵の遺構分布状況はほぼ明らかとなって来た。第4次調査は、北側及び西側の拡張と全体精査を目的として行われた。東西19グリッド(38m)、南北19グリッド(38)、1,444㎡に及ぶ調査をこれによって行うことができ、東丘陵遺跡の全体像を明らかにすることができたものと思う。

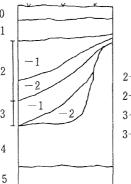
筏遺跡は北丘陵、東丘陵、南丘陵に分割し認識できるが、今調査は東丘陵に限定されたものである。地形測量点はトラバース点をもとに遺跡全体をカバーできるよう配慮した。

3. 標準層序

調査の進展には標準層序の確認が不可欠である。その点第1次調査は、その確認が優先し、遺構の標準的在り方を明らかにすることを求めて、努力を重ねながら調査を進行させた。筏遺跡及びその周辺は、かつて桑園や普通畑であった時期があるとの事で、にわかにその層序は決定できなかったが、調査の進行と共に図示したようなものとして認識できることを明らかにした。

表土の黒色土をO層とし、1層は砂礫粒を含む褐色土で、部分的には灰褐黒褐色を呈している。 2層は基本的に砂粒を含む黒色土であるが、その下層に部分的に黒褐色土が認められる。また3 層は、2層と同様にして基本的にはロームブロックの混入した黒褐色であるが、その下層に褐色 土が部分的に認められる。4層は地山と

呼べるものであり、火山灰によるローム 0 質黄褐色土である。これらは、信州ロー 1 ム層の最も新しいものであるらしく、この中央山地北部の丘陵状テラスにも降灰が認められるものと理解しておきたい。 3 詳細は後日の研究に待ちたい。 5 層は、基盤岩であり基本的には第三紀小川累層 4 の砂岩層、礫岩層と見ておきたい。 遺跡 5 の中央凹地は、湿原地形をなしておりその成因に興味がもたれる。



標準層序

0層 表土(黑色土)

1層 含砂礫粒褐色土

2-1層 含砂粒黑色土

2-2層 含砂粒黑褐色土

3-1層 ロームブロック混入黒褐色土

3-2層 ロームブロック混入褐色土

4層 ローム質黄褐色土

5層 砂礫質岩盤(第三紀小川累層)

第6図 標準層序図

4. 整理の方法

筏遺跡の資料整理は、遺物の水洗及び乾燥を小川村ににおいて、教育委員会と千曲川水系古代 文化研究所員とによって行った。その後の註記、復元については宮原洋子、翠川泰弘、倉見 渡、

宮入貞江氏によって行い、以後それを含めて千曲川水 系古代文化研究所員が行った。

整理は出来る限りその年度内に行い、その年度の調査概報は『筏遺跡』 I~IVの4冊を出版することが出来た。したがって整理分析研究は併行して行われ、1989年末には上山田町に整理収蔵研究用のプレハブを建て、その実施を更に円滑にした。

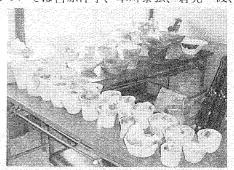
整理分析研究は千曲川水系古代文化研究所員が分担 し行って来たが、一部を(財)長野県埋蔵文化財セン ター研究員の寺内隆夫氏に依頼し応援を得た。とりわ け縄文中期前半の資料群中、北陸系の土器群について は、寺内隆夫氏の分析に負うところが大きい。

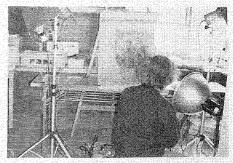
なお資料の写真撮影は小川忠博氏と森嶋が担当したが、小川氏の写真原版による土器実測図化を森嶋が行い、そのトレースを森泉かよ子氏が行った。その他の 土器実測図及びトレースは翠川、森嶋が行って、組図 版とした。

なお石器類の全資料については、森山公一が分析研 究、原図作成、トレース、組み図版とした。

遺構図は、整理、原図作成を児玉卓文と森嶋が、トレースを全体遺構図を児玉、その他の遺構は森泉かよ子氏に依頼し作成した。

整理研究は、所員一同諸任務を持ったかたわらの事業であって、かなりの長時間を必要とした。その上長時間の調査時間にもかかわらず、それらは必ずしも充分であったとは言いがたい。筏遺跡の重要さは本報告で語り尽くせるものではなく、いよいよ今後の分析研究によって、その重要性は高揚されてゆくものと思われるのである。整理研究は、筏遺跡に関するものとしてはその緒についたばかりである。







第7図 資料の撮影風



第2章 筏遺跡の位置

第1節 地理的環境

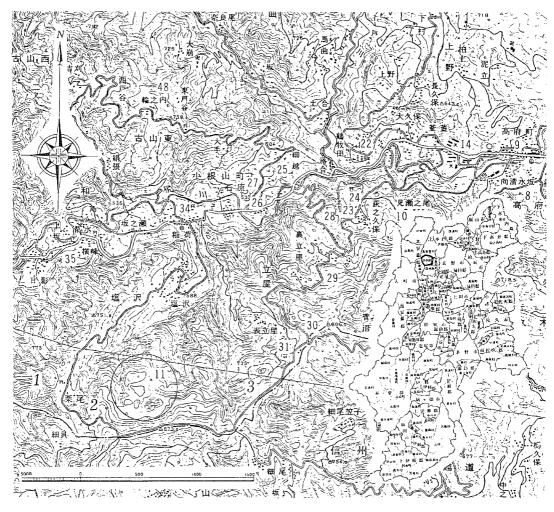
長野県上水内郡小川村の地理的位置は、中部高地における中央山地北辺部にあるとまず指摘することができる。中部高地における中央山地は、八ヶ岳・妙高山ラインの準平原状の高地を指していて、小川村はその北辺部、妙高山寄りに位置していることになる。この中央山地は中央地溝帯として、かつて第三紀中新世代は海底であった地帯であり、その後の火山活動と隆起運動で陸地と化し、堆積造岩終末期の小川累層、栅累層を基盤としている。したがってその基盤はまだ活動期にあり弱く風化も進んでいる。したがって河川の侵蝕も進み、犀川に至っては中央山地を横断する横谷をなしている。小川村を通貫する土尻川も同様で、犀川の支流であるが、それにそそぐ小支川を数多く山稜に食い込ませており、地形は極めて複雑化している。又弱い風化基盤は土砂崩壊の常時多発地帯となっていて、小川村全体が、侵蝕地形と崩壊、堆積地形によって、そのほとんどをしめられいるのが現状である。

筏遺跡は、その様な地形の中で、巨視的には南に東流する犀川と、北に東流する土尻川にはさまれた残丘的な痩尾根の山稜地帯に位置していると見ることができる。その山稜は小山脈状を呈し、美麻村、八坂村へと連続し、大町市の東山稜地帯へと連結している。古くから後述する様にこの山稜は、安定した交通路として重要なものであって、大町よりの、いわば千国街道と直結する善光寺峯街道と呼ばれたものであったのである。それは近世になって記憶されたものであったが、その道はかなり筏遺跡の成立にまで遡行できるものかもしれない。とするのは、北陸の影響下にある筏遺跡の縄文中期前半の土器群や蛇紋岩製の打製石斧、磨製石斧は、そのルートをもってもたらされたものであるかとも推論されるからである。そのような中にあって、中央山地の北側ルートは幾つかの河川や山稜を越えたものであるが、むしろ主体的な様相を呈するものとなっているし、南側ルートは、犀川流域に核があったと見られる、河原の転石面を残す安山岩製の多量な打製石斧と結びつく様相であるのは注目せねばならない。筏遺跡の地理的位置はそうした極めて特長的な様相の中にあるものと把握できる。

筏遺跡を徴視的に見れば、前述の様に東西に走る痩尾根の山稜上であるが、その山稜の北側に 発達したテラス状地形上に存在するものと理解することができる。古くからこのテラス状地形一 帯を筏ケ原と呼んでおり、筏ケ沼と呼ぶ 1 ha弱の湿原もあって、南の筏ケ峯崩壊による地辷り 地形とすることができる。その成生時期は筏遺跡よりも古いことは間違いなく今後の研究に負わ ねばならないところである。イカ地名がこの中央山地北部に多いのは、この地辷り崩壊、堆積地 を指すものであるばかりか、イリ地名の山地が水源祭祀にかかわるものであることも留意せねば ならない。中部高地の中央山地は、動植物も又北方系と南方系の接点としても重要である。

第2節 歷史的環境

後遺跡の研究史については、すで前述した通りであるが、後遺跡は縄文時代遺跡のあり方として、多様な問題点を内蔵している。特に前節でふれたような成因を持つこの地帯が、強く北陸地方や関東、又越後南部の影響下にもあったことを認めなくてはならない。後遺跡周辺の遺跡などを概観しておきたい。中央山地北辺として旧石器時代の遺物を出す遺跡は、長野市小田切の小野平と鬼無里村のうるし平、そして長野市信更町の上和沢遺跡であろうか。飯縄高原の上ケ屋遺跡もこれに加えることができる。小野平からは楔形細石刃核が、うるし平からは黒耀石製の神山形



第8図 筏遺跡の位置

1~3 県指定戸隠神社信仰遺跡(1 奥院、2 中院、3 宝光院) 8 高府宮西沖 9 中島 10見 瀬之尾 11筏 14月夜平 22鶴牧田 23荻の久保 24荻の久保経塚 25組越番場 26西沖 27丸 塚 28摺古 29蕨平 30立屋城跡 31表立屋 34坂ノ瀬神田 35西光寺跡 48布留山城跡 彫刻器が、上和沢から神子柴型尖頭器が、上ゲ屋からはナイフ形石器や尖頭器中心とした旧石器 文化終末期の資料が得られている。うるし平遺跡など直線距離で数kmの位置の小テラスにあり、 将来筏遺跡の第4層である信州ローム最末期の地層から同時代資料検出も有り得るものと考えて いる。縄文時代早期の資料群はすくなく、飯縄高原、戸隠高原を除くと、聖山周辺の南部まで下 らないと存在が認められていない。縄文前期の資料も散見する程度である。小川村の成就遺跡な ど地辷り堆積地形上にあるが、関山、黒浜、有尾期の資料を若干見ることができる。これは筏遺 跡も同様である。前期の住居址群と共に多量の資料を出した信州新町お供平も近くにある。

縄文中期の資料を出す遺跡はにわかに多くなる。とりわけ中期初頭から中葉にかけての遺跡が多く、小川村の筏、成就遺跡、鬼無里村棚の陣場平遺跡、長野市安庭、信州新町上条、牧之内遺跡、大岡村根越遺跡などがある。しかしこの時期後半期もそれらの遺跡は引きつがれているが、共に小遺跡の増加と、打製、磨製石斧や若干の土器を出す遺跡の増加が注目されるところである。母村的集落と出作り小屋的遺跡との構造化が進展しているように把握できる状況である。中期終末から後期にかけての遺跡は良好な遺跡が認められる。鬼無里村棚の田頭遺跡、同陣場平遺跡、信州新町宮平遺跡、日ノ尾遺跡、中条村宮遺跡、長野市信更町清水遺跡などは、敷石住居や墳墓も検出されており、注目すべきものである。晩期に属する遺跡は極めてすくない。鬼無里村内裏屋敷遺跡は古くから知られておるが、長野市小市遺跡も共に資料がすくない。

弥生時代の遺跡は、この中央山地内ではほとんど認められない。小川村も、鬼無里村も同様にして、太形蛤刃の磨製石斧などが単独出土で散見される程度であるのが現状である。しかし鬼無里村棚の追通岩陰のように、櫛描文の箱清水式土器と共に多量の獣骨が検出される例と、信州新町小花見遺跡のように、水源周辺の小散布地がその性格と共に留意されるべきである。

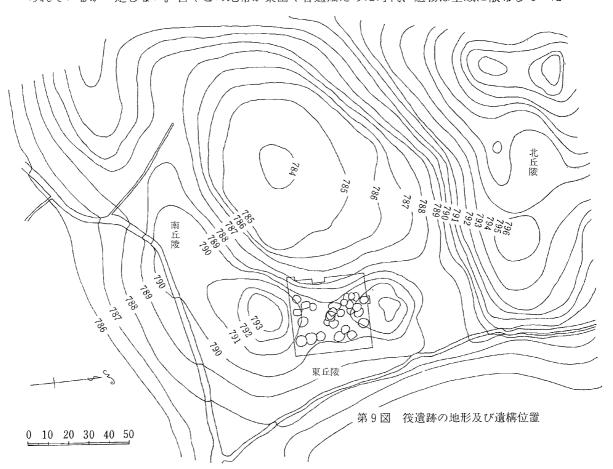
古墳時代をふくめ古代の資料は極めてすくない。中条村宮遺跡には良好な資料が古墳とおぼしきものと共に認められる。棚田頭遺跡からは緑釉陶器片、信州新町上条遺跡からは平安時代初頭の住居址も検出されているがその例はすくない。小川村鶴牧田から土師器の坏が検出されているが、筏遺跡からは一辺に4棟の住居址を検出することとなった。この山地の小集落的住居址群をめぐって様々な推論が試みられているが、今だにその定説となるものは明らかにされていない。同様性格の遺跡に中央山地内では、更埴市池尻遺跡、明科町一本松遺跡などがある。今後更に追跡されるべき性格の遺跡である。後述するように木地師的集落と理解しておきたい。

後遺跡周辺のもう一つの焦点は、県指定の戸隠神社信仰遺跡の存在である。永禄7年(1564) 甲越の戦乱をのがれて、越後、鬼無里村祖山と避難し、同年8月筏ケ峰に武田摩下の大日方氏をたよって避難したと伝えられている。そして戸隠三院にならって奥院、中院、宝光院の遙拝所や院坊も建てられたと言うものである。中世史の中に登場するものとして、今日までその跡地は顕彰されている。文禄3年(1594)30年後に筏別院は戸隠本山に帰ったとされている。筏遺跡周辺が、一種聖なる地として畏敬されていたものかとも見られ、時代を超えて注目される。江戸時代、この案街道には松代藩の立屋口留番所が置かれているのも興味あることである。

第3章 筏遺跡東丘陵の調査

第1節 筏遺跡の構造

後遺跡は前章第1節でふれた通り、東西に走る山稜の北斜面に形成された地辷り堆積と思われるテラス状地形上に存在する。この一体の南山稜を筏ケ峰、テラスを筏ケ原と呼んでいる。筏ケ原の南半は筏ケ沼と呼ばれる1ha弱の湿原であり、菅が繁茂している。その北半が筏遺跡で、東西100m、南北250mの範囲を指している。この範囲の微地形は、第10図で見るように西側にやや高い山陵を持ち、それに連続してコの字状の丘陵が形成されている。それは、その内側がほぼ直径100m程で比高差5~10mの凹地となっているためである。したがってかつては湿原とみられる凹地をとり囲むように、北丘陵、東丘陵、南丘陵が形成されている。その丘陵が遺跡である。凹地の成因は筏ケ沼同様地辷りによるもの、隕石落下坑、地下水土砂流失による陷没などが考えられているが一定しない。古くこの地帯が桑園や普通畑だった時代、遺物は全域に散布していた



ばかりか、とりわけ北丘陵の北斜面と東丘陵の西斜面に集中して採集されていたという。土器捨て場であったのである。したがって3つの丘陵上は住居区である可能性が高い。水場は湿地と、西山陵裏と東丘陵下に湧水地点が隣接している。標高790m台の良好な遺跡地域である。

第2節 遺構の配置

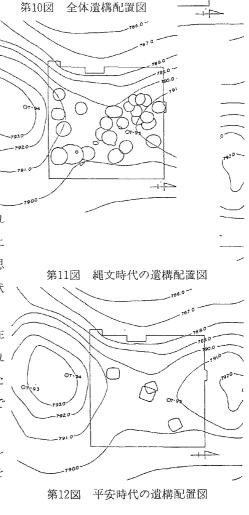
4次の調査、1,444㎡東丘陵の一部のみの追究では あったが、平安時代住居址4棟、縄文時代住居址28棟 それに土壙址4基、土器捨て場1個所を検出した。

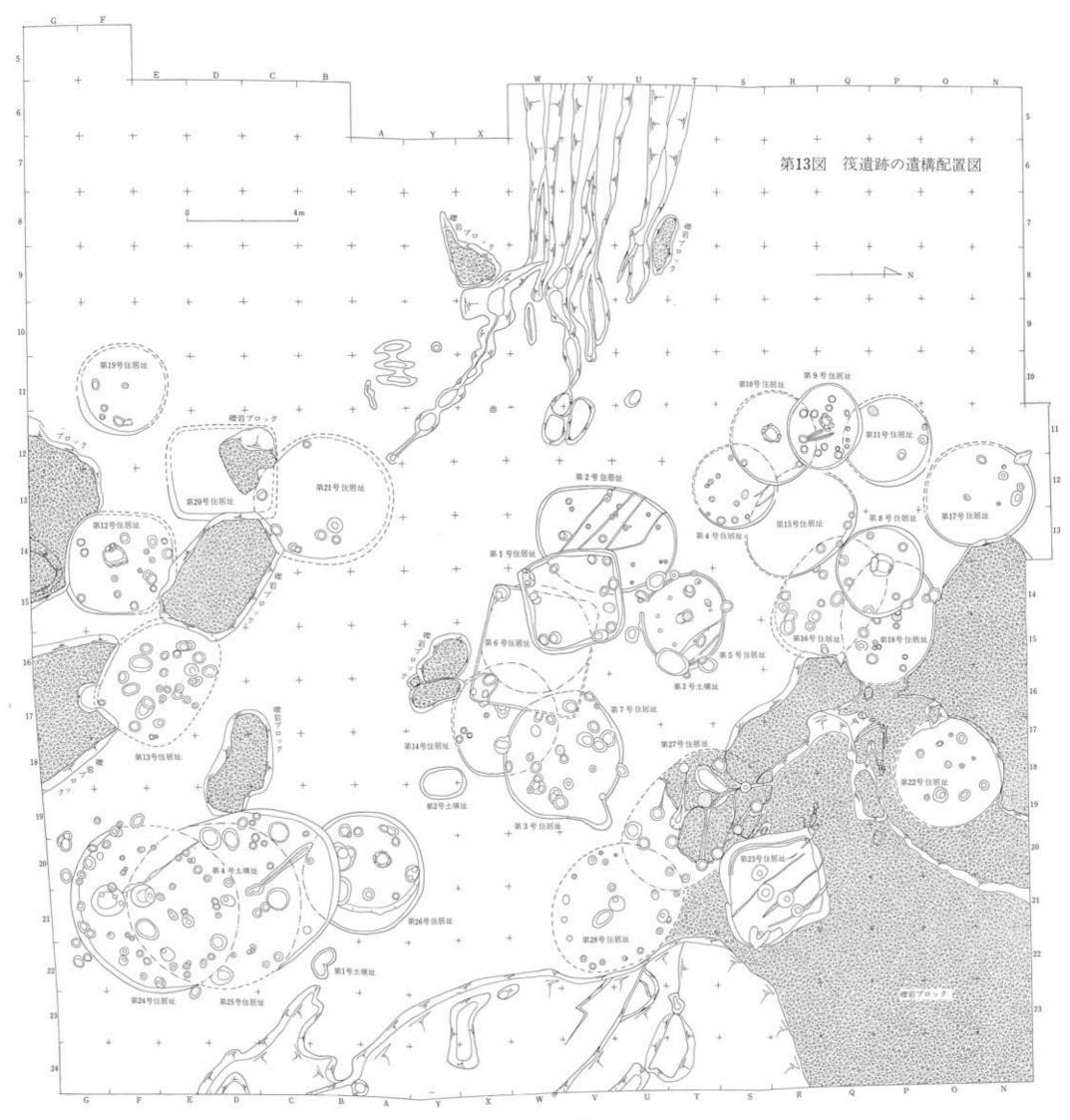
東丘陵は南北に小残丘を持ち、その間が鞍部状丘陵となっており、東西40m、南北60m程の範囲が東丘陵の遺跡である。丘陵東斜面は傾斜度が強く、次ぎの小テラスの接点に湧水が見られる。西斜面は調査によって確認されたところでは790m以下はすべて土岩場であって、土器片あるいは石器片のアトラン:廃棄場所と見られる。これは確認ができたものレ石器類のみであるが、当然他の食物残滓や排泄り棄場所でもあったのであるけれど、残念ながらりとなってはいない。遺構は北小残丘側に多く、下のより、中央部には遺構の存在しないエ存在している。

縄文時代、とりわけ中期後葉までに片寄って1 群が検出されたが、各期やはり住居址の重複がみられた。同様時期でも重複するものが見られたけれど、土器一型式内の時間の長さとして把握できるものと思う。一時期に限定するとやはり中央広場のある小環状配列となる集落を復元的に理解することができる。

平安時代住居址が4棟検出された。1号住と7号住を が重複し、7号住の方がより古い時期のものと思われる。又1号住と23号住出土の甕形の土師器が接合した、 ため、廃棄の際の同時性を考慮すると、同時は2棟で、 あった可能性が大きい。

縄文時代と平安時代という2つの時期の生活址として、その生業のあり方を理解する上に、重要な要素を持つ遺跡であり、その構造が示唆している。





第3節 遺構及び遺物

1. 住居址

(1) 第1号住居址

A. 遺構 (第14図)

東丘陵の鞍部中央に位置する。ローム層中に構築され、覆土は黒色土で他遺構の埋没状態とは 明瞭に識別され、残存状況は良好である。

一辺約4mの隅丸方形を呈し、壁高は検出面より東北壁で最大40cmを測るが、東辺と西辺はやや胴張り気味で、主軸は約10度西に振れている。壁裾には幅10~20cm、深さ約10cmの周溝を廻すが西南隅で切れている。西北四分の一は第2号住居址を、東南三分の一は第6号・第7号住居址を切っている。西北部は貼り床が施されるが、床面全体はよく敲き締められ堅緻である。

周溝の切れる西南隅には焼土を伴って砂岩の石材が検出され、石組カマド跡を明瞭に想定できたものの、煙道等の検出もできず残存状態は良好でない。焼土は北端床面の略中央にも、径約40 cm深さ約3 cmの規模のものが存在するが、その性格については、後述するように住居の建て替えに関係するものとは思われず、どのような用途に供したものかは不明である。

柱穴は住居址内に13箇所、壁外に関連すると推定されるもの1箇所が存在するが、内部のものについては、 P_3 と P_6 及び P_{13} を除いて対をなしており、6本柱家屋の少なくとも一回の建て替えが推定される。 P_1 と P_2 、 P_8 と P_9 、 P_{12} と P_{14} 及び P_6 が隅柱を構成し、 P_{10} と P_{11} 、 P_4 と P_5 は間柱穴と思われるが、発掘所見では P_{10} と P_{14} は周溝掘り上げ中に認識したものであるため、周溝は建て替え後に付加された可能性が高い。また P_4 と P_5 は切り合いがあるものの、 P_6 は対となる柱穴を持たないため、建て替えに際してカマドの位置は固定していたと考えてよいように思われる。

遺物は、灰釉皿、(須恵器壺・土師器甕)及び坏破片が少量得られたが、比較的大きな破片はカマド址周縁部の出土である。

当該住居址は、出土遺物の時期より11世紀が比定される。なお、西北で切り合っている第2号 住居址床面には3本の断層線が認められたが、本住居址床面では認められていない。

B. 遺物

土器 (第15、16図)

第1号住居址から検出された土器は、灰釉陶器の蓋、土師器の坏など甕、須恵器の壺などで、すべて小破片であった。とりわけ整理の段階で、土師器の甕片が第23号住居址出土の甕片と接合関係にあることが判明したことは、極めて注目に価するものであろう。はなれた住居址間の破片の接合が、どんな意味を持つものか、類例はあるであろうか。興味深い事例であるように思われる。

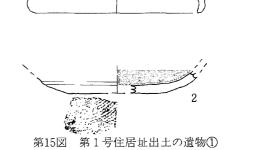
灰釉陶器、皿:(第15図1)

高台部と坏部の立ち上がり部分のみの小破片があるが、図のように全器形を復元できるものと思われる。胎土は黄白色でやや荒く、ざっくりしたもので焼成温度もやや低く、一見して東濃系のものとわかるものである。坏部の見込みには灰釉はかけられておらず、灰釉はその様子から漬け掛けである。高台は先の尖り内弯するもので、その全体の様子から美濃光ケ丘窯系のものとみてよいものと思われる。折戸第53号窯期のものであろう。他に口唇部小破片が2点あるが、やや

C 外反し玉状口唇と なっている。 土師器、坏(第 15図2) 坏の底部とその 一部のみの破片で Α В 全体を知ることは できない。底部に (P3 焼土 は回転糸切り痕が 残されており、坏 部内側は黒色処理 を行った内黒の坏 $2 \, \mathrm{m}$ である。底部直径 □ A Ŭ B_{-} 5 cmとみられる。 器内見込みには 第14図 第1号住居址 一条暗文が認めら

れる。他に底部小破片が3 点、胎土から2個体分がある。共に内黒で糸切り痕をのこしている。

土師器、甕:(第16図1、2) 図示した1、2ともにロクロ成形になるものである。口縁部は共にやや内弯するもので、全体が水引き痕で覆われている。1は焼成良好で固く



1

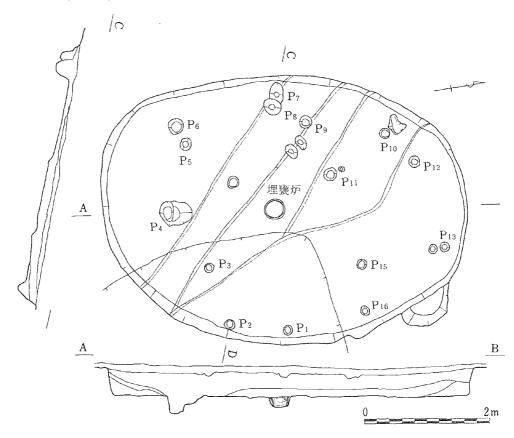
焼きしまっている。2は若干もろい。内弯する口縁は、越後的であり、成形は越後、北信濃的で あるものと言えようか。こうした煮沸形態の土器が、越後北信濃的であることも又留意せねばな らない。なお、第23号住居址出土の土師器甕片と接合関係にあったのは1の甕片でともに口縁部 片である。第1号住と第23号住の同時存在性をのみ指摘しておきたい。

須恵器、壺: (第16図3) 須恵器の壺 片は4点あ る。底部の二 分の一片と他 は胴部の破片 である。灰黒 色で焼成は良 好である。 成形は巻き 上げによるも ので、底部内 側には粘土の おさえを行っ た指頭圧痕が 並んでいる。 成形の後、ロ クロ整形の行 われたもので 切りはなしは へら、又、へら による整形痕 もみられる。 貯蔵用のこう した須恵器は この時期まで はのこるもの 第1号住居址出土の遺物②

であろう。

(2) 第2号住居址

A. 遺構 (第17図)

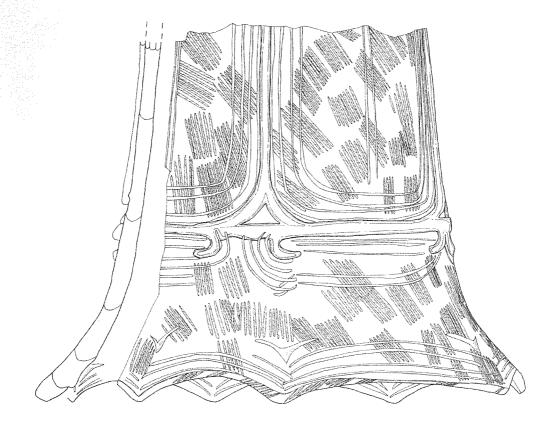


第17図 第2号住居址

東丘陵の鞍部中央より少しく西方斜面の肩にかけて存在する。含砂粒黒色土層中に、大粒の砂粒子を含む褐色土層の落ち込みとして検出されたが、本体はローム層中に掘り込まれており、残存状態は良好である。

長軸5.9m、短軸4.3mの楕円形を呈し、壁高は検出面より北壁で最大40cmを測るが、主軸は約8度東に振れており、ほぼ西方斜面に直行する。東壁の約二分の一は第1号住居址に切られ、東北壁の一部は第5号住居址の柱穴が切っているものの、共に床面には達していない。床面は良く敲き締められてはいるものの、北西から南東に走る断層線が4本認められ、北側がそれぞれ3~5cmづつ下がっている。床面ほぼ中央に埋甕炉を持っている。

柱穴は南壁を除く壁内周に東西が対となる8ポイント計11個、埋甕炉を中心に東西が対となる 五角形の計7個及びその中間の3個の総計21個確認されたものの、径は15~20cmとそのプラン及 び他時期の住居址に比して小規模である。出入口部を壁内周柱穴が抜ける南に想定し、壁内外の 精査をしたが、図示した以上の遺構は認められていない。



第18図 第2号住居址出土の遺物(1)(対能工器) 10cm

置物は、覆土層中より土器の小破片、土製円板、打製石斧、石鏃等が得られている。短船走器

。いたし意留は林市る木の面響形ないなむう遮井上出るで拠辺多芾里却代以

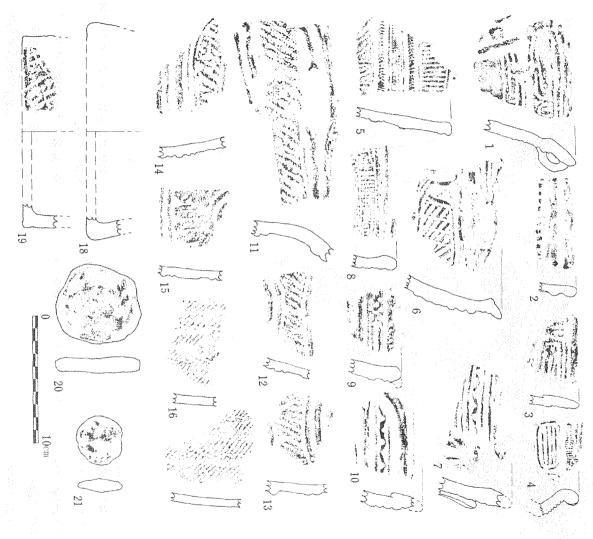
(図61,81策) 器土 财量 .8

。各式も依実以膜台や窮圧運ਲ膜中でよい器上部域、制膜初の址署 4本

桑4~8 コバ平は口縁口状故。るいてしぬ難てによる場式行平るよび管性構準コ上のう、少ら連 的線直は口語哺う器士をなる縁口水斑なんがも星を氷斑の断7。なした口図87萬を器土削散

,05 判部週よ191 ,81 。6 あつ器土の膜薀量 ,膜合や顔正とな自器土なっちょ合み膝のとな文核斜角 三文灰三 ,のよさせる不垂る文縣な的燈替るあの商薪い將剛 ,器土るいアパら用を沈文縣赤行平 太面あるいは床面に近い破片の土器群を一括して図示したのが第19図である。半離竹管による 。されつ器土の酸Ob第。されつ器土おしり〉

。6 もつ文無。6 もつ 専門建士 ユノ出事 NIS



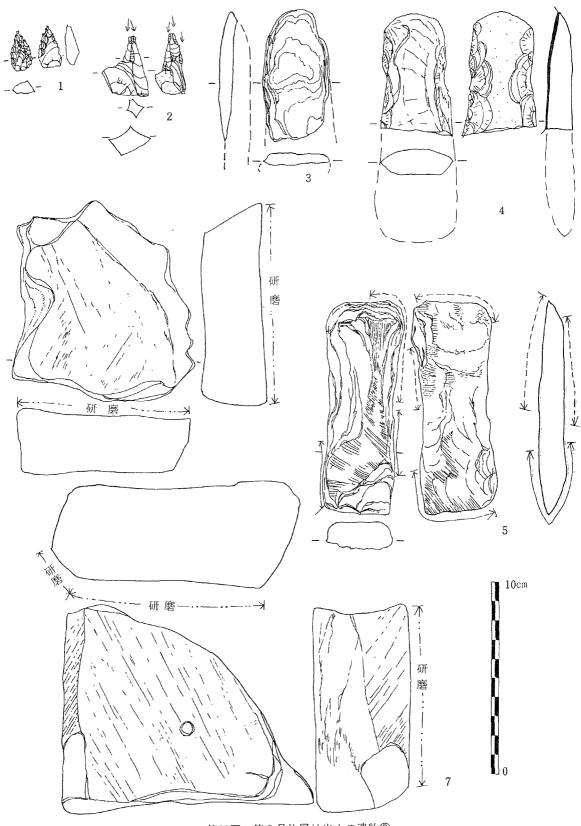
第19図 第2号住居址出土の遺物②

石器 (第20図)

ののち剁落している。さらに頭部両面に着柄痕と思われる摩耗痕をみる もの(4)、蛇紋岩製のもの(5)がある。5は刃部に磨耗痕がみられ、衝撃により刃部が磨耗 石器は全部でで点検出されており、 ては、打製石斧3点がある。 石斧は蛇紋岩製の剝落したもの(3)、 利器としては黒曜石製の石鏃(1)、楔形石器(2)、鈍器 ことが出来る 刃部破損の安山岩製の

7は砂岩製の磨石で、平面部と、側辺部に研磨痕がみられる。

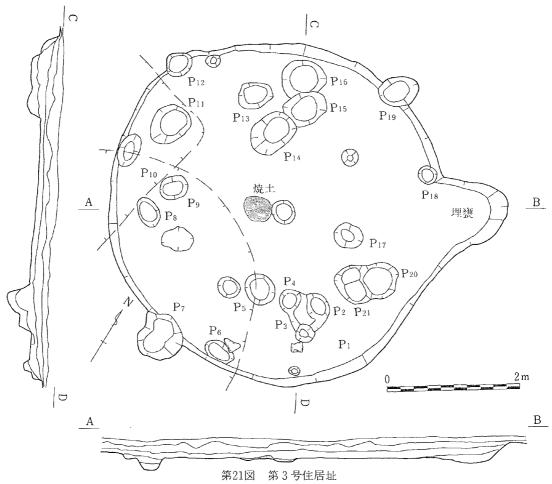
るように思われる。 すべて破片ながら、この時期の住居址における石器の組成を把握する良好な在り方を表現して



第20図 第2号住居址出土の遺物③

(3) 第3号住居址

A. 遺構 (第21図)

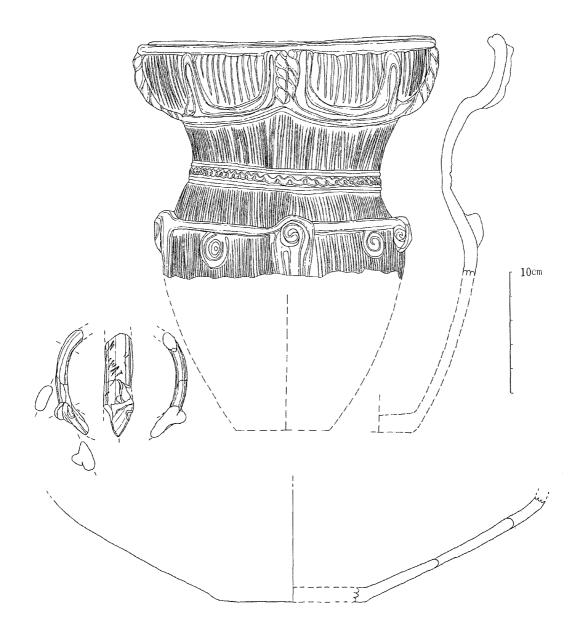


東丘陵の鞍部中央より少しく東方に寄った部分に存在する。やや砂質化するローム土層中に砂 粒を含む黝んだ褐色土層の落ち込みとして検出された。

径約5mの円形を呈し、東北部に約1mの張り出しがある。壁高は検出面より北壁で30cmの最大を測る。南西壁を第7号住居址に切られているが床面に達せず、南壁で第14号住居址を切っている。地山の性質上床面の敲き締めの状態は良好ではないが、ほぼ中央に地床炉がある。

柱穴は20余りあるものの、東西3対の外柱と2対の内柱が主要な構成をなすものと推定され、その軸線よりやや北東に偏するものの張り出し部分は、地床炉が少しく中心より、西に寄ることと合わせて出入口が想定される。張り出し部分は径約80cm、深さ50cmの土壙状をなし、内部に底部の欠いた逆位の埋甕が存在した。覆土層内出土の遺物は少量であるが特異な状態の物と遺物が得られている。第23図の4の石斧は第22図2の浅鉢破片の上に載せられた状態で検出された。

本住居址の時期は、埋甕等の遺物から中期後葉曽利II期に比定される。

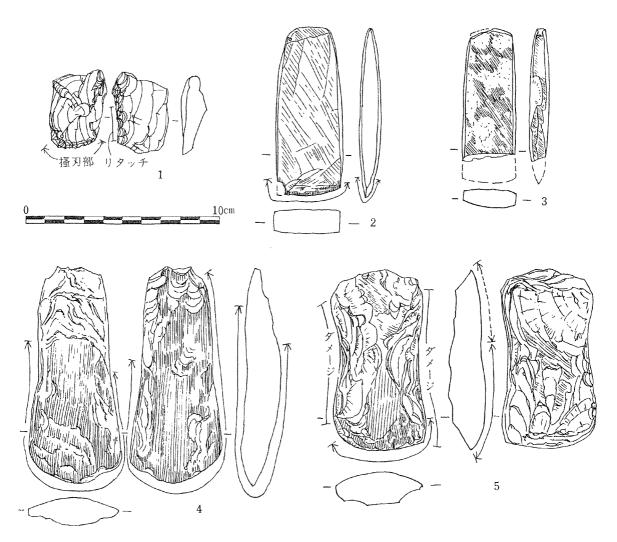


第22図 第3号住居址出土の遺物①

B. 遺物

土器 (第22図)

張り出し部埋甕の深鉢(第22図1)である。4単位八区画の口縁横帯文は、縄状粘土紐の貼付とその間にやや浅い縦の沈線で施文しており、頸部に三角陰刻文が一条、胴部最大径位に隆線の渦文を四単位、その間に沈線の渦文を四つ配している。又全体は浅い条線が縦位に行われている。内弯する器形、唐草文多用の諏訪市本城遺跡例などに最も近い曽利II期所産のものであろう。胴下半は第13A類土器と分類した一対把手綾杉文構成の土器と共通で、その範囲の中にあるのが留



第23図 第3号住居址出土の遺物②

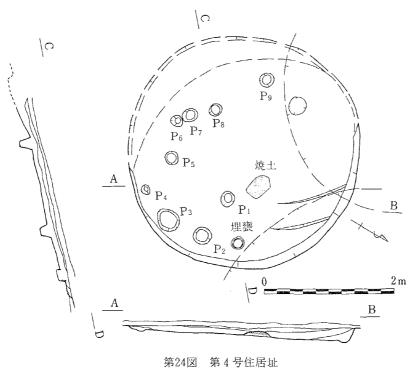
意される。2は無文の浅鉢片、3はブレスレット様の土製品である。その腕環様土製品には黒色の漆状付着物と赤色顔料の付着が見られ、類例の少ないものとして注目される。

石器 (第23図)

蛇紋岩製の磨製石斧 2点(2、4)と打製石斧(5)、流紋岩製の小形磨製石斧(3)が住居 址内から検出されている。2の磨製石斧刃部は研磨痕が刃部と平行してみられるが、その上に使 用による磨耗痕が縦方向にみられ、製作技術と使用方法のわかる良好な資料である。1は黒耀石 製で剝片の一端に搔刃部を作出した搔器状石器である。また5の打製石斧の表側上部には着柄に よると思われる磨耗痕がついており、刃部の磨耗痕とは明らかに異なった擦痕を観察することが できる。1以外すべて蛇紋岩製であるのが注目される。

(4) 第 4 号住居址

A. 遺構 (第24図)



東丘陵鞍部が北の瘤状 丘部へ向かう裾の西方斜 面肩部(S・T列13-14 グリッド)に存在する。 砂粒を含む黒褐色土層中 に砂粒を含む黒色土層の 変化として検出され、残 存状態は良好でない。

斜面にかかる西方約四分の一は流れて不明確であるが、径約3.6mの円形を呈するものと推定される。壁高は検出面より東壁で20cmを測るが、掘り込みはローム質土層に達せず、黒褐色土層中に部分的にロームを貼って

床としており、床面は軟弱である。床面の北端で北西から南東方向に走り西へ落ちる断層が二条 認められ、北壁は第10号・第15号住居址を切っている。床面中央より北東に偏って焼土痕が存在 し地床炉が想定される。柱穴は不明瞭で検出できたものも整然さを欠いているが、焼土痕の存在 位置等から主軸は北東-南西が考えられた他、主に打製石器残欠を中心にした遺物が覆土層中よ り得られている。

本住居址の時期は、小埋甕より中期後葉曽利II期に比定される。

B. 遺物

土器 (第25図1、2)

本住居址の埋甕として第25図1、床面出土の土器として同2をあげることができる。1はやや小形の土器ではあるが、4単位の隆線による垂下、結節部に唐草文を配し、同単位間を2条の半截竹管で平行半隆線とする構成をとり、その間に短い斜行沈線文で充塡しているものである。1は第13類Aの土器の範疇に入り、2はモチーフからすれば北陸の新崎系の第5類B土器の範囲にある土器かに見られる。しかし、充塡されている沈線文のあり方からみて、新崎系の残影をも持った土器と考えておきたい。曽利II期の中で把握しておきたい。



石器 (第25図3~9)

黒耀石製の石鏃(3)と石核(4)チャート製の石匙(5)安山岩製の打製石斧4点(6~9)が検出されている。石鏃は素材を2稜ある幅1.4cmの良好な縦長剝片を用いて製作されており、打面側に抉入部を作出している。尖端部にのみ両面加工を施し、体部はそのまま残されている。黒耀石の風化度からみて縄文時代の剝片ではなく、旧石器時代の縦長剝片を用いて石刃鏃様に製作したものと思われ、素材確保のあり方を物語るものとして興味ある資料と思われる。

第3号住居址の磨製石斧検出の量に対し、打製石斧の検出量の多い住居址であるが、破損しているものがほとんどである。黒耀石製の石核も大形の剝片を剝取したものとは思われず、石鏃の素材生産に伴う石核かと思われる。チャート製の石匙は表側刃部に素材面を大きく残し、裏側も剝離面がそのままで刃部に対しての細部調整はすくない。つまみ部に集中して加工痕があり、その作出が入念に行われている。

この時期の住居址における石器の組成を把握する良好な資料である。

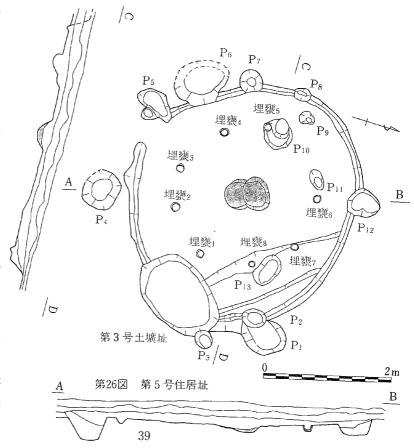
(5) 第5号住居址

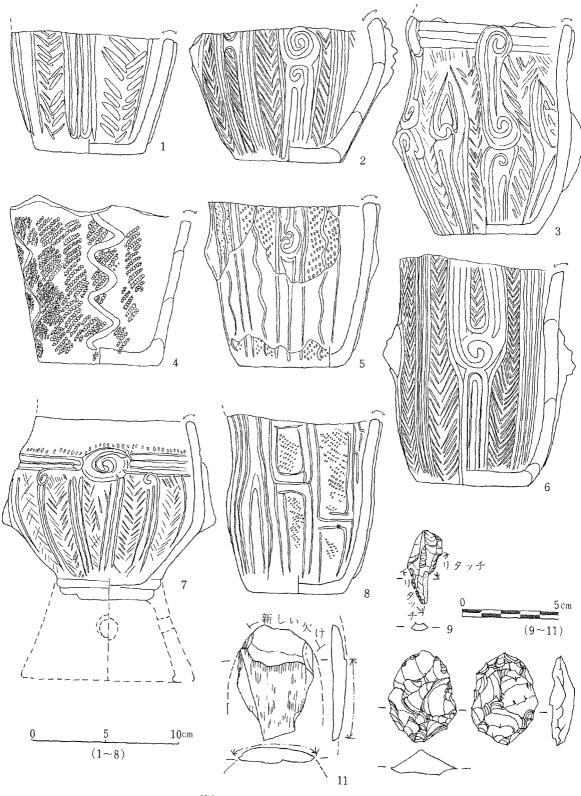
A. 遺構 (第26図)

東丘陵の鞍部が北の瘤状丘部に登ろうとする部分に存在する。地山のローム質黄褐色土はこの

付近から北にかけて砂 粒を多く含みながらないなり 堅緻に変換点に形成ないないで を換点に形成地山に表 ででれているがあかった故かがないないないないないないないないがで 類が薄かった故かはは、 でにした。 ででにした。

幅10~15cm深さ約10 cmの周溝は南で50cm切られるものの、東西 3.7m南北3.5mの円形 に近い楕円形を呈す る。東側の一部に残存 した壁高は約20cmを測





第27図 第5号住居址出土の遺物

る。そこから推定すると主柱穴と認定される $P_4 \cdot P_6 \cdot P_{12} \cdot P_1$ は基本的には壁外に設けられたものと思われ、4 本柱の対角、柱穴の真中間は4 mを測る。 P_4 及び P_6 の切り合い関係から、本住居址は西南で第2 号住居址を切り、南で第1 号住居址に切られているものと判断される。周溝の切れる南側は明瞭に出入口部を示しているものと思われる。

床面東北には段差数cmで北東側に落ちる小断層が2本認められるが、他の部分はよく敲き締められて堅緻である。中央には径約40cmの地床炉が二つ認められる。だが北側のものが新しく深さ15cmを測る。東辺を切る状態で存在する1.5m×0.9mの楕円形土壙は、周溝も切っており、先の小断層が土壙底部にも観察されなかったため、本住居址の付帯物でない。第3号土壙址と把握される。

本住居址の特異さは、床面に径約2mの円を描いて8箇の擬似口縁等の加工された小埋甕が行われていた事である。小埋甕は最小限の穴を掘り、はめ込むような状態で全て正位に据えられていた。覆土層中からの遺物出土はほとんど無かった事もあり、本住居址で得られた遺物は上記8箇の埋甕の他は微小破片の土器と小量の石器だけである。

本住居址の時期は、小埋甕から中期後葉曽利II期に比定される。

B. 遺物

土器 (第27図1~8)

図示した8個体の土器はすべて第5号住居址床面に円形に埋設されたものである。 $1 \sim 8$ はその埋甕番号と同一である。すべて上半部を欠いており、その欠損面はすべて研磨されていた。

1、2、3、5、6は基本的には同様モチーフの中にあり、4単位隆線の屈曲部に結節唐草文を持つ垂下文とその間に沈線あるいは半隆線を入れ、その間を綾杉状沈線文で充塡するものである。5は単節縄文を入れている。4は地文を単節縄文としながら4単位のやや巾広の、蛇行沈線を磨消状に垂下させている。又、7は台付の土器であった形跡で、垂下隆線は2単位、屈曲部にやはり唐草文の結節を配している。胴上半に唐草文を2単位配し横走する沈線で結んでいる。その上部は無文である。8は第4号住居址床面出土の土器(第25図2)と共通したモチーフの土器であり、縦位の半截竹管による区画文を行っており、その中に単節縄文を入れている。垂下する隆線も2単位見られ、H字状になるものかとも見えるものであるが、唐草文はつかない。8も第4号住居址の土器と同様、北陸の新崎系土器のモチーフ中にあるものと理解されるが、この第4.5号住居址例をもって、それを代表する曽利II期の独自な現象ととらえておきたい。

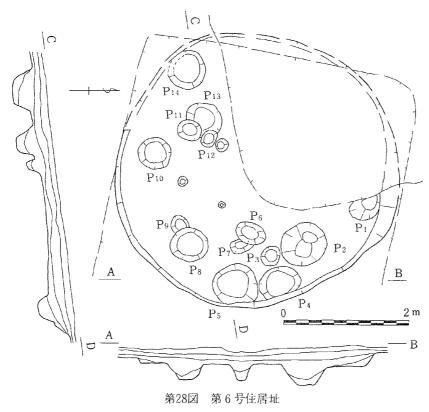
同様な新崎系の残存と思われるモチーフは第12号住居址においても見られる現象であって、その土器群のあり方はあるいはこの時期を代表できる一つの特徴であるものと把握できる。

石器 (第27図9~11)

黒耀石製の石錐 (9) 蛇紋岩製の磨製石斧片 (10) チャート製の両面加工石器 (11) が検出されている。磨製石斧片は、研磨痕の残るもので、使用中に剝落したものと思われる。チャート製の両面加工石器は細部調整も使用痕もなくその機能を、明らかにすることはできない。

(6) 第6号住居址

A. 遺構 (第28図)



東丘陵鞍部のほぼ中 央に存在する。ローム 質黄褐色土層中に掘り 込まれているものの、 第1号住居址及び第7 号住居址が重なってい るため残存状態は悪く、 プランも明確さを欠く。 本住居址及び後述す る第7号住居址は共に

本住居址及び後述する第7号住居址は共にプランが不明確で、当初は方形プランの平安期の住居址と大形土壙の切り合いとして追求した。

結果として検出し得 たプランは西半を第1 号住居址により破壊さ

れた東半部のみであるが、径約4mの円形を呈するものと推定される。したがって、第7号住居址の構築によってほとんど破壊し尽くされたと言ってもよい状況であり、東壁の一部が、円形プランとの重複によって、極めて複雑となって明らかにすることはかなり困難な状況にある。しかし、 $P_1P_2P_4P_5P_8P_{10}P_{14}$ などは壁面にそって円形配列をしめすのを見ると、明らかにこの第6号住居址附属の主柱穴であると理解することができる。重複関係にある住居址の好例としてなお今後の課題として残されている。遺物は土器片が少量得られたのみで特定することは難しいが、床面の凹み部に検出された一点をもって代表させておきたい。

本住居址の所属時期は、精査中に得られた遺物により曽利Ⅱ期と思われる。

B. 遺物

土器 (第31図1)

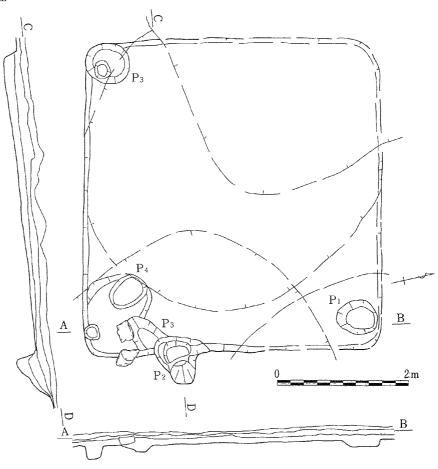
粘土紐を蛇行させ四単位貼付した胴下半の土器で、縄文を地文としている。第5 住No.4 の埋甕と沈線と隆線の異いであるが同一のモチーフである。曽利 II 期に所属するものとしておきたい。

(7) 第7号住居址

A. 遺構 (第29図)

東丘陵鞍部のほぼ 中央に存在する。 ローム質黄褐色土層 中に造られてはいる ものの残存状態は良 くない。

床面は第6号住居



第29図 第7号住居址

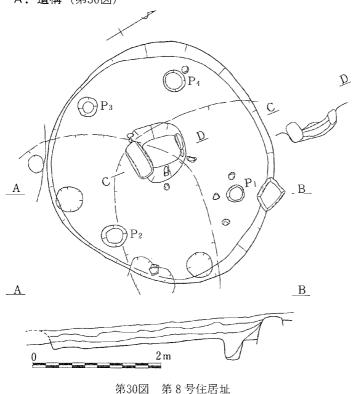
址覆土中にローム質土の貼り床を施したものと推定されるが、極めて軟弱であり、南東隅付近以外は明確さを欠いている。壁高はこの南東隅付近と南西隅付近で検出面より約20cmを測る。南東隅付近の東壁には壁に切り込んだ掘り込みと若干の焼土が認められるためカマド址とも思われるが、南東コーナーにも少量の焼土を伴う浅い掘り込みと砂岩の石材が存在するのでカマド址の可能性が高い。

柱穴の明確なものは南東コーナーに存在するもののみであるが、推定北東コーナーにも柱穴状 ピットが存在するので、四柱を基本とした上屋が想定される。

覆土層等から本住居址の時期を想定し得る遺物は得られていないが、第1号住居址との切り合い関係から第1号住居址にやや先行する時期が推定される。第1号住居址と第23号住居址が同時存在性を強くしているなかで、本住居址と第20号住居址は、同時存在性を先行する時期の存在としてみられる状況である。

(8) 第8号住居址

A. 遺構 (第30図)



北の瘤状丘部中腹のP-15グ リッドを中心に存在する。大粒 の砂を多く含むローム質黄褐色 土層中に砂粒を含む黒褐色土層 の落ち込みとして確認され、残 存状況は良好であった。

径約3.5mのほぼ円形を呈し、 壁高は検出面より東壁で25cmの 最大を測るが、南辺壁はかなり 流れている。南半は第16号住居 址を切り、東半は第18号住居址 を切っている。

床面の敲きは強くはないが残存状態は良好である。中心よりやや西に偏って石囲い炉が造られているが、軸は約20度東に振れ東と西の炉縁石は抜かれている。

柱穴はP1~P4で四本柱の構造をなし、出入口は南に開くものと推定される。覆土層中の遺物は少量であるが、他の住居址に比して石鏃がまとまって出土している。第31図2の深鉢形土器は床面直上出土である。

本住居址の時期は、床面直上土器より中期後葉曽利II期に比定される。

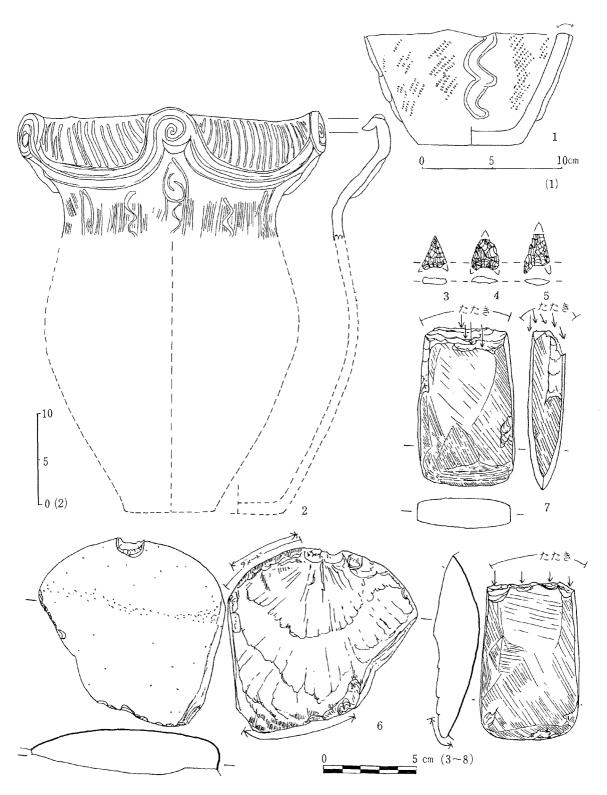
B. 遺物

土器 (第31図2)

床面直上の土器をもってその所属時期を明らかにしておきたい。 4 単位の隆線による 4 区画が口縁横帯に配され、それぞれが結節部に唐草文を配し内部を縦位の平行沈線としている。その上部に隆線の唐草文を入れ、これも四単位を構成している。その間に沈線による蛇行垂下文を四単位とし、その間は櫛描き条線文を充塡している。強く口縁の内弯する器形は、第 3 号住の埋設土器と共通するものであって、曽利 II 期に所属する独自性の強い土器である。

石器(第31図3~8)

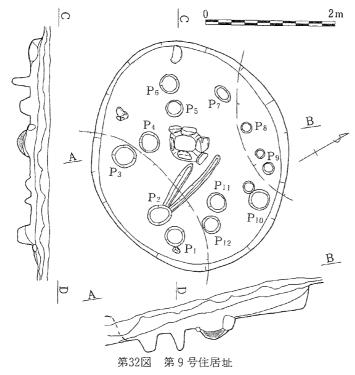
黒耀石製の石鏃(3、4)チャート製の石鏃(5)安山岩製の扇形石器(6)、流紋岩製の磨製石斧(7)が検出されている。この磨製石斧は頭部に著しいたたき痕が残りその衝撃で剝落している。大きく5回程の剝落がみられ、楔として材木に打ちこまれた結果の使用痕と思われる。



第31図 第6・8号住居址出土の遺物 6号住(1) 8号住(2~7)

(9) 第 9 号住居址

A. 遺構 (第32図)



北の瘤状丘部の西南斜面に存在する。大粒の砂粒を含む黒褐色土層中への砂粒を含む黒色土層の落ち込みとして確認され、残存状況は良好である。

南北3m東西3.5mの楕円形を 呈し、壁高は検出面より北壁で最 大35cmを測る。北三分の一は第11 号住居址を切り、南三分の一は第 10号住居址を切っている。

床面は黒褐色土層中に造られたため部分的にローム質土の貼り床をしているものの軟弱である。中央少しく西に偏って上辺約50cm四方の砂岩石材の石囲い炉が存在するが、炉の主軸は約35度東に振れている。

床面上には大小12箇の柱穴が見られるが整然さを欠いている。小振りの住居址の割には数が多過ぎるように思えるが、あるいは建替えの痕跡なのかも知れない。 P₂からは北に向かって 2本の溝が走っているが性格は不明である。

遺物は覆土層中から若干の土器片と、打製石斧が数点得られている。

本住居址の時期は、出土土器と住居址の切り合いから中期後葉曽利IV期に比定される。

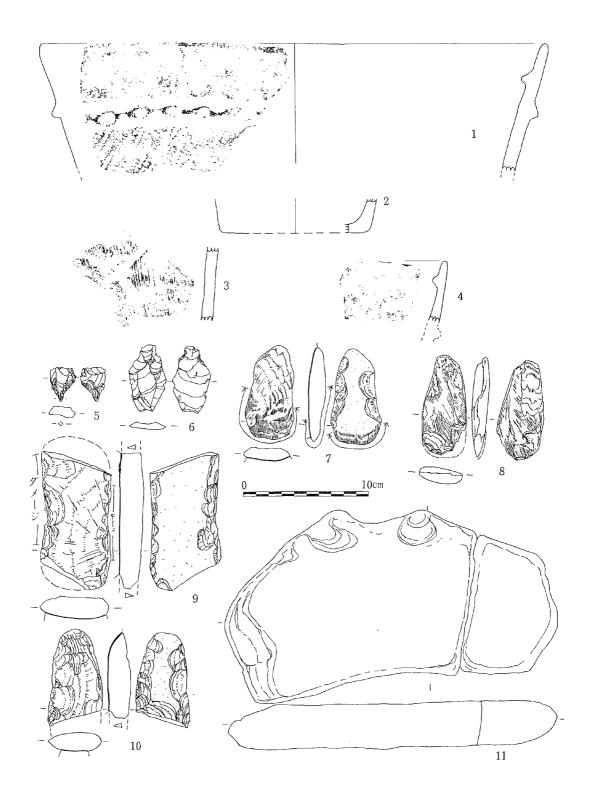
B. 遺物

土器 (第33図1~4)

縄文中期の資料群中、最も新しい資料を出した住居址である。図示したものは、基本的には口縁に無文帯を持ちその下部に一条の刻み目のある隆線のみを配し、それ以下は単節縄文あるいは 3のように櫛横条線文をもって行うものである。曽利IV期にその所属時期を求めておきたい。

石器(第33図5~11)

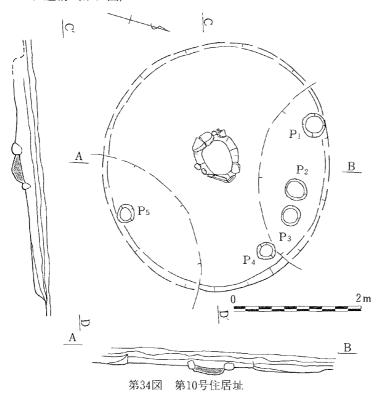
チャート製の石錐(5)と掻器状石器(6)安山岩製の打製石斧3点(7~9)蛇紋岩製の磨製石斧(8)砂岩製の蓋石2点(11)を検出している。7の打製石斧の刃部は過度の使用による磨耗痕が著しく観察でき、その機能もまた一つの大きな課題である。とくに石斧の表裏での磨耗範囲の異なりこそが、着柄の状況、使用角度等を物語っているように思う。。



第33図 第9号住居址出土の遺物

(10) 第10号住居址

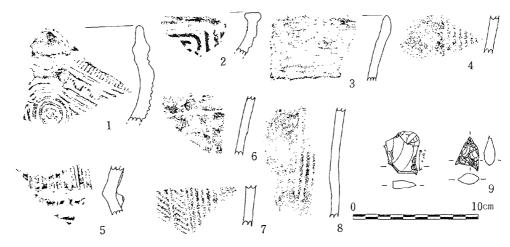
A. 遺構 (第34図)



北の瘤状部西南部のすそに 斜面が西方に大きく傾き出し たR-12グリッドを中心に存 在する。大粒の砂粒を含む黒 褐色土層中に砂粒を含む黒色 土の落ち込みとして確認され たが、残存状態は良好でない。 プラン上で比較的明瞭に把 握し得たのは砂岩の円形石囲 い炉址と、東壁の一部のみで あり、床面の敲きは弱く軟弱 で西端は斜面に流れている。 2m 東辺のカーブと軟弱な床面の 残存状況から推定すると、径 約3.7mの円形を呈するもの と思われる。北側三分の一は、 第9号住居址に、東南三分の

一は第4号住居址に切られており、本住居址に帰属すると思われる遺物は僅かに炉址内及びその 周辺で得られた土器の小破片若干と小形の石器のみである。

炉址の残存状態は、他の住居址に比して良好であった。しかし炉縁石は一部にしか残っておら



第35図 第10号住居址出土の遺物

ず完全ではない。炉縁石は他の残存炉址と共通で、第三紀層中から産出するもろい砂岩を用いている。北側と南側が大きく抜かれていて、他は割れているか小礫となっている。多くの場合残存する炉縁石は、そのような火熱によって割れたものか、小礫であるが、あるいは再利用できるしっかりした炉縁石は、移動に際して持ち去り、再利用できもののみ廃棄の為残存しているとみることもできる。住居廃絶の何等かの儀礼の存在をうかがわせる。

本住居址の帰属は明確さを欠くが、炉址内遺物より中期前葉末と推定される。

B. 遺物

土器 (第35図1~8)

第10号住居址出土の土器は、五領ケ台期の中にある土器で、1~3は口縁部の土器である。1 は波状口縁をなすものであり、2、3は平口縁である。1は黒褐を呈し内面は研磨された良好な 土器で棒状施文具による渦文と三角陰刻文、口唇に並ぶ刻み目が特徴である。三角陰刻文上には 単節縄文が地文状に行われている。4~8などは押し引きによる半截竹管の平行沈線をモチーフ としていて、第4類のB、F等にあたる土器片である。総じて半截竹管の押し引きが多用されて いるのが留意される。また地文に縄文を行ったものも多く、第4D類の範囲の土器も多い。

2 は浅鉢かとも見られるが、明らかではない。他は深鉢である。胎土にはほとんどが長石、石 英粒を含み、調整された粘土を用いていることがわかる。

石器 (第35図9、10)

チャート製の掻器状石器 (9) と黒耀石製の石鏃 (10) が検出されている。石鏃の厚さが 9 mm もあるものは筏遺跡では本例のみで、石鏃としてより他の機能の石器と考えたい。

(11) 第11号住居址

A. 遺構 (第36図)

北の瘤状丘部西南の斜面 P-12グリッドを中心に存在する。大粒の砂粒を含む黒褐色土層中に大粒の黒色土層が落ち込む状態で確認されたが、かなりの傾斜面に営まれたため残存状態は良好でない。

壁は弧を描いて斜面上方の北東部のみの確認に留まるが、壁高は検出面より最大で30cmを測る。 床面は敲き締めが弱く軟弱であると同時に約5度の斜度で西南に傾いている。北東壁裾が描く弧 と軟弱ながら追える床面の範囲を勘案すると、プラン南端は第9号住居址に切られてはいるが、 約直径3.5mの小規模の円形プランが想定される。

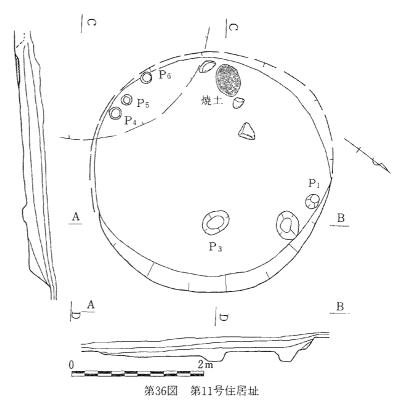
住居址の中心部付近は空白で炉址等の施設は確認されず、地床炉状の焼土が床面の西端ほとんど推定西壁に接する位置に存在する特異な状態を示している。床面に掘り込まれた本住居址に付帯する確実な柱穴は東半部に観られる3箇だけであり、これらより上屋を載せる構造を窺い知ることは難しい。

遺物は覆土層中より若干の土器片を得たが、床面直上において焼土に南接して石皿残欠、及び

中心部において第37図1の 大形土器破片が得られている。

本住居址は、第9号住居 址及び第10号住居址ととも に、西に大きく傾く斜面に 立地しており、環状高地の 鞍部を利して形成された縄 文中期の各時期の集落にお ける個別棟の配置を知る上 で留意される。

本住居址の時期は、出土 土器片の型式より、縄文中 期後葉曽利II期と比定され る。

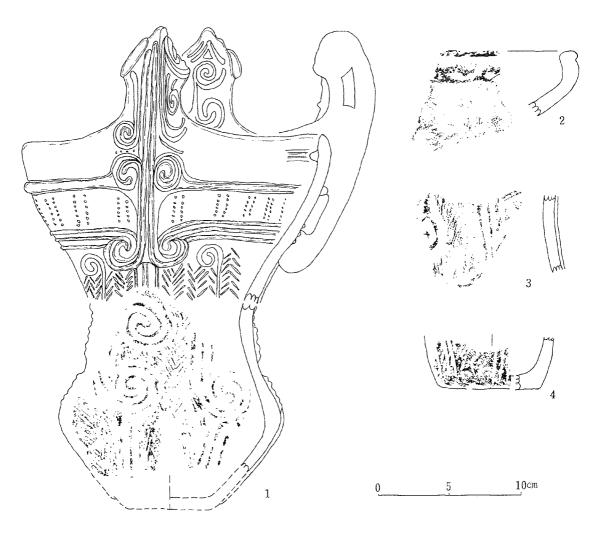


B. 遺物

土器 (第37図)

本住居址出土の土器はすべて破片であるが、一個体と見られる1をもって代表させることができる。この土器は、唐草文をテーマとする2個一対の把手状突起と胴部の隆線による唐草文とその間の綾杉状沈線文が特徴的である。把手は左右対称になる唐草文となっており、内面には沈線による唐草文を配している。突起はむしろ亀頭状であって、あるいはそれを意識したデフォルメであるかとも受けとれる。口縁部は無文帯となり、強く開口するがやや先端で内弯する。内側に隆線が一条口唇にそって貼付されており、把手状突起部分では山形に行われている。外面の口縁部には、それぞれ唐草文から伸び出すように、隆線が口縁部に平行して一条と三条貼付されている。その間に二列一単位の棒状刺突文が入れられてもいる。胴部は一端強くしまり、腰部でふくらみ、屈曲して底部に至る器形となっている。胴部文様は三条の隆線を単位として、周囲4単位を垂下させ、唐草文の結節部を屈曲部に配している。その間に同様沈線によるワラビ手状垂下文をおろし、その間戟を綾杉状沈線文で充塡している。曽利II期に属す典型的な中央山地北部に核のある土器であって、筏遺跡の独自性を感じさせる土器である。

2はよく研磨された無文の土器で浅鉢と見られる。3は1と同様モチーフの土器片であるが、 綾杉状沈線文は非常に細かく特徴的である。4は平行沈線と蛇行沈線と地文の縄文の施文構成の 底部片である。



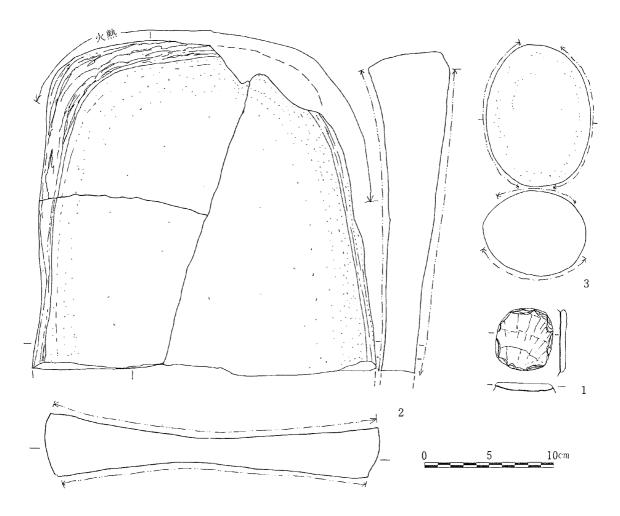
第37図 第11号住居址出土の遺物①

石器 (第38図)

砂岩製の石皿(1)花崗岩製の磨石(2)安山岩製の石製円板(3)が検出されている。

石皿は土尻川流域に産する黄褐色のもろい砂岩を用いて製作されている。筏遺跡からは5点の石皿が検出されているが、住居址内からは本例と第12号住居址例のみでしかも大形である。皿部は両側から研磨され中央部が磨り減って底がぬけそうになっており、その用途が注目される。なお石皿の縁部を中心に上半部が火熱を受け赤く変色している。2は花崗岩製の磨石で両平面に使用のための摩耗痕がある。磨石にはこのほか、花崗岩の円礫を用いたもの、砂岩を用いたもの、そして大小偏平なもの、丸いものなどがあってバラエティがある。

石製円板が1点検出されている。板状の安山岩の剝片の周辺を打ち欠き円板状に仕上げてあり、側面に研摩痕がある。筏遺跡では本例のみである。その使用目的は明らかでない。今後の研究課題である。



第38図 第11号住居址出土の遺物②

(12) 第12号住居址

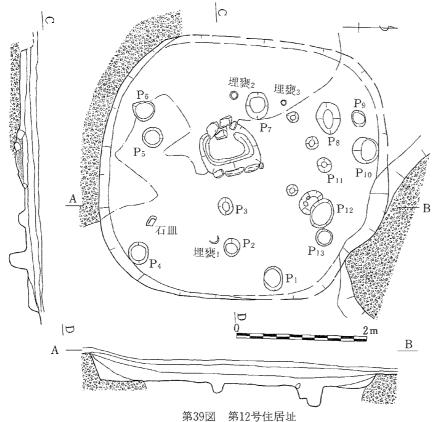
A. 遺構 (第39図)

東丘陵の鞍部南端、南の瘤状丘部の裾に存在する。礫岩ブロックの間の礫を含む黄褐色ローム 質土を掘り込んでおり、残存状態は比較的良好である。

4.4×4mの隅丸方形を呈し、壁高は礫岩ブロックを削り込んだ北壁で20cm、同様に南壁で40cmを測る。床面はやや凹凸は多いもののよく敲き締められ堅緻である。中央よりやや南西に寄って砂岩による方形石囲い炉が設けられるが、炉底部には周溝があり、その軸は住居址軸との間に約20度のズレを持っている。柱穴は主要なものが9箇存在するが、西半の3箇北辺の3箇東南隅の1箇の7箇で上屋を載せていたものと推定され、開口部は東に想定される。

遺物は、床面に石皿の残欠が得られた他、炉址の西北に2箇、東方に1箇の計3個の小埋甕が 検出された。

本住居址の時期は、小埋甕から縄文中期後葉曽利II期と比定される。



B. 遺物

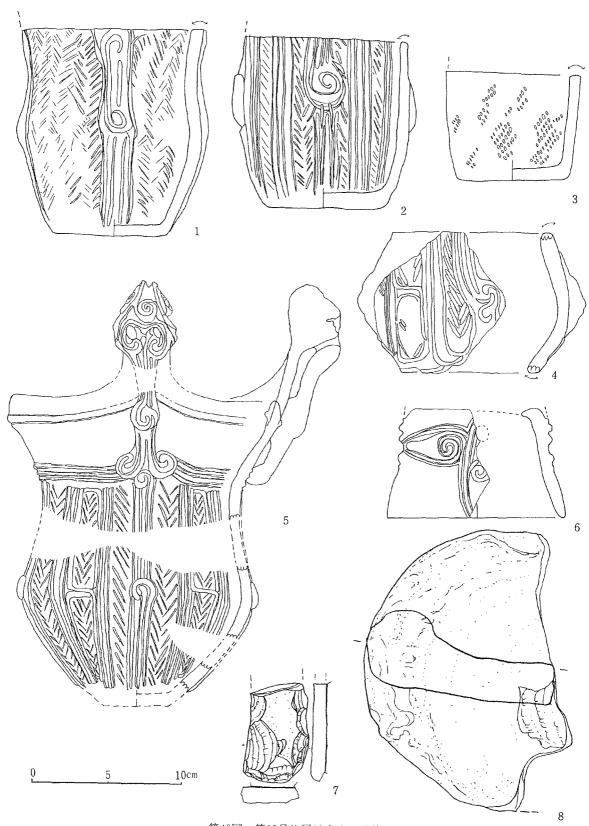
土器(第40図1~6) 第12号住居址から得 られた一括資料は良好 な資料である。2、3、 4は床面の埋甕で、同 時性を表わしている。 5は破片として得られ た同一個体と見られる ものの図上復元資料で ある。

1は4単位の唐草文の結節を持つ隆線の垂下文とその間を充塡する細かい綾杉状沈線文で構成されたものである。胴部でややしまり、腰部で弱く張る器形である。上半は欠失して

いる。欠失部の切断面は研磨されている。 2 も同様モチーフの土器であるが、四単位垂下隆線の間に細かい半隆線を垂下させ、その間を綾杉状沈線文で充塡している。屈曲を感じさせない器形であるが、欠失上部で胴部がしまり、やがて開口する器形と見てよい。 3 は小さな土器で器表面には単節縄文がまばらに施文されているばかりである。 4 は屈曲の張る腰部破片である。垂下隆線の結節部に唐草文を持っており、 4 つの単位間は、半截竹管による縦形区画文が行われ、その内部に綾杉状沈線文を入れたものである。この種のモチーフは度々ふれて来たように、綾杉文を除けば、北陸系の新崎期に多用された区画文である。これは 5 にも見られ一つの大きな残影としての特徴とみることができ、注目されるべきである。 5 は 2 個一対の把手が付く唐草文把手の土器で、先にふれた縦区画を胴部にもつこの期の、あるいは筏遺跡の特徴的な土器である。 6 は一孔を持つ台付土器の台である。 唐草文を配している。 曽利 II 期と把握しておきたい。

石器 (第40図7、8)

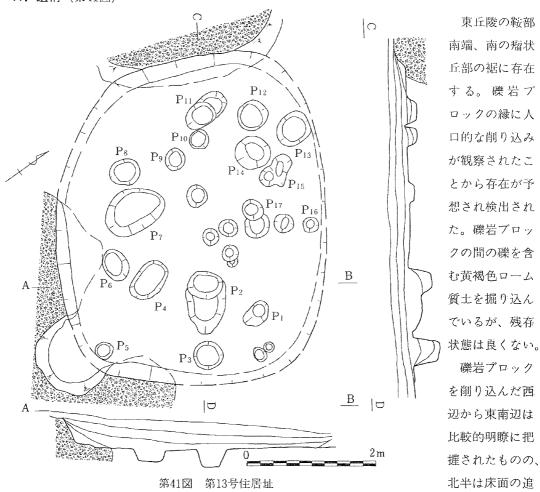
石器は安山岩製の打製石斧 (7) と砂岩製の石皿 (8) の2点が検出されている。筏遺跡からの石皿はその石質の特徴上全て破損して検出されており、本例もそうした一つである。右半分が欠失している。石皿は土尻川流域の砂岩を用いている。打製石斧は基部を欠いている。



第40図 第12号住居址出土の遺物

(13) 第13号住居址

A. 遺構 (第41図)

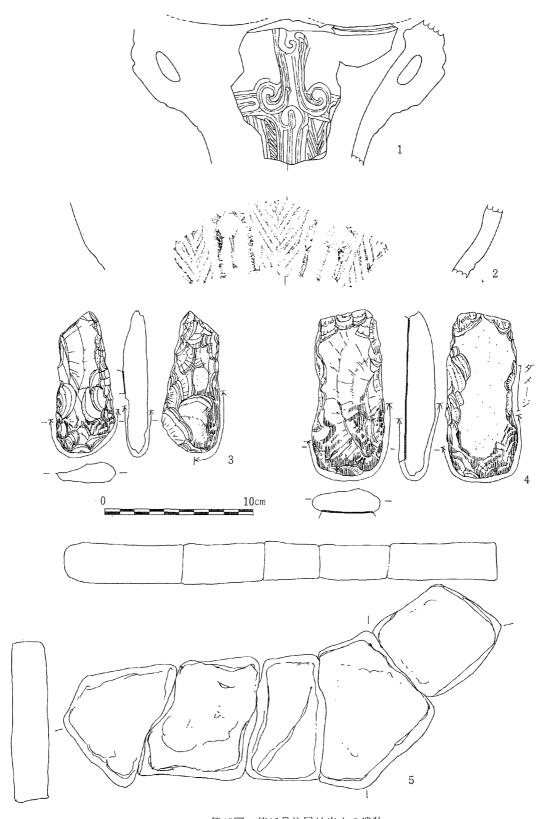


求により補足したもので明瞭さを欠くが、5×4.2mの隅丸長方形に近い楕円形が想定される。 壁高は礫岩ブロックを削り込んだ西壁で20cm、同じく南壁で45cmを測る。

砂礫混りの黄褐色ローム質土を敲き締めたと思われる床面は堅緻であるが、住居址推定域内に 焼土痕等は観察されず炉址の存在も不明である。床面には20を越える柱穴及び小土壙状の掘り込 みも観察されるが、主柱穴を想定できるものは、西辺から南辺及び東辺の径40~50cmの掘り込み と思われるが、同規模のものが東辺で捉えられている点に不満が残る。

覆土層から得られた遺物は僅少であるが、土器小破片、打製石斧、加工された板状砂岩等があり、第42図4の打製石斧は、南壁法面下であたかも置かれた状態で検出された。なお第113図8の石棒は表土剝ぎ中に出土したものであるが、本住居址の覆土層中に含めて考えられるものである。

本遺構は炉址の所在が不明であるので確実な住居址条件を整えていないものの、その時期は出土遺物から、中期後葉曽利II期と推定される。



第42図 第13号住居址出土の遺物

B. 遺物

土器 (第42図1、2)

検出された土器片は少量であったが、図示したものを代表させておきたい。1は唐草文把手を 持ち綾杉状沈線文の行われた胴上部破片、2はその下部破片である。モチーフは同様構成である が、2はかなり大ぶりの器体を想定できるものと思う。曽利II期の所産である。

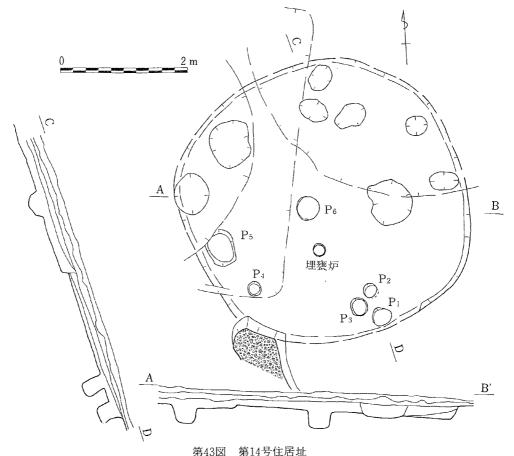
石器(第42図3~5)

頁岩製(3)と安山岩製(4)の打製石斧が1点ずつ検出され、土尻川流域産の黄褐色砂岩製の蓋石が1点検出されている。石斧には表裏に著しい磨耗による擦痕がみられる。

(14) 第14号住居址

A. 遺構 (第43図)

東丘陵鞍部の中央付近に存在する。 黄褐色ローム質土層中への落ち込みとして確認されたが、 本住居址内には枯れ木の根が存在した事と、 複数住居址が切り合っていた事が重なり残存状態は 良くない。西半を第6号・7号住居址に切られ、北半を第3号住居址に切られているが、確認できた



東壁辺と礫岩ブロックへの削り込みにより、径4m内外の円形乃至は楕円形プランが想定される。 床面はローム質土を敲き締めてはいるもののやや軟弱であるが、想定プランのやや南西に偏っ て埋甕炉が設けられている。柱穴は3箇確認されたもののその構造は窺い得ない。

本住居址の時期は炉胎土器より縄文中期前葉新崎期に比定される。

B. 遺物

土器 (第45図1)

1は炉胎土器である。胴部下半を欠失しているが、ほぼ全容を推測できるものである。口縁は平口縁であり、細かい半截竹管による平行隆線とそれに刻み目文が多用され、無文帯に楔形刻目文が盛行する。ややキャリパー形器形が残り、胴部はやさしく張って底部に至る。胴部の文様構成はB字状文の縦割付を半割竹管で行っている。地文は縄文となっており、典型的な新崎II式期の土器である。信濃でもこれまで搬入土器そのものと思われる土器は検出されておらず、本例は極めて重要な所見を与える土器であると言え、注目に価する。

石器 (第45図2)

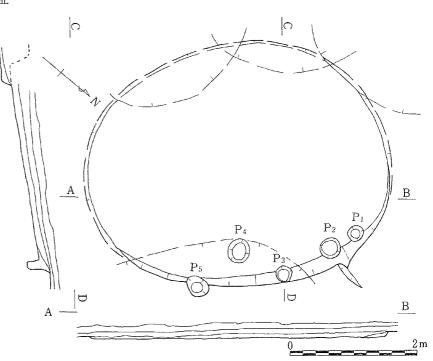
安山岩製の打製石斧(2)が検出されている。石斧の磨耗痕は素材両側に大きく残りその使用 方法を物語る資料である。

(15) 第15号住居址

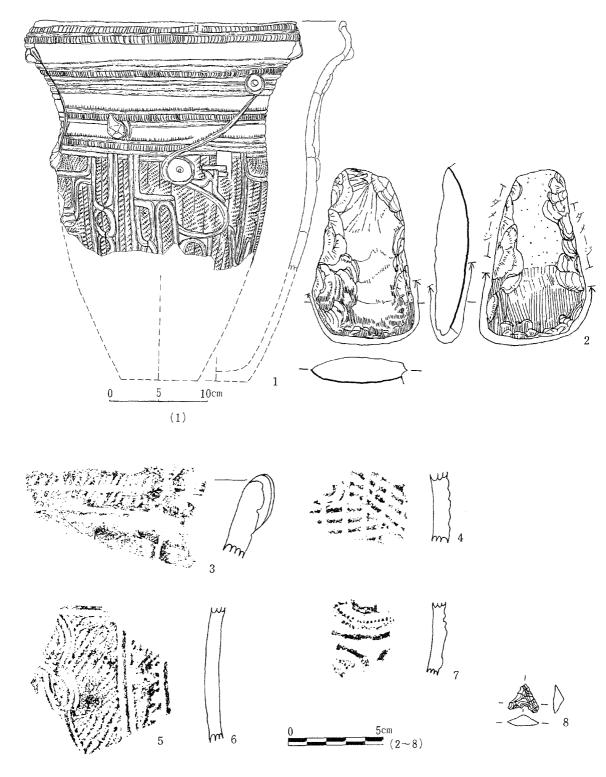
A. 遺構 (第44図)

東丘陵鞍部の北 西、北の瘤状丘部の 南西麓に存在する。 砂粒を含む黄褐色 ローム土層中までき して造られて等が でる がったため残存状態 は良好でない。

床面は軟弱で斜面に向かって南西に流れるため、東から北壁のみの把握であるが、4.7×3.7mの楕円形を呈するものと推定され、長軸は約



第44図 第15号住居址



第45図 第14·15号住居址出土遺物

60度西に振れている。壁高は残存する東壁で15cmを図るが、東壁で第16号住居址を切り、西辺を第9号・第10号住居址に切られ、南辺を第4号住居址に切られている。住居址想定域内に焼土痕等炉址を想定できるものは確認されていない。柱穴は北壁沿いに4箇確認されているのみで全体の構成は不明である。遺物は土器小破片数点と石鏃1点が得られているに過ぎない。

本住居址の時期は、遺物と住居址の切り合いから縄文中期前葉が想定される。

B. 遺物

土器 (第45図3~6)

小破片数点のみで明確さを若干欠く。地文に縄文を持つB字文風のもの(5)格子目文(4) こまかい刻み目を持つもの(6)など、新崎系の土器群と把握しておきたい。1も口唇に刻み目 の並ぶもので、該期に属するものとしておきたい。

石器 (第45図7)

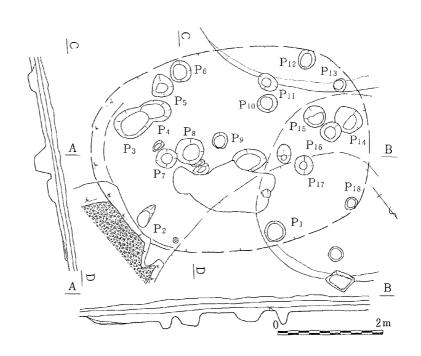
黒燿石製の石鏃が1点検出されている。全長1,2cmと小さなものである。

(16) 第16号住居址

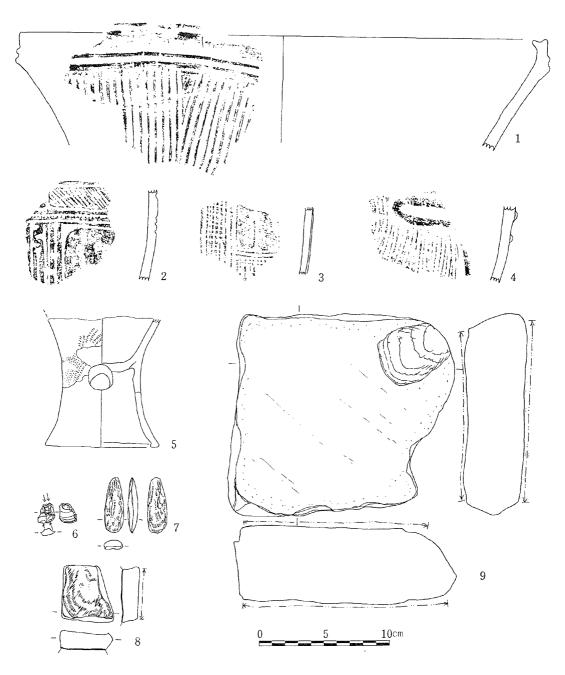
A. 遺構 (第46図)

東丘陵鞍部の北の瘤状丘部の南斜面中位に存在する。砂粒を含む黄褐色ローム質土層にまで達 して造られているが、斜面中位の表土が薄かったためと、枯木の根ばり撹乱があったため残存状 態は良くない。

北半は第8号・第 18号住居址に切ら



第46図 第16号住居址



第47図 第16号住居址出土の遺物

れ、西辺は第15号住居址に切られている。軟弱な床面には焼土痕等炉址を想定し得る施設は確認されず、柱穴址も数は多いが整然さを欠いている。床面上より小土器片・小形石斧等が出土した。本住居址の時期は、出土土器片と住居址の切り合いから縄文中期前葉に比定される。

B. 遺物

土器 (第47図1~5)

検出された土器は小量であって、その上若干の時間差を感じさせるものとして明瞭さを欠いて

いる。しかし、2は細かい縄文を地文にもち、細かい刻み目文縦区画の陰刻文、3は明らかな格子目文であり、14、15号住居址と同様にして新崎系の土器群とみられる。この住居址がともども 北陸系の土器に若干の関東系の五領ケ台土器群を検出できるのを留意しておきたい。

石器 (第48図6~9)

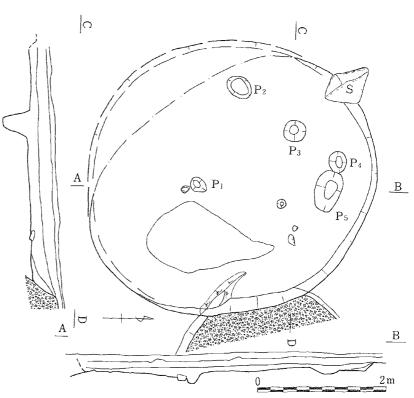
黒耀石製の楔形石器(6)蛇紋岩製の小形磨製石斧(7)砂岩製の磨石(8・9)が検出されている。小形磨製石斧は刃部が丸のみ状を呈し、その形状から加工用の道具であろう。

(17) 第17号住居址

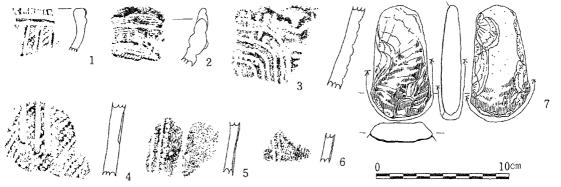
A. 遺構 (第48図)

東丘陵鞍部の北端、北の 瘤状丘部南西斜面の上位に 存在する。含砂粒黄褐色 ローム質土中に造られてい るが、西南が斜面に流れて いるため、残存状態は良好 でない。

4.6×4.3mのやや楕円形に近い円形を呈し、壁高は砂岩ブロックを削り込んだ東壁で40cmを測る。床面は黄褐色ローム質土中に造られているにもかかわらず、砂質性が強いためか、敲き締めが不充分で軟弱である。床面上には焼土痕等炉



第48図 17号住居址



第49図 第17号住居址出土の遺物

址を想定できる痕跡は確認されていない。6本確認された柱穴の内、西半で直に並ぶ3本が主柱 穴と推定されるが、東半は枯木の板根による撹乱もあり対応するものが確認されていない。他と 少しく距離を置く本址は第22号住居址と共に東丘陵遺構群の北限をなしている。

本住居址の時期は、出土土器から中期前葉が想定される。

B. 遺物

土器 (第49図1~6)

検出された土器片は極めて小量であって、その所属時期については確定がむづかしい。しかし 図示した土器片は地文に縄文を持ち、押し引きの平行沈線、列点文、そして結節の葉脈状の縄文 など、五領ケ台期の土器に多用されるものである。この時期の所産としておきたい。

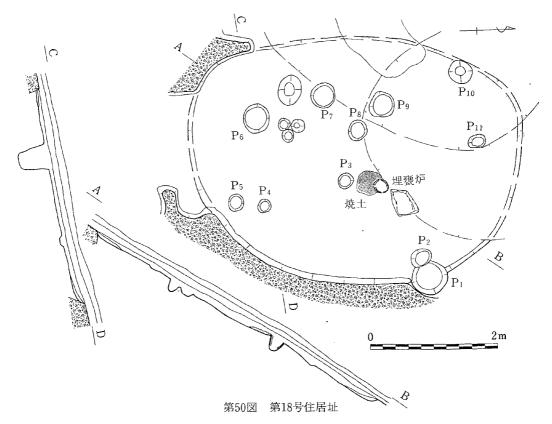
石器 (第49図7)

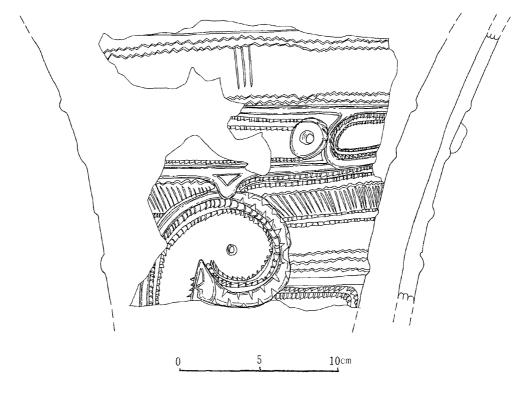
安山岩製の打製石斧 (7) が1点検出されている。磨耗痕は剝離面中央にまで及んでいる。

(18) 第18号住居址

A. 遺構 (第50図)

東丘陵鞍部の北辺、北の瘤状丘部南斜面の上位に存在する。砂岩ブロック間戟の大粒の砂粒混り 黄褐色土層中に、砂岩ブロックを削って造られており、西半を第8号住居址に切られるものの





第51図 第18号住居址出土の遺物

残存状態は比較的良好である。

北壁の大部分と南東壁の一部を砂岩ブロックを削り込んで形成されている本址は、5.2×3.8m の楕円形を呈し、長軸は約80度振れてほぼ東西方向を向く。壁高は砂岩ブロックを削り込んだ北壁で約20cmを測るものの南壁は流れて不明である。西三分の一を第8号住居址に切られ、南辺で第16号住居址を切っている。

大粒の砂粒混り黄褐色土で形成される床面は締りはないものの、下部に砂岩が存在するのか安定している。中央やや西に偏って径40cmの焼土塊があり、その西辺に埋甕炉が設けられている。埋甕炉の西北に接して40×35cmの不整方形に削り残された砂岩ブロックが存在し、埋甕はその砂岩の東面を削って据えられているので両者の関係は留意される。柱穴は径約40cmのものと約20cmのものが認められるが、前者を主柱穴となし東に開口したものと推定される。

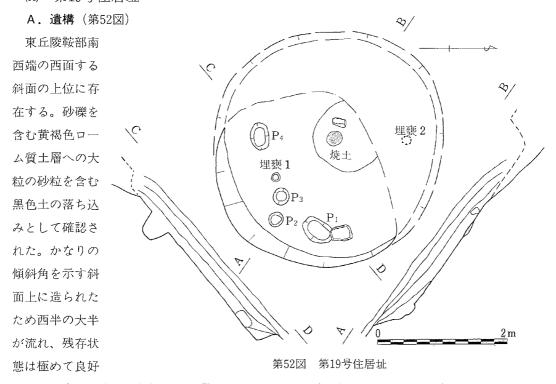
本址の時期は、炉胎土器より縄文中期前葉勝坂期と比定される。

B. 遺物

土器 (第51図)

第51図の土器は炉胎土器である。上半と下半を欠いた胴部のみの土器であるが、区画文と鋸歯文が盛行し、胴部の渦文のモチーフはそのものであると言える。胎土は全体に赤褐色を呈し、他に同一個体の破片も数点あるが接合には至らない。勝坂期の所産と把握しておきたい。

(19) 第19号住居址



でない。本址は東丘陵住居址群の最も西端に在ると同時に最も急斜面に存在する。

確認し得たプランは斜面上部の東壁の弧と床面東半であるが、東壁の弧から推定される形状は、 径約3.8mの円形で、壁高は東壁で検出面から30cmを測る。本址は鞍部南部の遺構群からは一定 の距離を置いており、他遺構との切り合いは認められない。

床面は、東辺の一部以外はおそらく貼り床をしていたものと思われるが流れており、東辺の床面をなすと思われる砂粒混り黄褐色ローム層も敲きが弱く軟弱である。推定住居址域中央には焼土の堆積とその西に砂岩石材が存在しているが、石囲い炉の痕跡と思われる。柱穴は東半に4箇認められるものの全体の構造は窺い知れない。

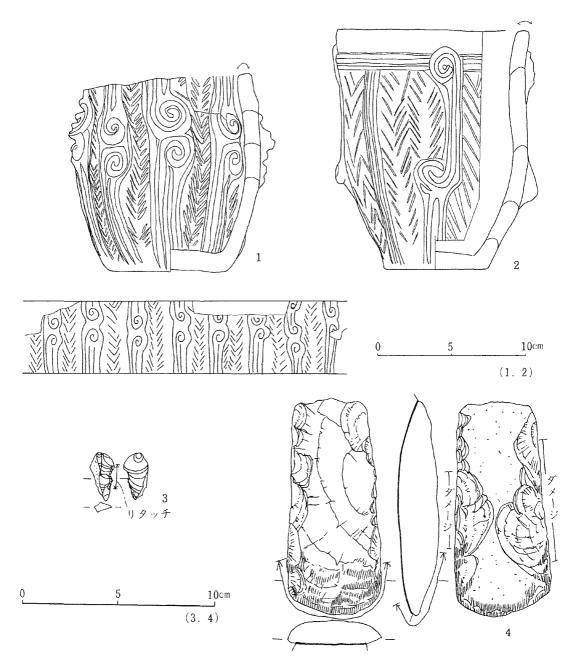
遺物は小埋甕2点と打製石斧1点等が得られたが、小埋甕の内第53図2は東南に正位で存在し、第53図1は西北に正位で存在すると同時に西接して砂岩の板状節埋を利して周辺を丸く加工した径50cmの蓋石を伴っていた。

本址の時期は、小埋甕2箇の型式から縄文中期後葉曽利II期に比定される。

B. 遺物

土器 (第53図1、2)

埋甕2点をもってこの第19号住居址を代表させておきたい。埋甕1は唐草文の結節垂下隆線を 8単位めぐらし、その間に綾杉状沈線文を充塡した土器である。器形は腰が張り胴部がくびれ口 縁が開口するもので一対の把手を持つものと考えられ、埋甕2も基本的には同様の土器である。



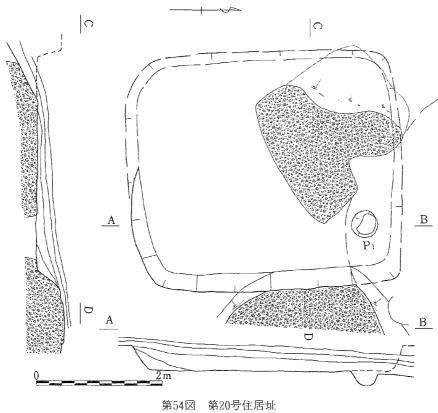
第53図 第19号住居址出土の遺物

2は4単位の唐草文結節を持つ垂下隆線をモチーフにしていて、その間に半截竹管による押し引きの半隆線を三本入れその間を綾杉状沈線文で埋めているものである。ともに破断面は研磨されている。この種の埋甕を持つ住居址が多く注目されるところである。曽利II期としておきたい。石器(第53図3、4)

黒耀石製の掻器状石器(3)と安山岩製の打製石斧(4)が1点ずつ検出されている。石斧の刃部は表裏ともに使用による磨耗痕が観察できる。剝片利用の掻器状石器はノッチ状である。

(20) 第20号住居址

A. 遺構 (第54図)



東へ在ッツ混掘れさをまはいてのすククりりたれ認り極いると囲褐んのがす残ていめるに、めてと、のがす残てをおしてがすると、とは、る存良をないがない。

礫岩ブロック を削り込んだ東 辺の一部と砂礫 混り黄褐色土層 を掘り込んだ東

南コーナーの把握から、4.2×3.8mの方形に近いプランが想定される。礫岩を削り込んだ東壁は、ブロック縁より40cmの壁高を数えるが、プラン北に観られる礫岩ブロックを平坦化した面を勘案すると貼り床がなされたものと思われる。東南コーナーには薄すらと土層に火熱を受けたと推定される部分が観察されたので、カマドは東南隅と考えてよいように思われる。

出土遺物が皆無の本址は、不確実ながら第7号住居址と同時存在関係が想定される。

(21) 第21号住居址

A. 遺構 (第55図)

東丘陵鞍部南西への斜面肩部に存在する。第20号住居址と同様にして、礫ブロックと礫ブロック周囲の砂礫混り黄褐色ローム質土層を掘り込んで造られたものと推定されるが、痕跡を認定するに止まり、残存状態は極めて良くない。

南辺は礫岩ブロックを削って壁とし、床面掘り方の南半は礫混り黄褐色ローム層を掘り込んでいるものの、北半は鞍部中央方向と西斜面に流れて不明である。南壁で確認される壁の弧から推定すると、径5.4mの円形プランが想定され、壁高は一段高い礫岩ブロック上縁より50cmを測る。

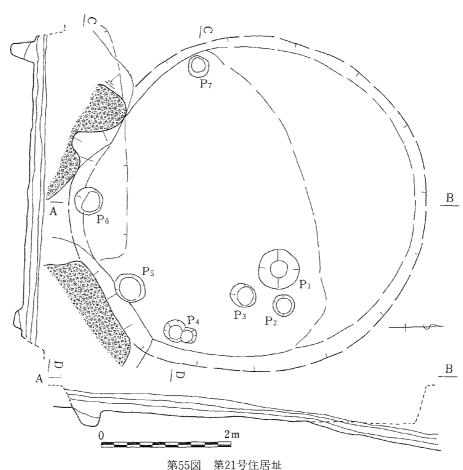
想定プランの上で第20号住居址は本址の南辺を切るが、第20号住居址は低い方の礫岩ブロック上 に載っているため、本址の覆土層には及ぶものの床面にまでは達していないものと思われる。

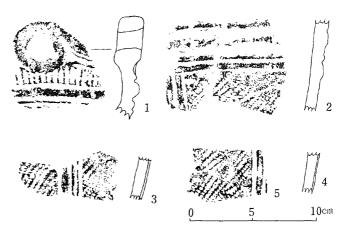
残存状態が良 くないにもかか わらず得られた 土器片から縄文 中期前葉が想定 される。

B. 遺物

土器 (第56図)

検出された土器片はこの住居址も極めて小量であったため、その所属時期を明確にすることは難しい。しかし図示した小量の土器片を手がかりとするならば、半截竹管の押し引きによる平行沈線とその地文とする縄文の組み合わせから五領ケ台期の多縄文期、第4E類土器の時期に所属するのではないかと予測しておきたい。

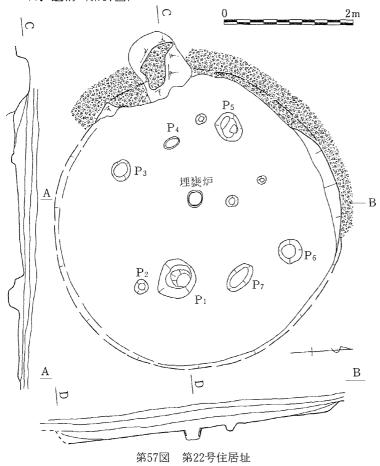




第56図 第21号住居址出土の遺物

(22) 第22号住居址

A. 遺構 (第57図)



東丘陵鞍部の東北方、北の 瘤状丘部の東南斜面中位に存 在する。北の瘤状丘部の成因 と推定される砂岩が、東南方 向に引かれて小断層を形成し た小断層間のやや平坦なプ レート上で小断層崖を壁とし て構築されている。

径4.5mの円形を呈し、壁高は一番高い砂岩ブロック上端より25cmを測る。北壁から西壁にかけては砂岩の小断層崖を若干加工して利用したものと思われる。本址が載る砂岩プレートは、第18号住居址と同位であるが、本址が載る部分の方が堅緻である。

したがって本址の床面はプレートを北半で少し加工し、 南半で若干の貼り床をしたも

のと推定され、内部施設はこの軟弱なプレートを掘り抜いている。床面中央よりやや西北に寄って埋甕炉が据えられ、柱穴は主要なものを8箇数えることができる。埋甕炉を中心に約2m間隔で四角形を構成する柱穴が主柱穴で、その三辺中間に観られる三つの柱穴は柱間支柱と思われ、支柱の無い南東方向は出入口部が想定される。柱の構成軸線は磁北より約15度西に振れている。

遺物は主に床面直上で得られ、土器小片・磨製石斧残欠・砂岩製石棒残欠に凹石状の加工が施されたもの等があるが、その量は僅少である。

本址の時期は、炉胎土器により縄文中期中葉上山田期に比定される。

B. 遺物

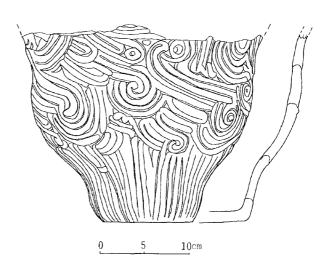
土器 (第58図)

北陸系の典型的な上山田II期の土器が、炉胎土器として検出されている。口縁部上半を欠いてはいるが、その形器は底部から腰部にかけて段状に屈曲し、胴部でややしまり強く開口する極めて特徴的な器形となっており、器面は半截竹管による三叉状彫去文を持つ渦巻文、最盛期の在り

方をしめしている。この炉胎土 器は、筏遺跡の性格の一端を物 語っている。

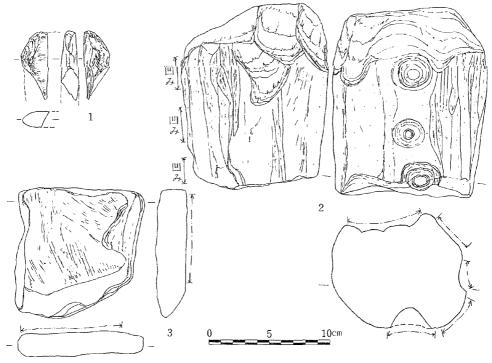
B. 石器 (第59図)

頁岩製の磨製石斧片(1)砂岩製の磨石(2)と多孔石(3)を検出している。磨製石斧片は頭部付近と思われる。多孔石は3つの孔があけられ、器体全域にわたり研磨痕が残る。 磨製石斧の刃部を研磨したような幅の広い条痕が右側に7条、 裏面に3条みられ、砥石としての機能が考えられる。後遺跡で



第58図 第22号住居址出土の遺物①

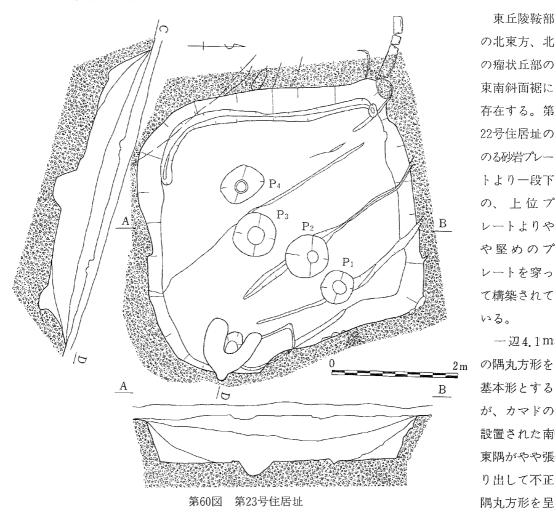
は他に砂岩の板状磨石群の中に砥石様のものもみられるが、この様に幅広い条痕は本例のみである。



第59図 第22号住居址出土の遺物②

(23) 第23号住居址

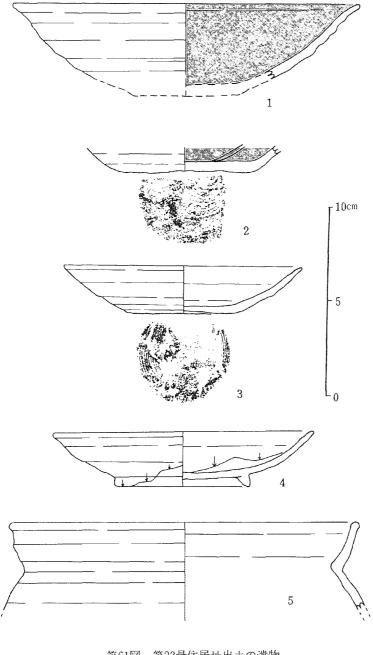
A. 遺構 (第60図)



し、主軸は約10度西へ振れている。四周全て砂岩を穿った壁は垂直に近く、その高さは北壁で70 cm、南壁で60cmを測る。本址は鞍部の東北の崖に孤立的にあるが、南西辺で縄文期の第27号住居址を切っている。

掘り抜いた底面に貼り床構造は無く、砂岩の面を床面としたようである。傾斜方向に沿う雨水地下水等に最も影響を受け易い西から西南壁裾と、カマドに隣接する東壁裾の一部にのみ、幅15 cm深さ10cmの周溝が造られている。カマドは南東隅に粘土にて据えられ、北側の壁沿いに浅い掘り込みが行われている。

床面には径50~70cm深さ20~25cmの掘り込みが中央付近に4箇整然さを欠いて存在する。壁外の砂岩プレートを精査したが柱穴状のピットは皆無であるため、先記4つの掘り込みは柱穴の可能性もある。本址は遺物の接合関係から第1号住居址との同時性が証明されるので、確認された



第61図 第23号住居址出土の遺物

4つの掘り込み以外の施 設により第1号住居址同 様の柱構造による上屋を 想定しておきたい。

本址の壁から床面には 4本の北西から南東に走 る地割れ断層線があり、 内 I 本は北東へ約 5 cm落 ちている。

遺物は全て床面より得 られたが、本址は11世紀 代に比定される。

B. 遺物

土器 (第61図)

本住居址からは、土師 器坏3、灰釉陶器皿1、 小形水瓶辺1、土師器甕 1が検出されている。

1~3は共に水引き糸 切り底の坏で、1は内面 黒色処理のやや大形の坏 で、2も同様である。2 は暗文が認められる。3 は小形の坏で浅い。

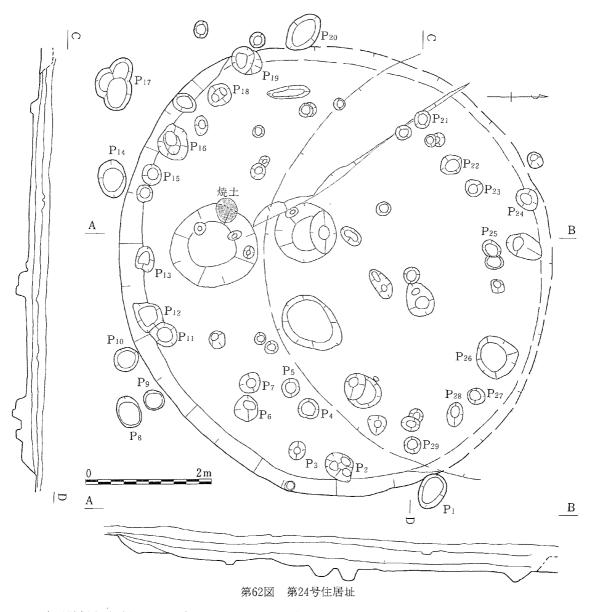
4は灰釉陶器の皿であ る。美濃の光ケ丘窯系の やや焼成のよくないもの であり、灰釉は付け掛け によっている。なお見込

みには重ね焼きの高台跡が付着している。高台は先端が尖るやや内弯気味のつくりである。

土師器の甕(5)は、整埋中に第1号住居址の甕片と接合関係にあることが判明した。先にふ れたように、口縁部のやや内弯する越後系の特徴が注目される。水びき成形によるもので本住居 址の時期を11世紀代に入るものと理解される。

(24) 第24号住居址

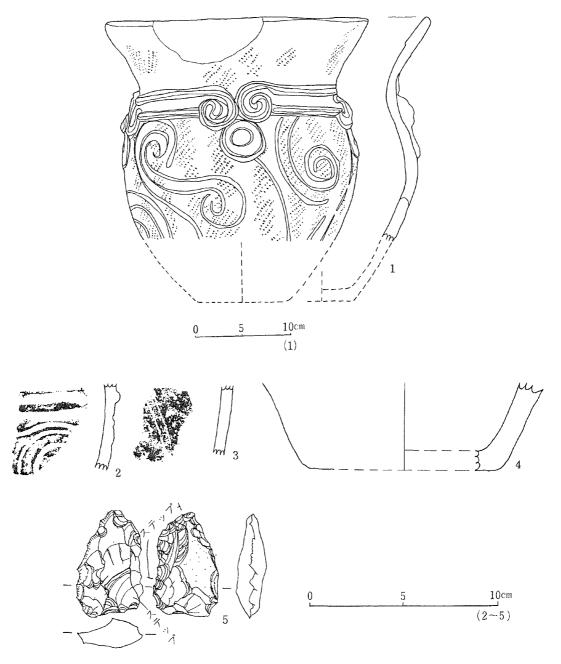
A. 遺構 (第62図)



東丘陵鞍部南東隅に存在する。砂粒混り黄褐色ローム質土層への砂粒混り黒褐色土の落ち込み として確認された。

検出面及び南北に設定した試掘トレンチにおいても第25号住居址との区別が判然としなかった ため、複数住居址の切り合いと大形住居址双方の可能性を残したまま掘り下げ作業を行い、三点 の床面直上土器と小形の柱穴群のまとまりをもって第25号住居址と分離した。

緩やかな南壁弧の裾に並ぶ径約30cm内外の柱穴の連続から把握される本址は、径約7mの円形



第63図 第24号住居址出土の遺物

を呈し北半で第25号住居址を切っているものと認識される。立ち上がりが緩やかな南壁における 壁高は、安定する床面との間に約25cmを測る。

砂粒混り黄褐色ローム質土層よりなる床面は壁の立ち上がりとの間に明瞭な交換点を持たず、 凹凸も多く軟弱で敲き締められた形跡に乏しい。南に偏って径約40cmの拡がりで薄い堆積の焼土 塊が確認されたが、焼土塊の東半分はピットの覆土の上に載っており、炉址と認定するには不安 が残る。床面に多数みられるピット群の内、上で述べたように南壁裾に回る径30~40cmのピット は本址に伴う柱穴として認識されるので、北半に回る同規模のピット列もそれらの連続として認 識してよいものと判断される。本址の中央よりやや南に存在する径1.4m内外の掘り込み3箇所 の内、南の深さ約10cmの浅い掘り込みは本址に帰属し、北寄りの2つは第25号住居址の柱穴をな すものと思われる。

本址の覆土層中から得られた遺物は極めて僅少で、第63図に図示したものが全てである。1は上述した浅い凹みに落ち込んだ態勢で形状を保ち検出されている。

本址の時期は、第63図1の土器より縄文後期前葉堀之内I期が想定される。

B. 遺物

土器 (第63図1~4)

床着の土器をもって代表させた。1は類部に低い隆線で渦巻文をつくり、その下に偏平なドーナツ様貼付文がある。胴部及び口縁部には、こまかい単節縄文を、間戟をあけ下方に向かって回転施文している。その後、太めの棒状工具でS字状に渦巻文を2~3条を単位として入れている。この文様は基本的には4単位となっているが、かなりそれぞれが独立しておりアトランダムでもある。2も同様モチーフの中にある土器で、3は櫛描条痕文の土器でその組成関係の中にあるものと理解しておきたい。ともにやや薄手で混入物はすくない土器である。1は内外面とも食物残滓の付着物がかなり見られる。所属時期は縄文後期の堀之内 I 期の中に求めておきたい。

石器(第63図5)

チャート製の両面加工石器が1点検出されている(5)。主要剝離面を大きく浅く打瘤部を削るようにステップ状の剝離を加えている。素材面側もステップ状の剝離で左側刃部を形づくっている。小剝片に掻刃部を作出した掻器状石器とともに、こうした小形の両面加工石器の機能は明らかでない。

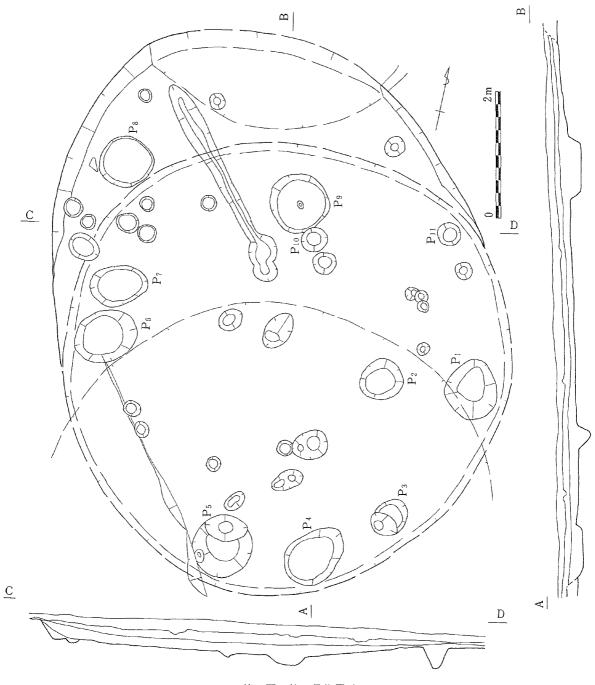
(25) 第25号住居址

A. 遺構 (第64図)

東丘陵鞍部南東隅に存在する。砂粒混り黄褐色ローム質土層への砂粒混り黒色土及び黒褐色土の落ち込みとして確認された。

第24号住居址の項で述べたように、検出面においても、南北に設定した試掘トレンチにおいても第24号住居址の項で切り合いが判然としなかったため、複数住居址の切り合い及び大形住居址双方の可能性を想定して掘り下げ作業を行い、2点の床面直上土器の位置とその時期、及び大きな柱穴群のまとまりを持って第24号住居址と分離した。

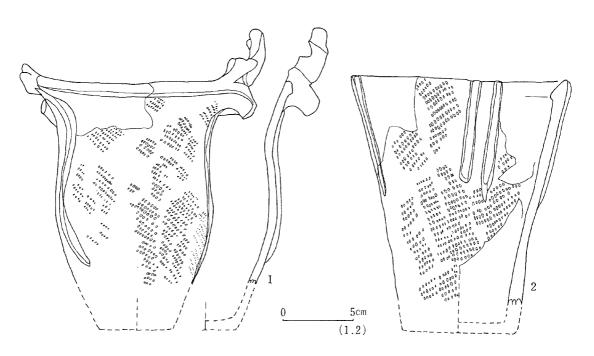
一部で礫岩ブロックを削っている西壁は緩やかながらも立ち上がりを持つが東丘陵の東斜面に向かう地形変換点に近い東壁は明瞭な立ち上がりが乏しく判然としたプランを把握しがたいが、おおよそ8.5m×7mの楕円形が想定される。北辺で第26号住居址を切り、南半は第24号住居址



第64図 第25号住居址

に切られているものと推定される。なお本址の北寄り覆土層中には第4号土壙址が造られている。立ち上がりを把握し得る西壁は壁高25cmを測る。

砂粒混り黄褐色ローム質土層よりなる床面は敲き締められた形跡に乏しく軟弱である。床面に多数観られるピット群の内、径1m内外の規模を有すP $1\sim P$ 8が本址の主柱穴と思われ、P1P $5 \cdot P$ $6 \cdot P$ $8 \cdot P$ 9で構成される五角形を基本とするものと思われる。床面上には火熱痕跡が無



第65図 第25号住居址出土の遺物(1)

く、また主柱穴を想定した五角形内にも適当な掘り込みがないため炉址の存在は不明である。

西壁近くで北西から南東に走り北東方向へ下がった小断層線が確認され、北半床面にも同方向 に走る地割れ痕が観察された。

遺物は僅少で、覆土層中から石器数点と床面からややまとまった形で土器二個体分が得られた。 本址の時期は、遺物と住居址の切り合いから縄文中期後葉曽利IV期が想定される。

B. 遺物

土器 (第65図)

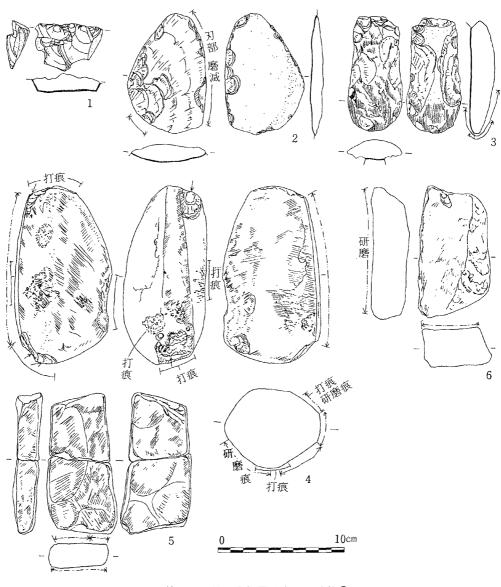
床面から検出された土器 2 個体は接合の結果器形を復元可能とした。図示した土器がそれであるが、小形の土器で一般的なものではない。 1 は頸部でややしまる土器でややすかしの入った把手が一対つくものであるが、完全な姿ではない。その把手部から紐状の隆線がゆるく蛇行垂下し貼付されている。単節縄文がアトランダムに下向回転押捺されている。 2 は 4 単位に粘土紐の 2 条の隆線が垂下されており、やや腰部でしまる以外直線的に開口している土器である。 1 同様器面に単節縄文を回転垂下させている。 2 点とも底部を欠いているが、ほぼ点線状と見てよい。両土器とも全体のモチーフは同様構想の中にあるものであるが、口唇部のつくりを異にしている。所属時期はほぼ中期末葉の時期として、曽利IV期を与えておくこととする。

石器 (第66図)

黒耀石製の石核(1)安山岩製の扇状石器(2)安山岩製の打製石斧(3)安山岩製の磨石(4)砂岩製の板状磨石(5、6)が検出されている。

黒耀石の小石核は石鏃等の素材を剝取したものと思われる。横刃石器は打製石斧と同様な製作

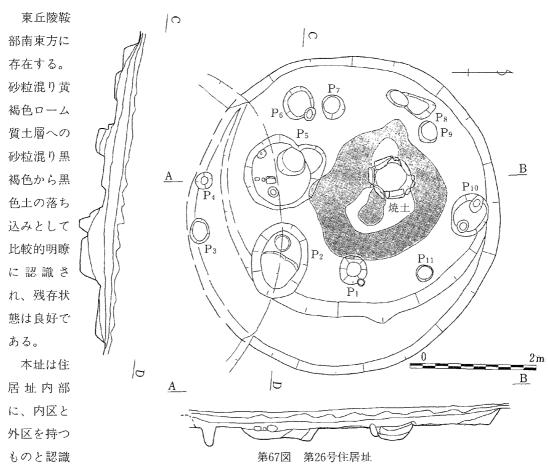
技術の中で把握されるものであって搔刃部でない平坦な調整をすることが特徴である。刃部は磨耗が著しい。同じく打製石斧の刃部も過度の使用により磨耗が著しく特に刃部はトロトロしている。4の安山岩を用いた磨石は火傷を受けているが研磨痕、打痕の明瞭に残る石器である。上端に面取りのある全面研磨で方向性の明らかな擦痕がついている。また両端部に著しい打痕があり、ハンマー・ストーンとしての機能も兼ねていて特に右側辺部は打撃により凹部が出来ている。砂岩製の板状磨石は筏遺跡から特に多く検出されるもののひとつで、6は特に方向性の異なる擦痕が観察できる。こうした観察により磨石の使用状況のうかがい知れる好資料といえる。



第66図 第25号住居址出土の遺物②

(26) 第26号住居址

A. 遺構 (第67図)

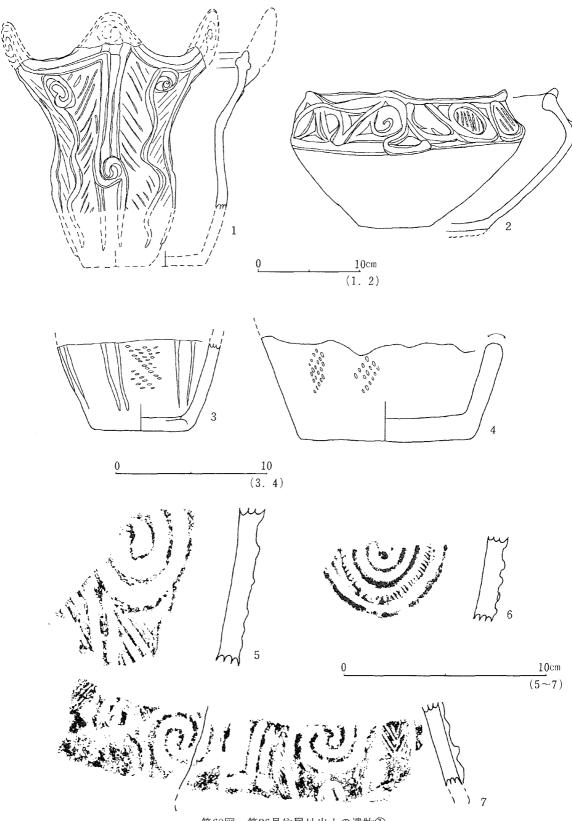


されるが、外区を含めたプランは径4.9mの円形を呈し、壁高は内区中心部で検出面より約30cm を測る。本址は南方を除くと他の住居址群から一定の距離をおいて独立的に存在するが、南三分の一は第25号住に切られ破壊されている。

径4.9mの規模を有するプランの内部は、西壁の弧を一にして径4.1mの円形プランが東に弧状の床面を残して掘り込まれ、約10cmの段差が認められる。本址全体の床面は残存状態は比較的良いものの敲き締められた形跡には乏しく、上下の床面に堅緻さの上から優劣をつけることは難しい。東壁沿いに弧状に形成された面には柱穴等の施設は認められず、その延長は第25号住居址に破壊された南辺にまで及び半周するものと推定される。

柱穴や炉址等の施設は全て径4.1mの下のプラン内に納められる。炉址は六角形状を呈する石 囲炉として径4.1mのエリア内でもやや西北に偏って据えられているが、炉址の周囲には径2m の範囲にのみ限定されてドーナッツ状に厚さ5cmの焼土の堆積がみられ床面に密着している。

柱穴状の掘り込みが12箇と土壙状の掘り込みが2箇観られるが、柱穴は重複するもの隣接する



第26号住居址出土の遺物① 第68図

ものを除くと南北方向を軸として五角形を形成するように配置されたことを窺わせる。この柱穴の配置は径4.1mのプランに対しては整合性を持つものの、外区を含めた径4.9mのプランに対しては、これを意識に置いて設定されたものとは考えにくい。したがってベッド状の外区は当初から存在したものではなく増築により設けられたものと推定され、その際梁と桁の強度を増すために南側と東側に間柱が加えられたのではないかと思われる。

構造上、建て替えあるいは増築による住居空間の拡大とも受けとれるが、第68図2の浅鉢が非常に小片で出土し接合されたものであるが、明らかに1、2の土器あるいは5、7の土器とは時間的に異なり、2つの時期の土器が混在している感がある。このことからすれば、炉址を持つ小形住居址が構築され使用された後に、ほぼ同一地点にあたかも拡張住居と見れば見れる状況で次ぎの時期の住居址が構築されたと考えることもできる。その時期は浅鉢が代表できる楕円形区画文で象徴できる勝坂期と唐草文と綾杉文の曽利II期ではないかと思われるのである。

第26号住居址は曽利II期の張り出し、ベッド状遺構の増築と理解することと、勝坂期と曽利II期の2回使用と理解することと、大きな住居址が勝坂期の住居址で、曽利II期に勝坂期の住居址を破壊し、小形に縮少石囲炉を持つ住居址を構築したと理解するか、その三者のいづれかであるものと見ることができる。

石囲炉の残存状態からすれば、曽利II期に縮少石囲炉構築の理解が最も近いであろうか。こうした遺物の検出状況と共に、第26号住居址の理解に興味ある課題が残されていると見ることができるように思う。

遺物は主に覆土層から出土しているがその量は寡少である。第68図1と3が床面直上で検出されていて、他は覆土層中からの検出である。

遺物から見て新しい資料である曽利II期をもって代表させておくが、勝坂期の資料が混在していることは事実である。

B. 遺物

土器 (第68図)

第26号住居址出土の土器は、2群に分けて把握できる。第1群は2と6の浅鉢形土器であり、第2群は、1、3、4、5、7の土器である。第1群の土器は、勝坂期の土器であり、第2群は 曽利II期の土器である。

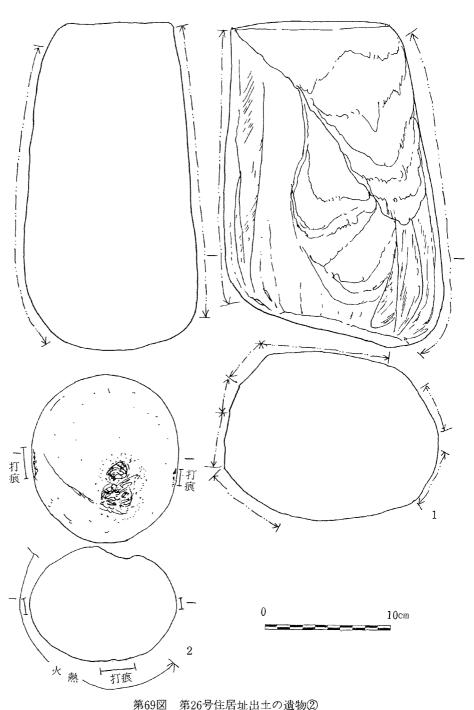
2 は楕円区画文と沈線文の組み合わせ、三叉文状の陰刻文を入れる施文帯を口縁部にもつものである。小さな破片として出土したものを接合復元したもので、器形はやや歪んでいる。 6 は同心円文と刻目文とが組み合わさったものでほぼ同一時期のものと理解してよい。

1は4把手状の波状口縁と、垂下する二本単位の4単位隆線が特徴であって、腰部で結節部の 唐草文を付けている。又、その間にワラビ手状の蛇行隆線を垂下させ、その間戟に斜行沈線を充 塡させている。その斜行沈線は、小蛇隆線をはさんで綾杉状になるよう配慮されており、全体の モチーフから、曽利II期の土器であろう。3、4も同期の中で理解でき、5、6は、一対の唐草 文把手をもつ土器の胴部破片とみることができる。

石器 (第69図)

砂岩製の磨石(1)と花崗岩製の磨石(2)が検出されている。砂岩製のものは両端部を除い

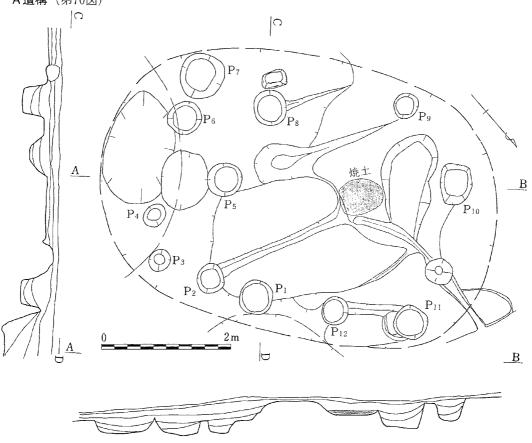
てほぼ全周に 研磨痕が確認 できる。特に 右下辺部には 幅広の研磨痕 が4条、左辺 部には3条確 認でき、磨製 石斧などの砥 石に使用され たものと思わ れる。全周に は大きく7面 の研磨面がみ られる。2は 火熱を受けた 磨石で、3ケ 所に打痕があ り、とくにそ のひとつは著 しい打痕を観 察できる。ハ ンマー・ス トーンとして の機能をうか がわせるもの である大形楔 の打ち込みに 用いられたも のであろう か。



82

(27) 第27号住居址

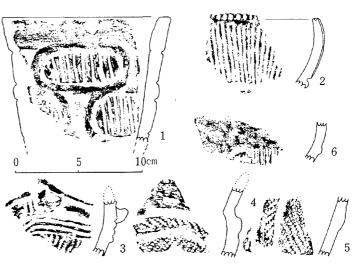
A遺構 (第70図)



第70図 第27号住居址

東丘陵鞍部の東北方、北の瘤 状丘部の東南麓に存在する。砂 岩ブロックのプレート上に造ら れたため、覆土層が薄く柱穴等 のみの残存である。

北の瘤状丘部の基盤を形成すると思われる砂岩のブロックは、東南斜面においてやや堅い部分が小断層により2~3mの幅で斜面に平行して残され高まりを持っている。本址は、このやや高い砂岩ブロックプレートに北西半を載せて造られてお



第71図 第27号住居址出土の遺物

り、南東辺で第28号住居址と切り合っている。

砂岩に穿たれた柱穴は、やや西北に偏って存在する砂岩プレート上の炉址痕を挟んで整然としており、そのプランは6m×4.3mの楕円形が想定される。長軸は磁北より40度西に振れ、出入口は南東が考えられる。

本址の時期は、僅かな出土遺物から縄文中期中葉が想定される。

B. 遺物

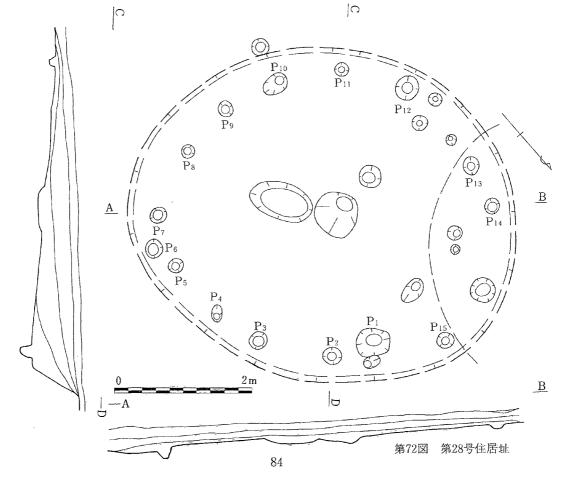
土器 (第71図)

検出された土器は極めて少量であったが、その検出土器の中で特に新しいものをもって代表させておきたい。第71図1は楕円区画文と平行沈線とを組み合わせ連続施文した土器であって、小形の土器である。外面に残滓が付着している。勝坂期の土器としておきたい。

(28) 第28号住居址

A. 遺構 (第72図)

東丘陵鞍部の東北方、北の瘤状丘部の東南裾に存在すし、本址に東接して大きく南北方向に走る断層線が存在する。砂質性の強い黄褐色土層中に柱穴等の施設を確認したに止まり残存状態は



良好でない。本址は砂岩ブ ロックが南北に走る断層に より落ちる肩部付近に存在 するため、覆土層はほとん ど流出している。砂性の強 い土層上に造られたため、 床面は締まりがなく軟弱で あるが、検出された径30cm 内外の柱穴の配列を把握す ると、おおよそ5.5m×4.8 mの楕円形プランが得られ る。想定されるプランは北 辺で第27号住居址と切り合 うが前後関係は判然としな い。中央土壙は炉址と思わ れるが焼土痕はない。遺物 は寡少であるが、縄文中期 中葉が想定される。

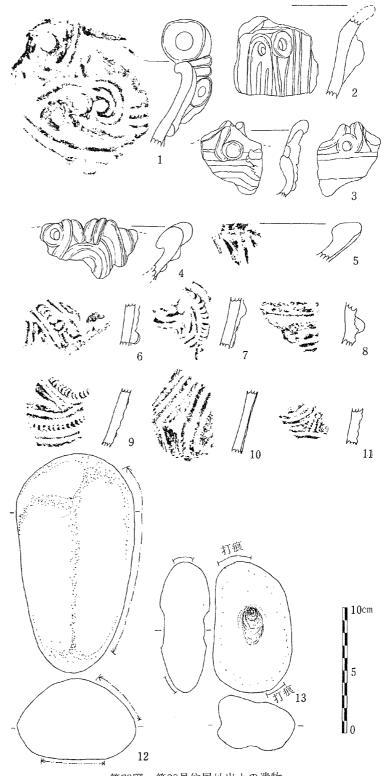
B. 遺物

土器 (第7図1~11)

主体をなすものは上山田 II期又は焼町類似の土器群 である。1~4ともに口縁 部破片であるが、眼鏡状突 起を持ち、やや太めの半截 竹管で施文を行っている。 6、7、9など刻目文を持つ ものもあるのが認められる。

石器 (第72図12、13)

花崗岩製の磨石(12)安山岩製の凹石(13)がある。 磨石は自然石の三稜を研磨してあり、凹石は両側に1つずつの凹がある。



第73図 第28号住居址出土の遺物

2. 土塘址

(1) 第1号土壙址

A. 遺構 (第74図)

東丘陵の南東、B-22グリッドに構築されている。 70×30 cmの二つの柱穴が合体したような不整形を呈す。深さは20cmを測る。

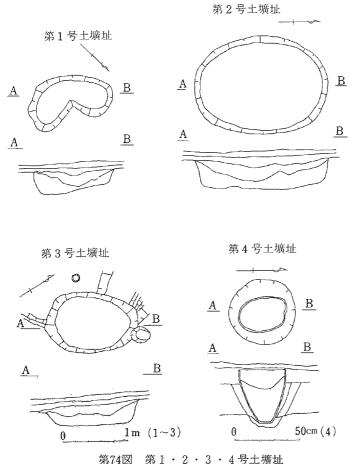
B. 遺物

土器(第75図1、2)

上山田II期あるいは焼町期の土器片が検出されている。1は三叉状彫去文を主とし刻み目文は 渦巻文と連続しているものと思われ、2は眼鏡状貼付文と認められる。

石器 (第75図3)

滑石製の砥石である。両面に著しい研磨痕が残り、9面の研磨面を観察することができる。



(2) 第2号土壙址

A. 遺構 (第74図)

東丘陵中央よりやや南東のY-18・19グリッドに構築されている。 含砂粒黄褐色ローム質土中に掘られ、100×70cmの整った楕円形を 呈し、深さ20cmを測る。

B. 遺物

土器 (第75図4、5)

4、5は無文を基調とした土器で、4には凸帯がつけられ、割り出しが行われている。外面、内面ともに黒色の漆状塗料がみられ、この土器が中期藤内期の有孔鍔付土器であることをしめしていて注目される。

石器 (第75図 6.)

頁岩製の石匙が1点検出されている。搔刃部調整を施した横型のもので短いつまみ部を作出している。筏遺跡では4例出土している。



第75図 第1・2・3号土壙址出土の遺物 第1号 (1~3) 第2号 (4~6) 第3号 (7・8)



1982年 調査前の筏遺跡(中央樹海の中)



1985年 調査後の筏遺跡 (中央樹海の抜けた部分が調査地)



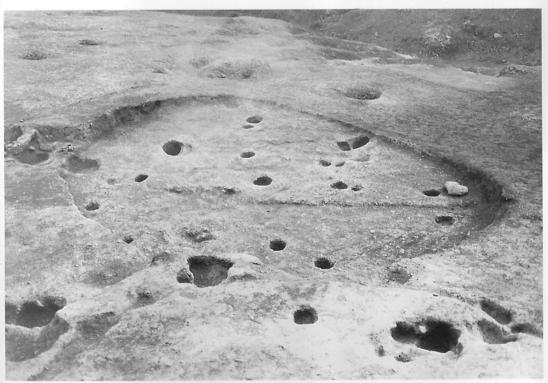
筏遺跡の中央凹地



筏遺跡のコの字状丘陵



第1号住居址(南東から)



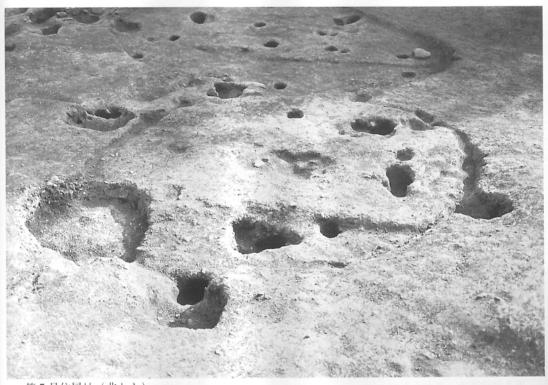
第2号住居址(北東から)



第3号住居址 (東から)



第4号住居址(南西から)



第5号住居址(北から)



第6号・第7号住居址(北から)



第8号住居址 (東から)



第9号住居址(南から)



第10号住居址 (中央炉址・南から)



第11号住居址(南から)



第12号住居址(北から)



第13号住居址 (北東から)



第14号住居址(南西から)



第15号住居址(南から)



第16号住居址 (東から)



第17号住居址 (東から)



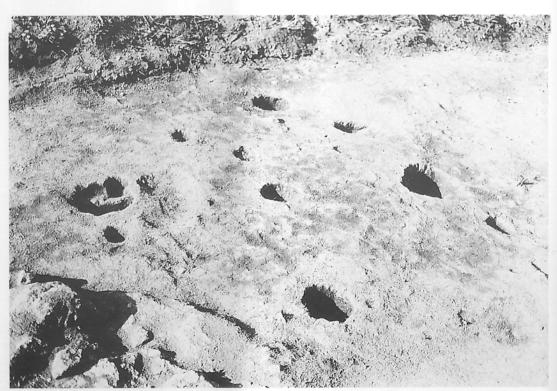
第18号住居址 (北西から)



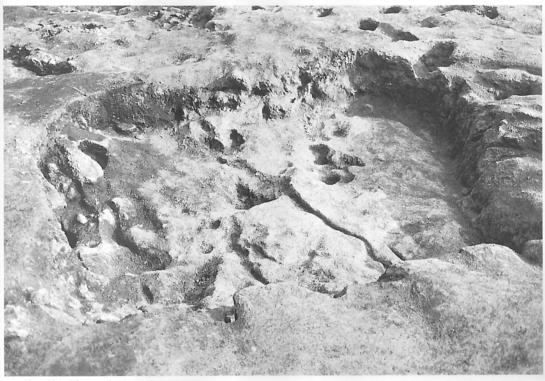
第19号住居址(北西から)



第20号住居址(北から)



第22号住居址 (南西から)



第23号住居址(北西から)



第23号住居址 (南から)



第24号・第25号・第26号住居址(南から)



第24号・第25号・第26号住居址 (南西から)



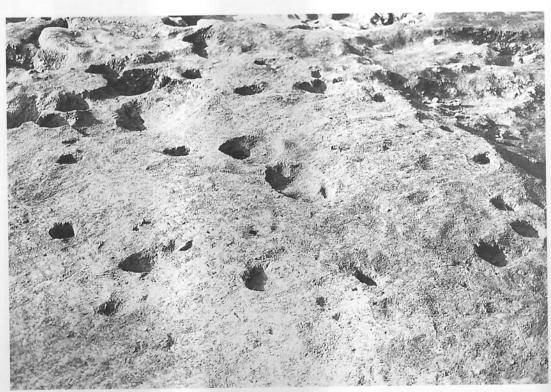
第26号住居址(南から)



第26号住居址 (東から)



第27号住居址(南東から)



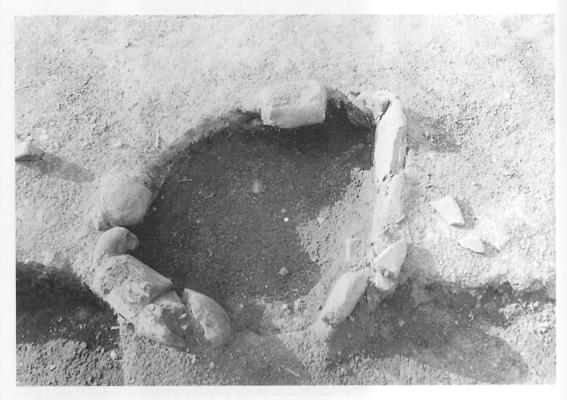
第28号住居址 (南東から)



第8号住居址石囲い炉(南から)



第9号住居址石囲い炉(南西から)



第10号住居址石囲い炉(南から)



第12号住居址石囲い炉(北から)



第26号住居址石囲い炉(東から)



G-9グリッド土器捨て場址出土の土偶



第2号住居址埋甕炉



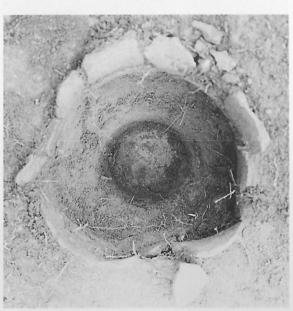
第14号住居址埋甕炉



第22号住居址埋甕炉の検出



第18号住居址埋甕炉



第22号住居址埋甕炉



住居址の切り合い(南から・手前第2号住居址)



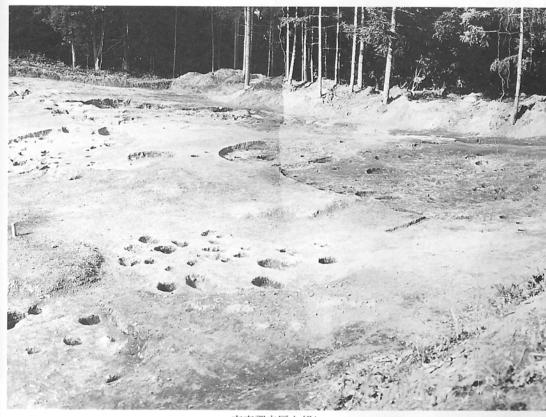
住居址の切り合い(北面から・手前第11号住居址)



砂岩の岩盤上の住居址 (手前第23号住・奥第22号住)



東側の断層陥没斜面(北から)



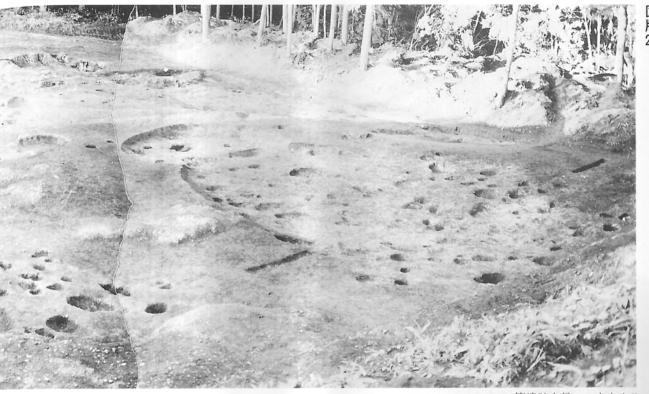
南東調査区を望む



第1次調查団 (1982年)







筏遺跡全景 ▲南方より

▼北方より





筏遺跡遠望(塩沢より)



自然にかえる筏遺跡 (1990.11)



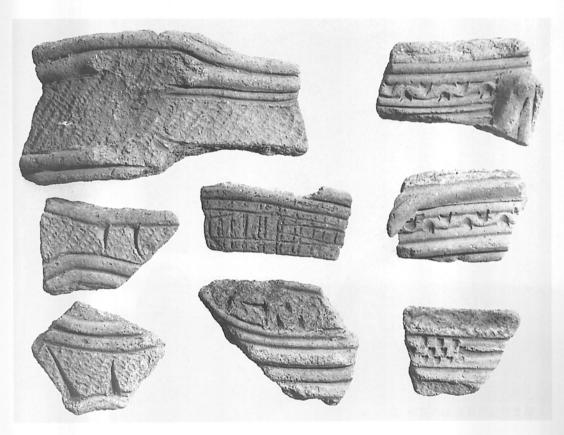
筏ヶ原の秋 (1990.11)

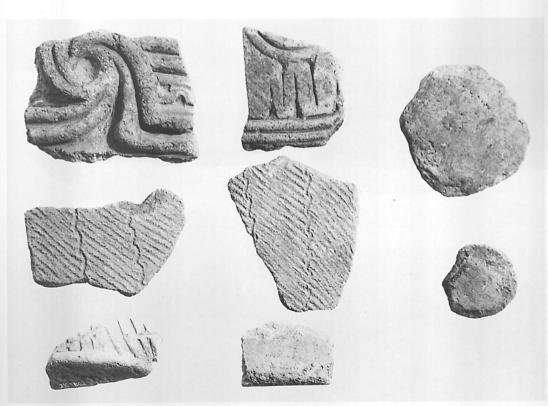




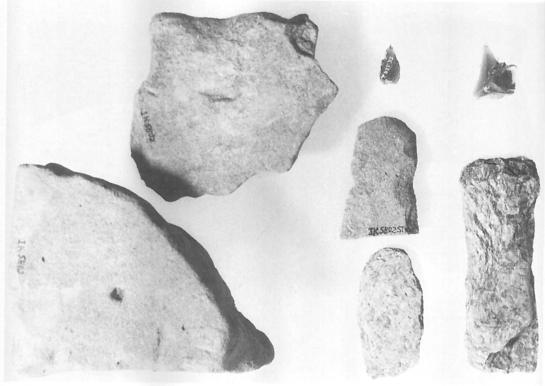


第2号住居址出土の遺物①





第2号住居址出土の遺物 ②

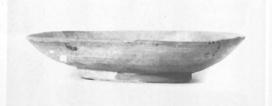


第2号住居址出土の遺物 ③



■第1号住居址出土の遺物



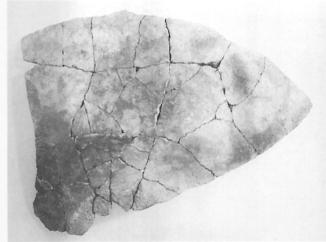


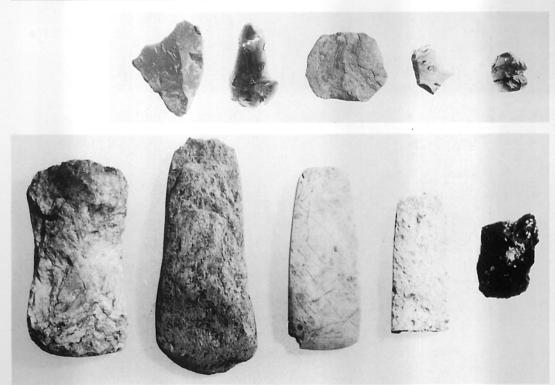


▲第1・23号住居址出土の遺物

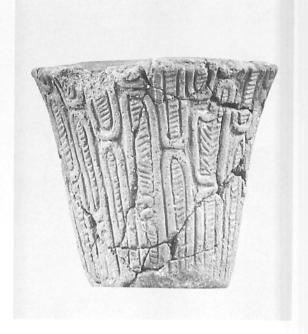


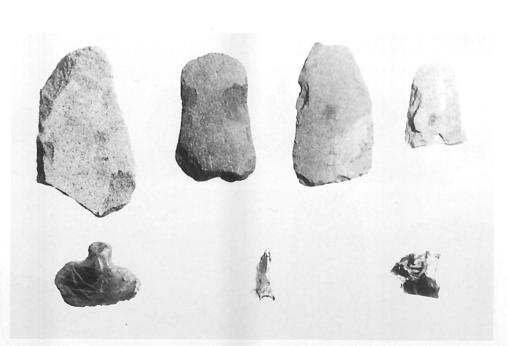












第4号住居址出土の遺物



▲埋甕1



▲埋甕3



▲埋甕5



▲埋甕2



▲埋甕4



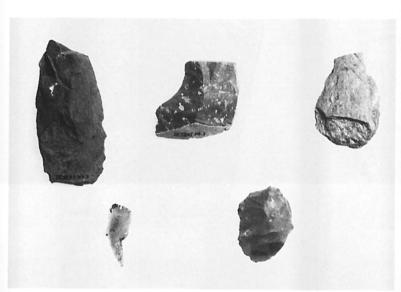
▲埋甕 6

第5号住居址出土の遺物 ①



埋壞 8

埋甕7



第5号住居址出土の遺物 ②

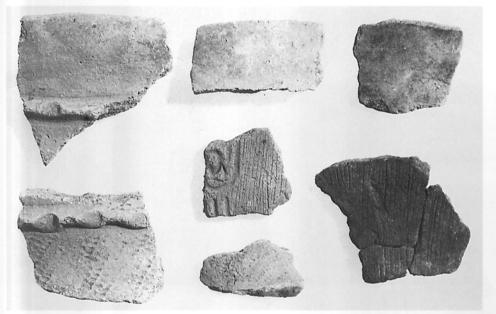


第6号住居址出土の遺物



▲第8号住居址出土の遺物



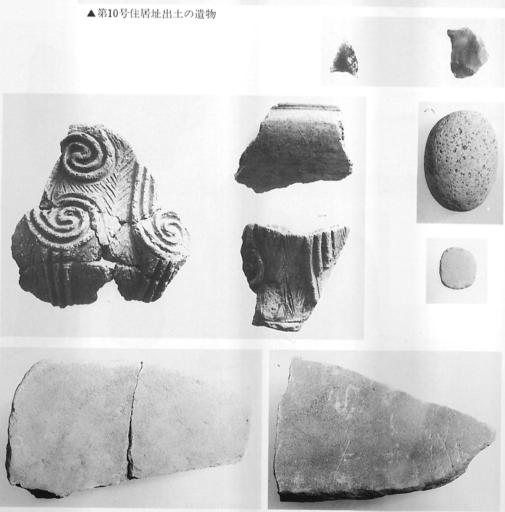




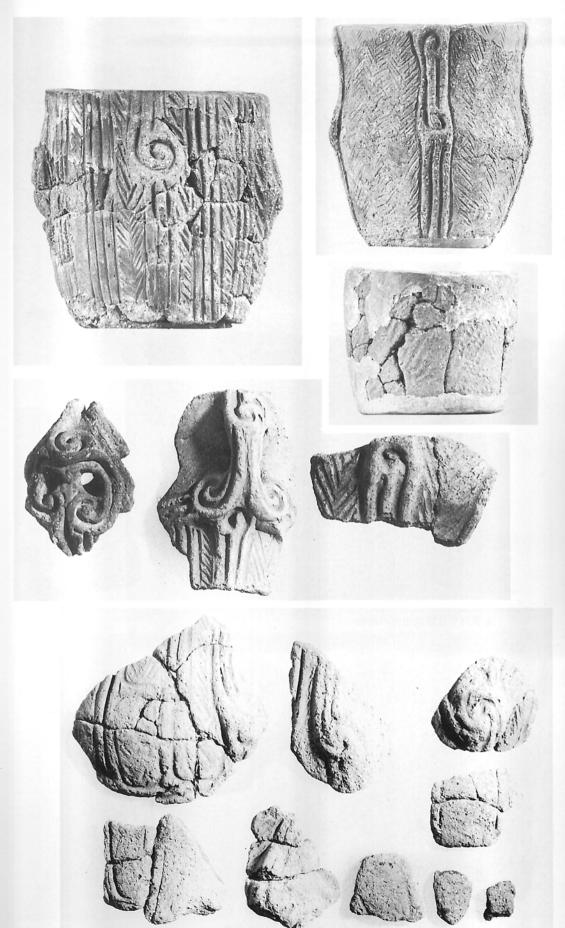


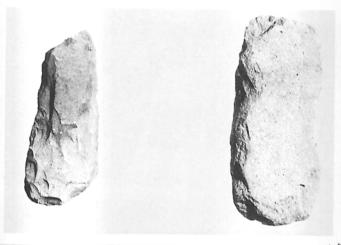
▲第9号住居址出土の遺物





▲第11号住居址出土の遺物



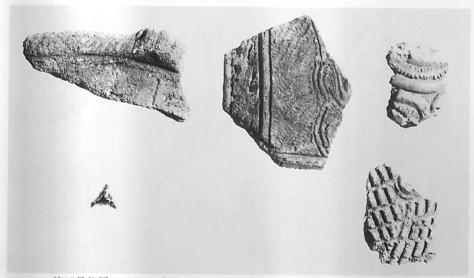




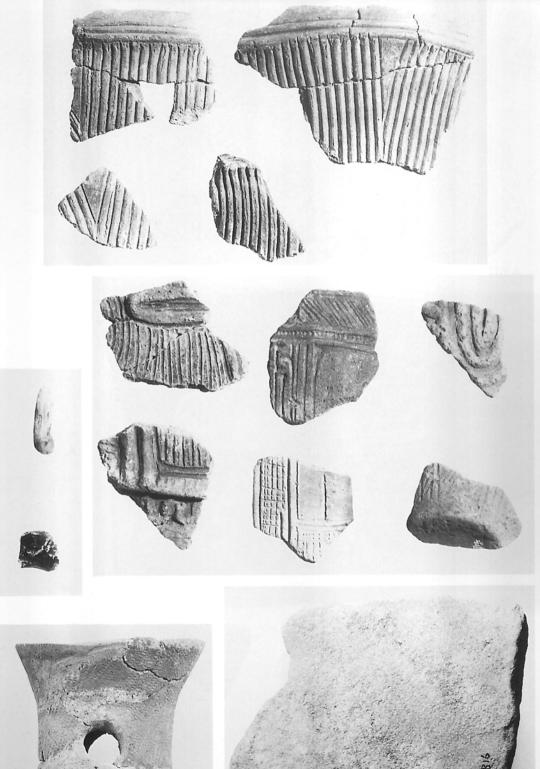
▲第13号住居址出土の遺物



▲第14号住居址出土の遺物



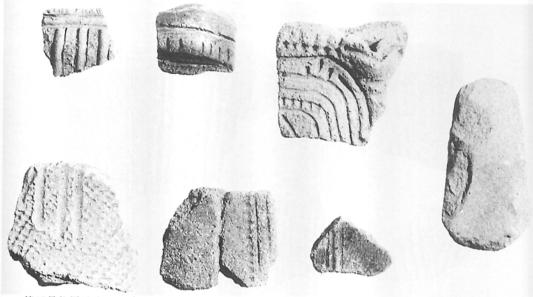
▲第15号住居址出土の遺物







第16号住居址出土の遺物



▲第17号住居址出土の遺物

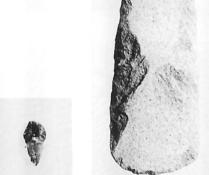




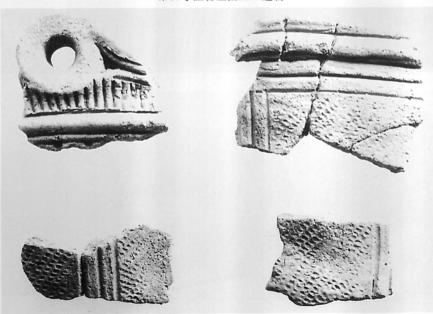
第18号住居址出土の遺物







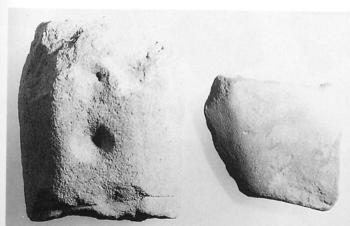
第19号住居址出土の遺物

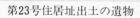


第21号住居址出土の遺物











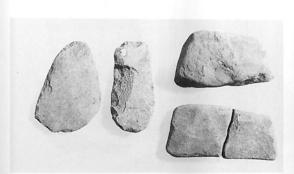


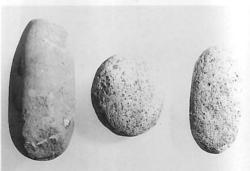


▲第24号住居址出土の遺物









第25号住居址出土の遺物







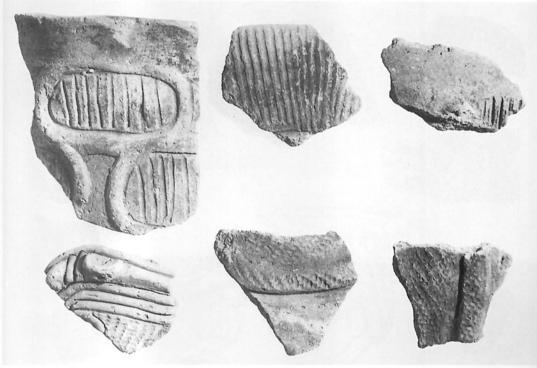








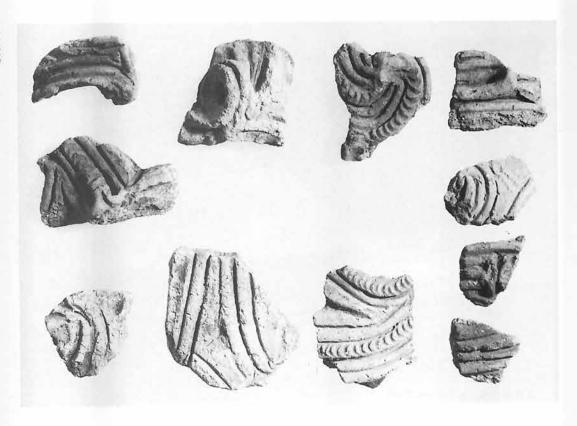
第26号住居址出土の遺物

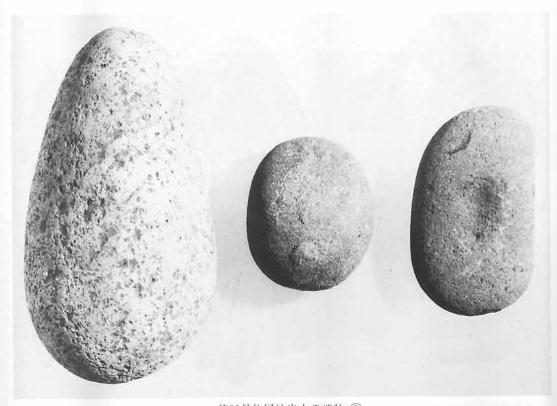


▲第27号住居址出土の遺物



▲第28号住戸址出土の遺物 ①





第28号住居址出土の遺物 ②



▲溝状遺構出土の土器









▲第2号土壙址



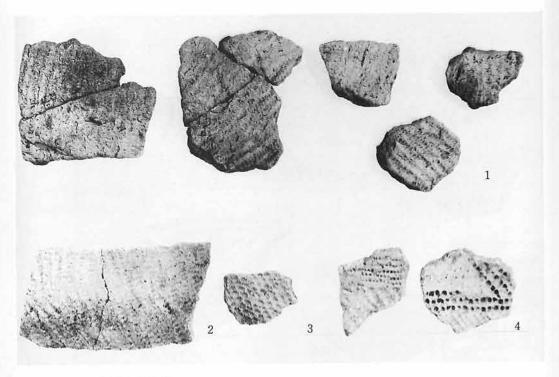


▲第3号土壙址

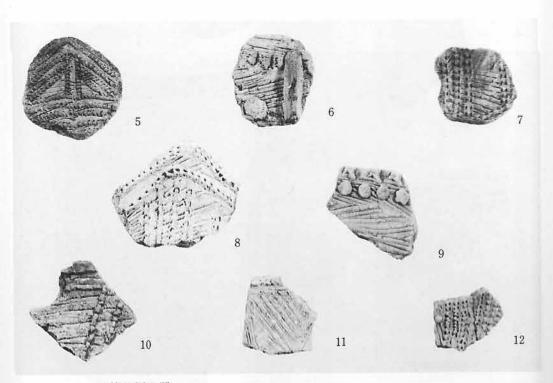




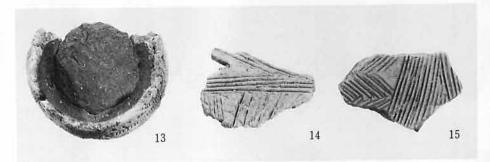
▲第4号土壙址



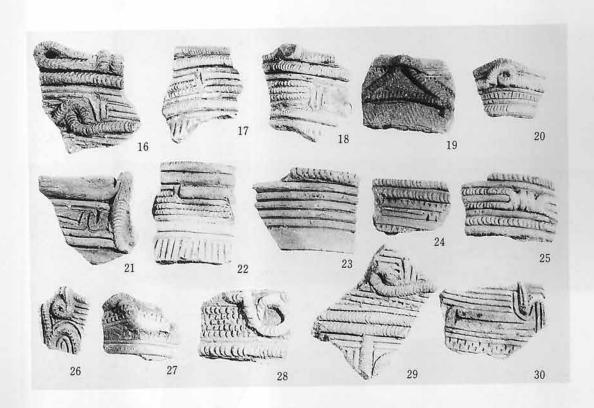
▲第1類土器



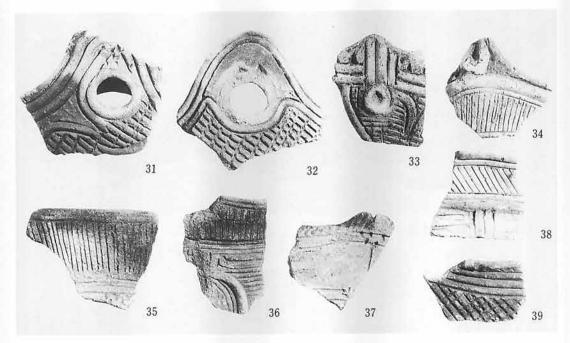
▲第2類土器



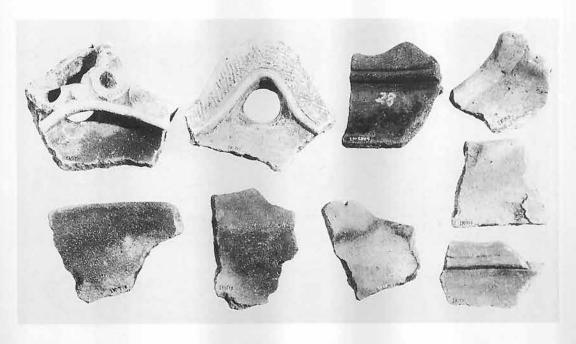
▲第3類土器



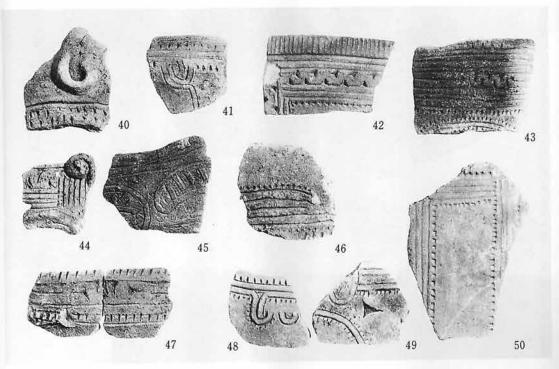
▲第4A類土器



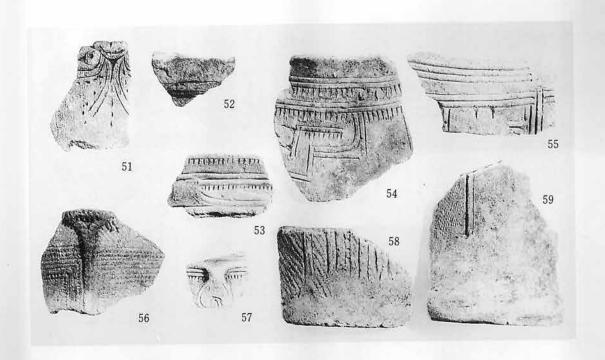
(表)



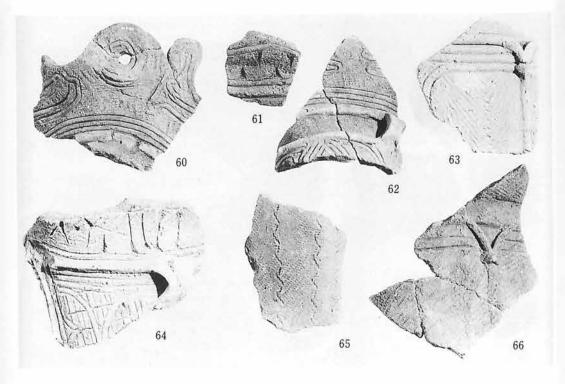
▲第4B類土器

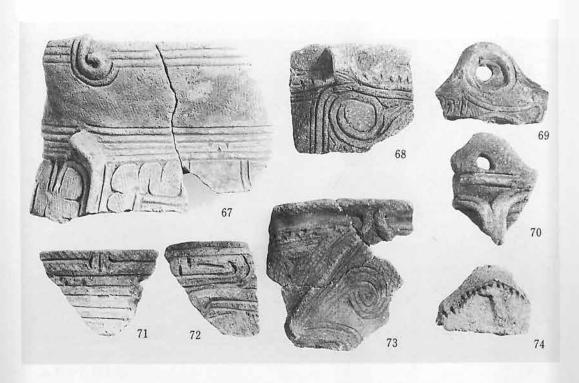


▲第4C類土器

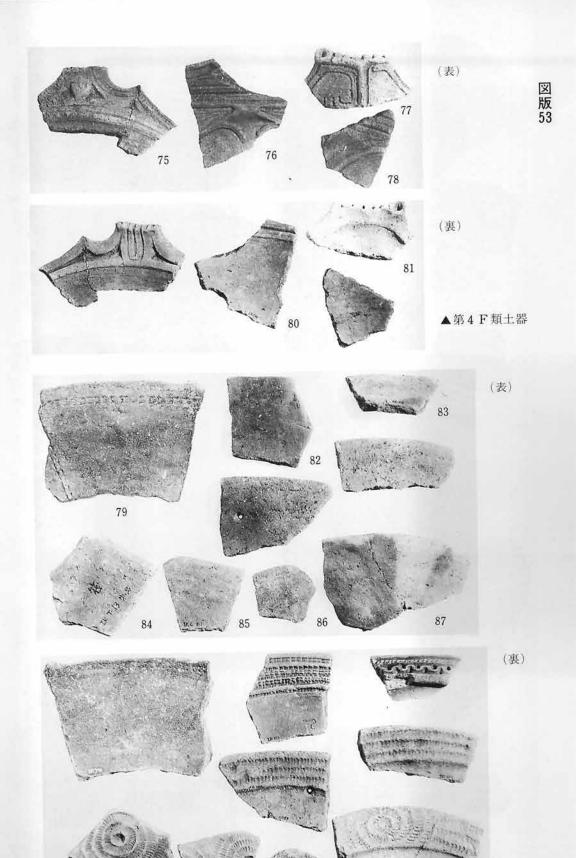


▲第4D類土器

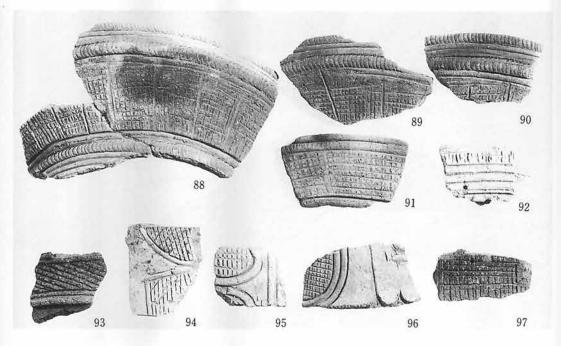


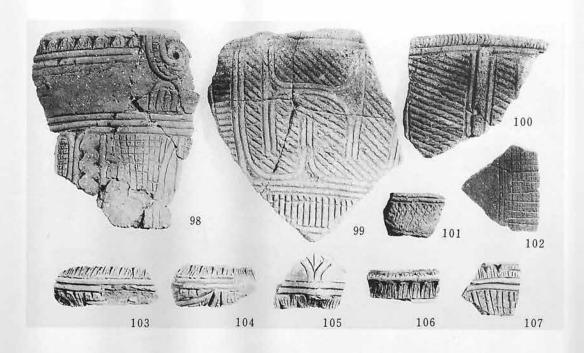


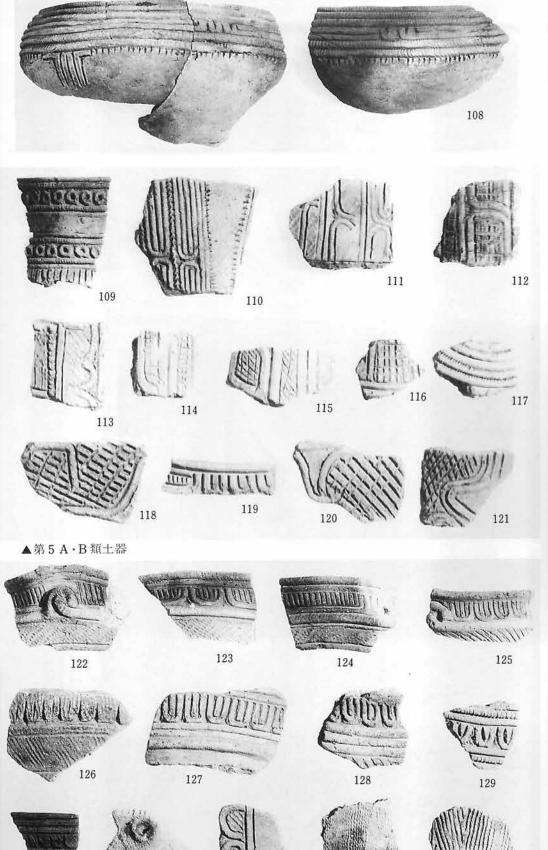
第4E類土器



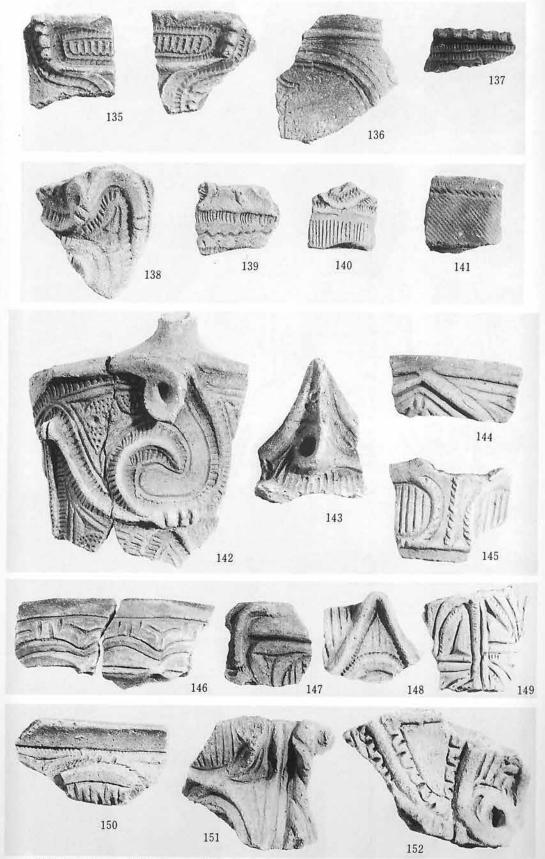
◀第4G類土器



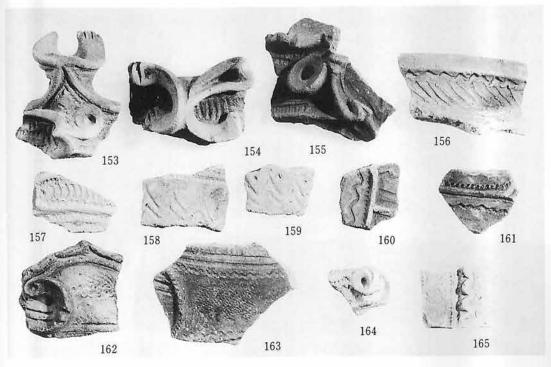




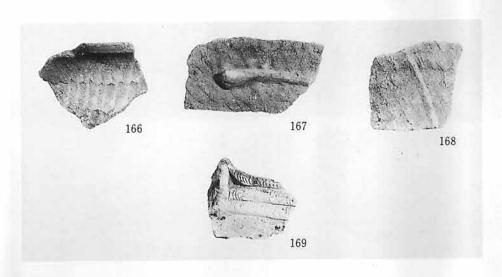
▲第5C類十器



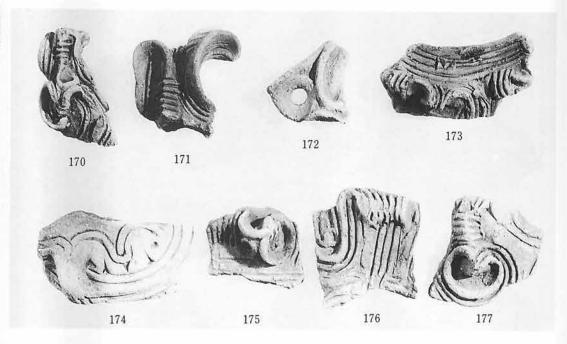
▲第6類土器 A類(135~137) B類 (139~141) C類 (138、142) D類 (143、144) E類 (145~152)

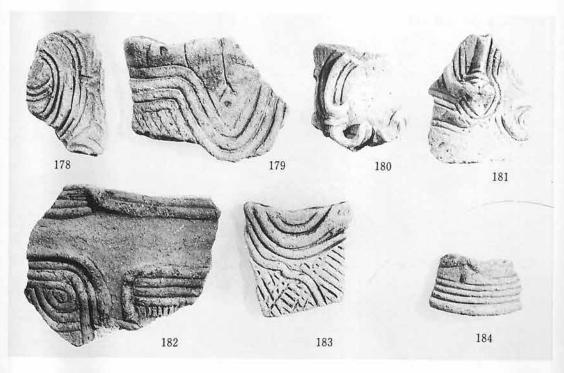


▲第7A類土器

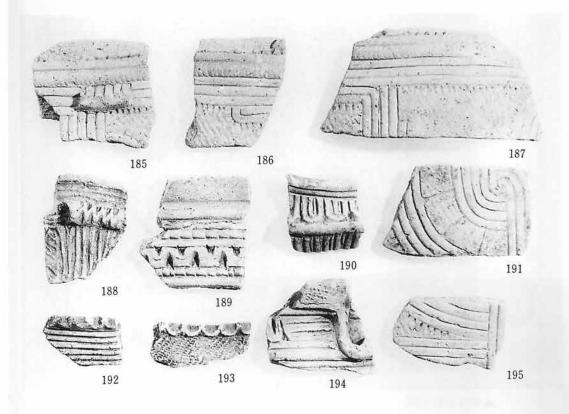


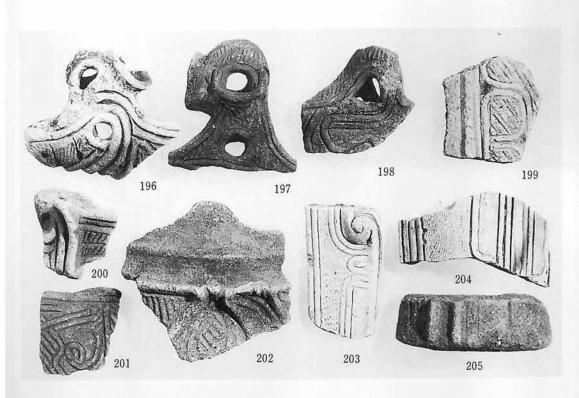
▲第7B類土器(166~168) ▲第8類土器(169)



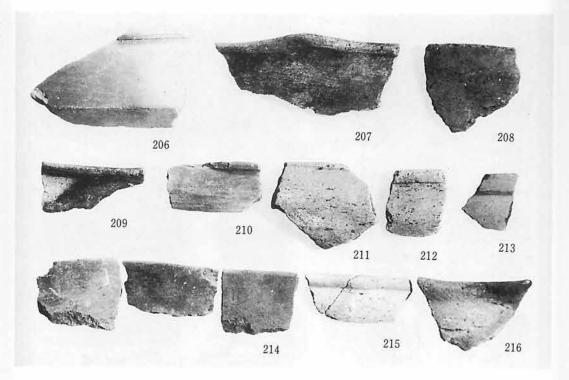


▲第9類土器

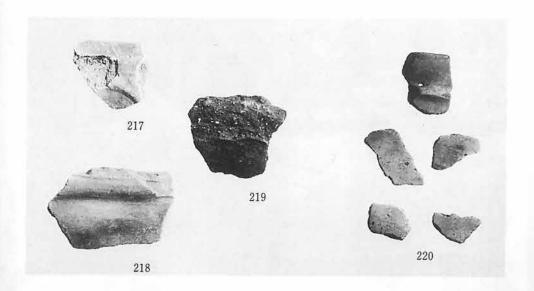




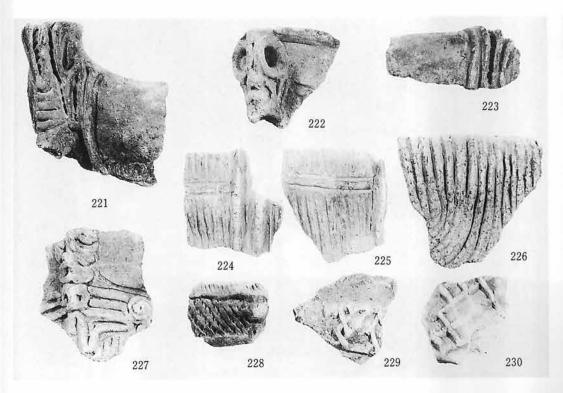
▲第10類土器

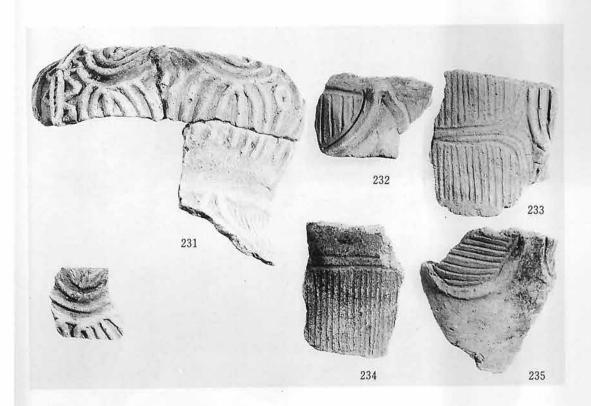


▲第11A類土器

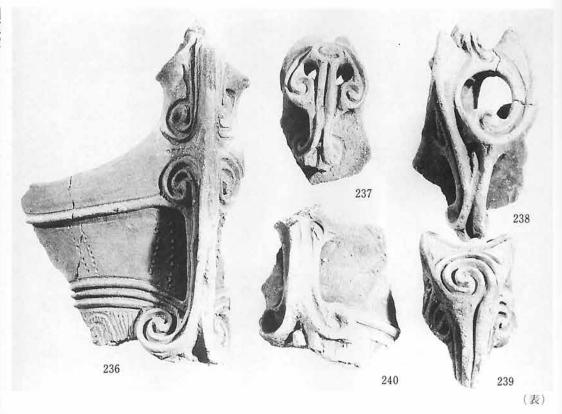


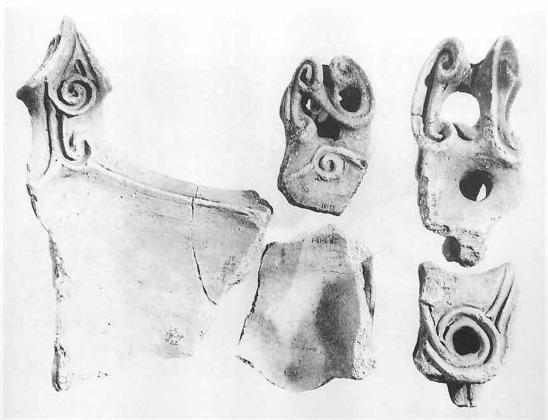
▲第11B類土器





▲第12類土器

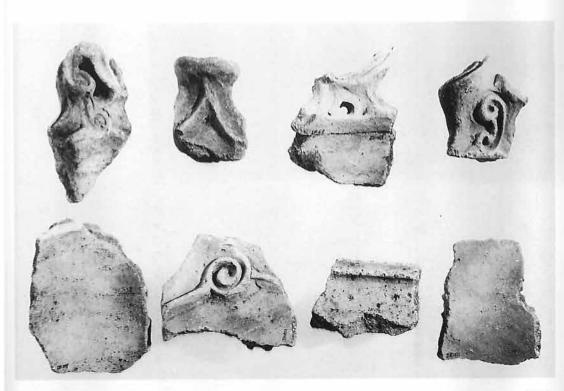




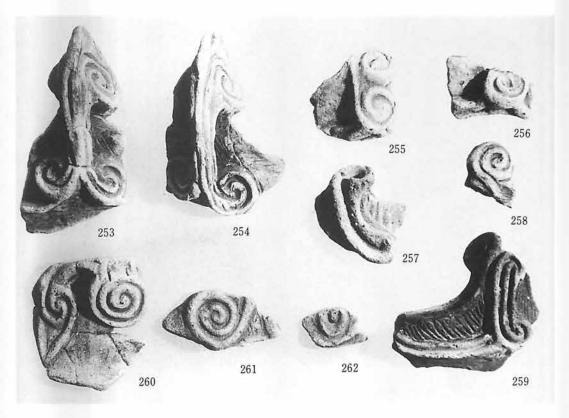
▲第13A類土器 ①

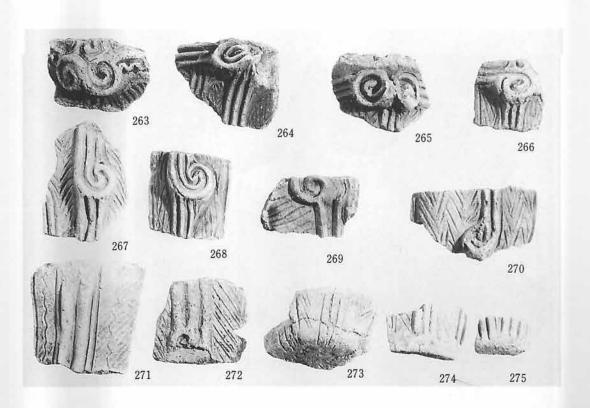


(表)

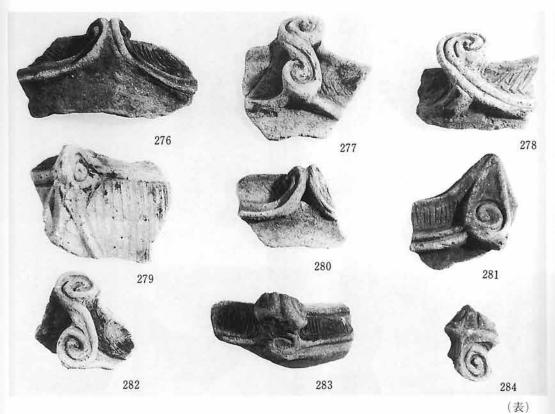


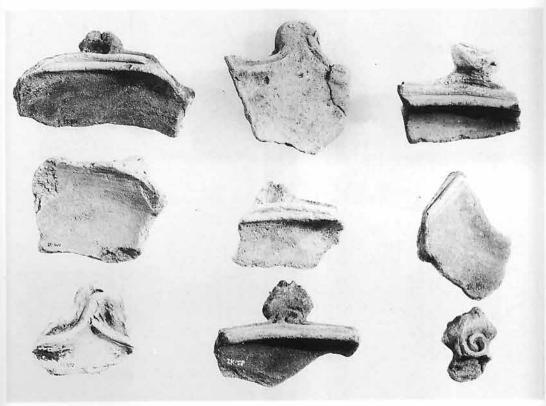
(裏)



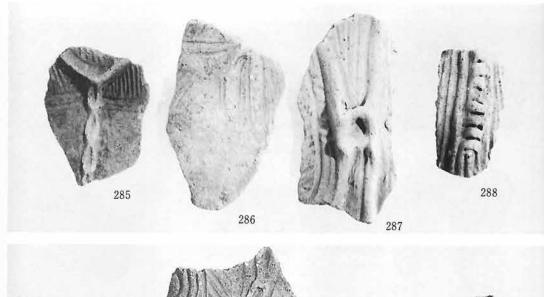


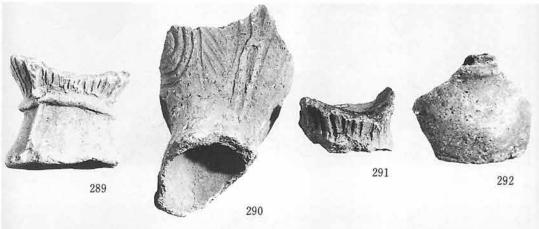
▲第13A類土器



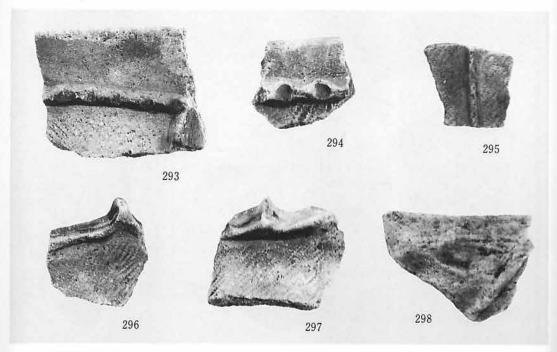


▲第13B類土器

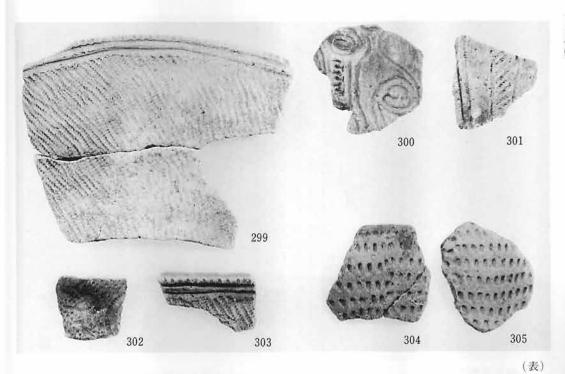


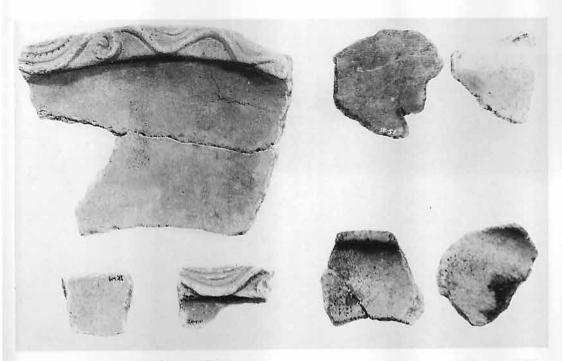


▲第13A類土器

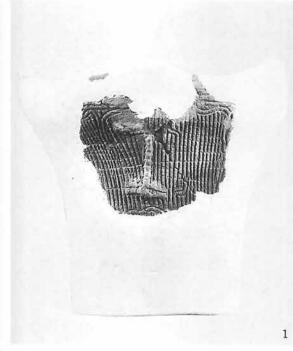


▲第14類土器





▲第15 A 類土器(299~303) 第15 B 類土器(304、305)



▲第5B類土器



▲第5B類土器



▲第4E類土器



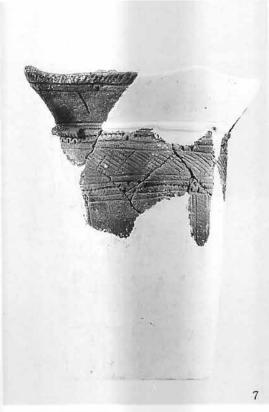
▲第4E類土器



▲第4D類土器



▲第4E類土器



▲第4B類土器



▲第4E類土器

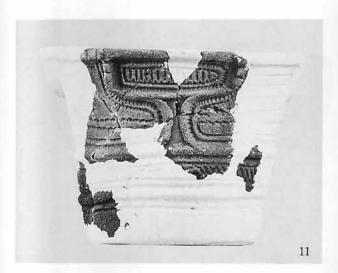


▲第4G類土器

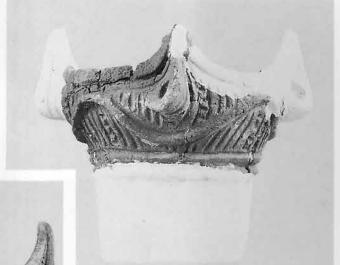


▲第10類土器

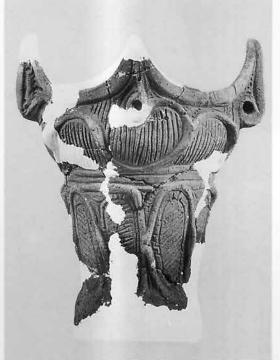
12



▲第6A類土器



▲第6E類土器



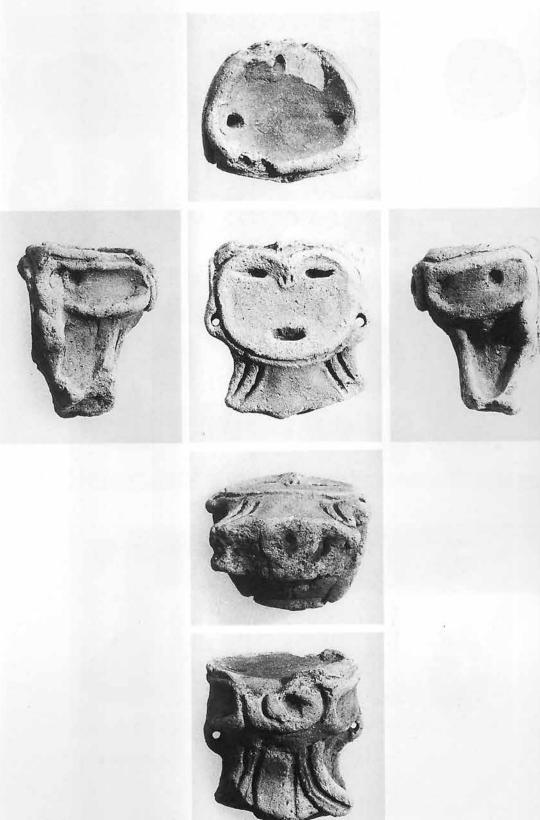
◀第6E類土器



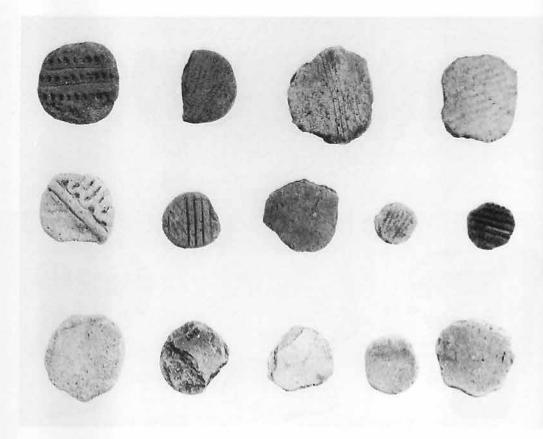
▲第12類土器



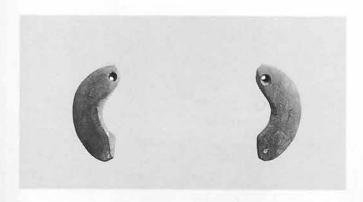
▲第12類土器



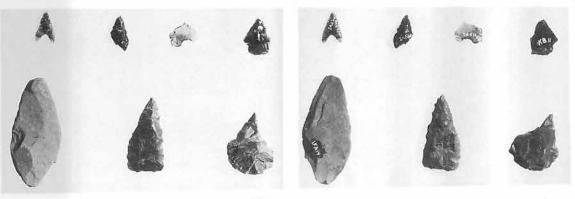
土器捨て場址出土の土偶頭部



▲包含層出土の土製円版



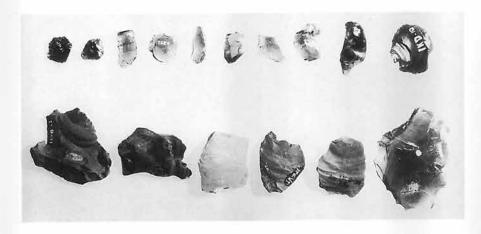
▲包含属層出土の垂飾



▲石鏃及び尖頭石器

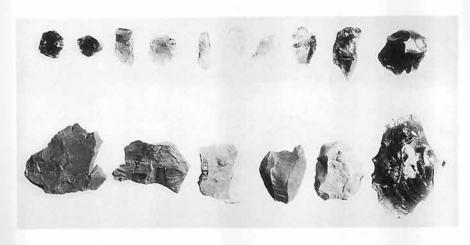
(表)

(要)

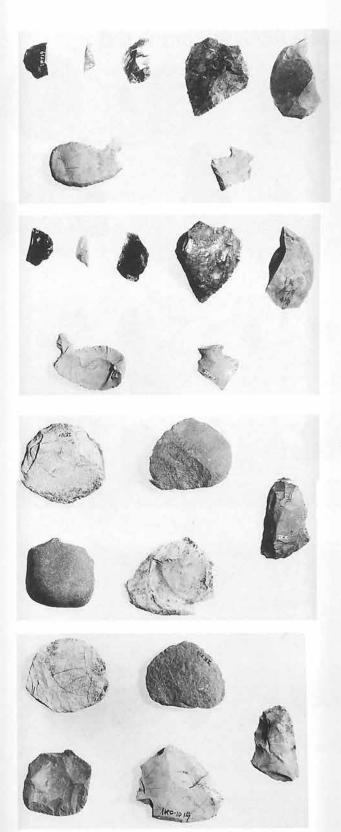


(表)

(裏)



▲楔形石器

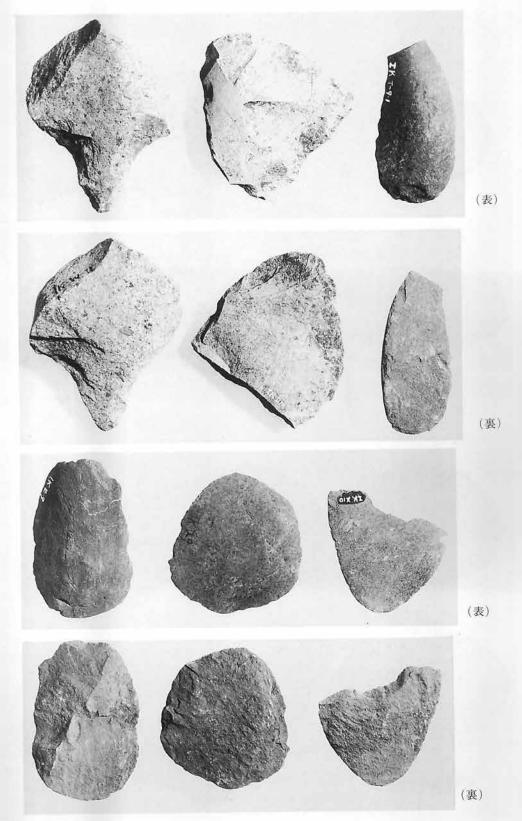


■播器状石器 及び石匙

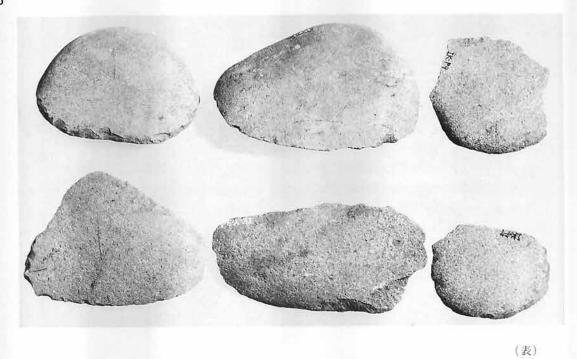
(表)

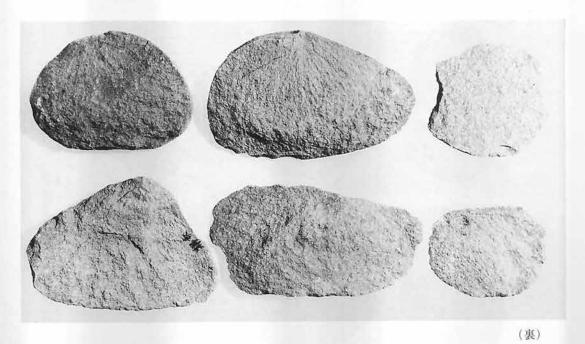
(裏)

▲掻器状石器

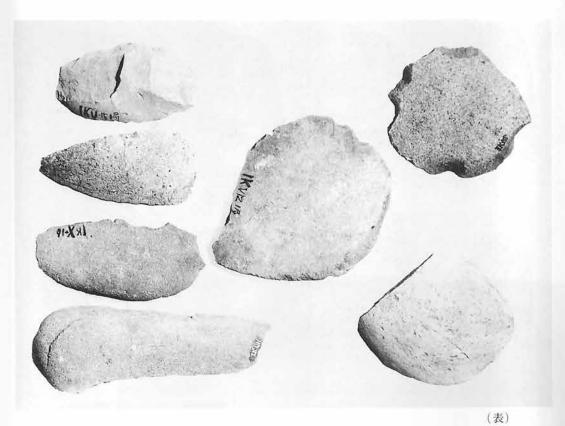


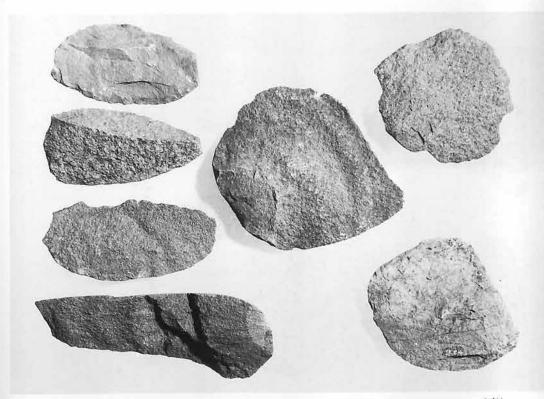
▲礫器及び扇状石器



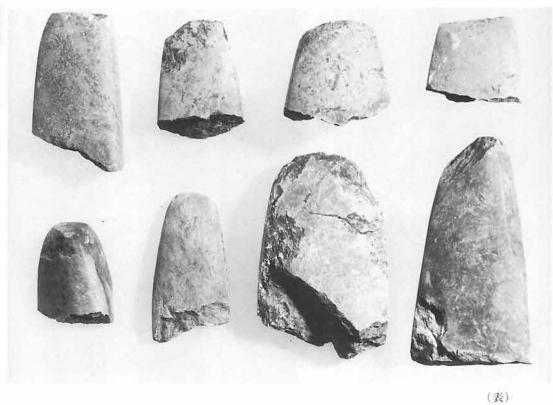


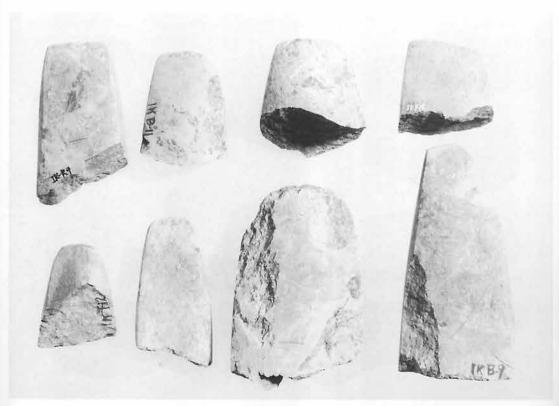
▲扇状石器



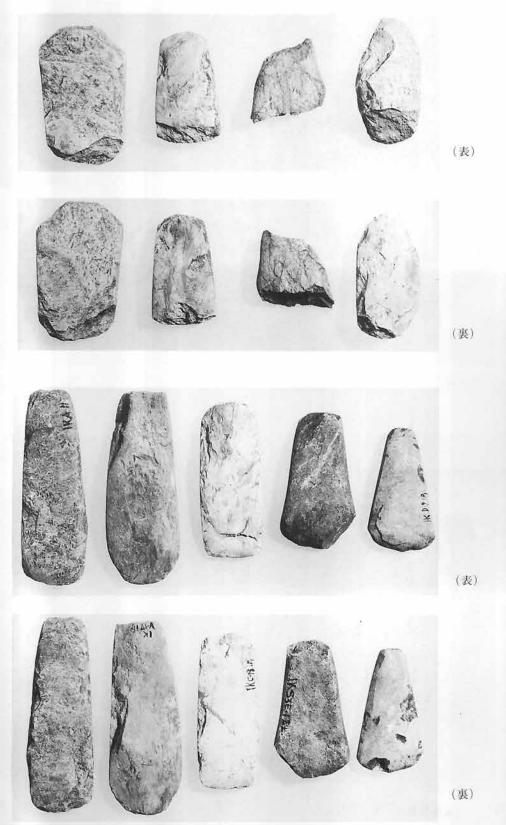


(裏)

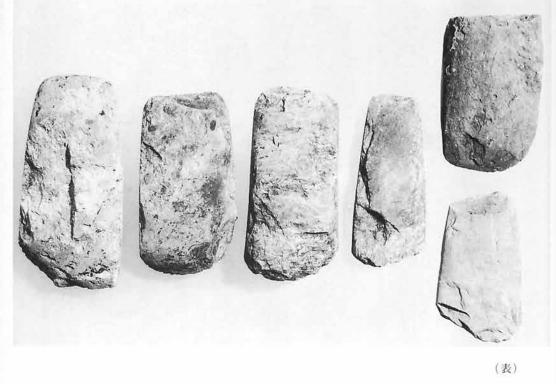


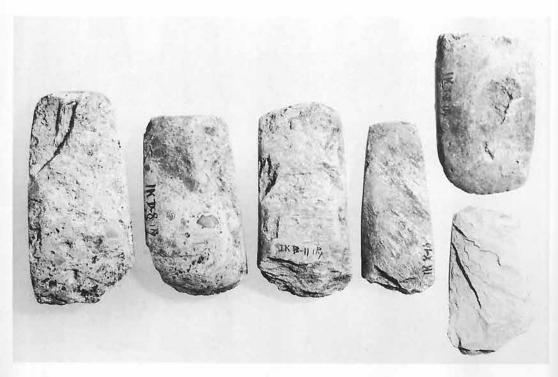


(裏)



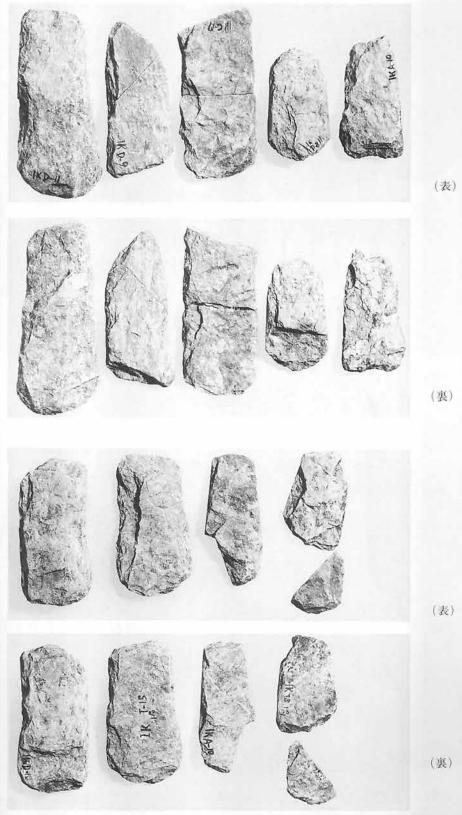
▲磨製石斧



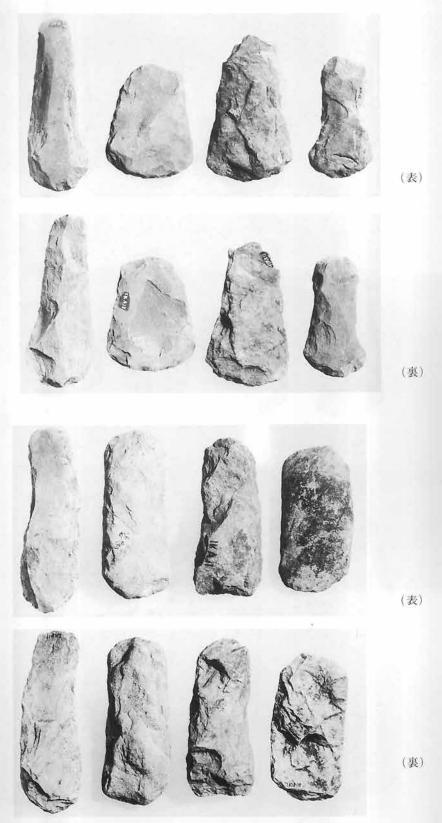


▲磨製石斧

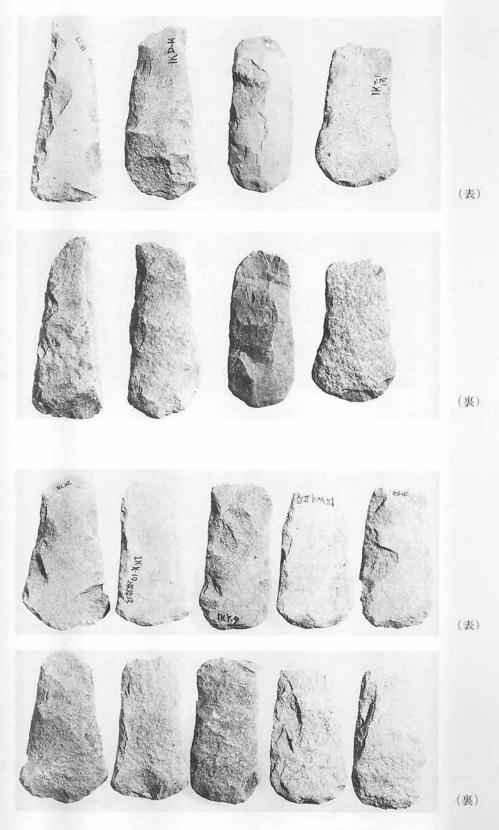




▲打製石斧



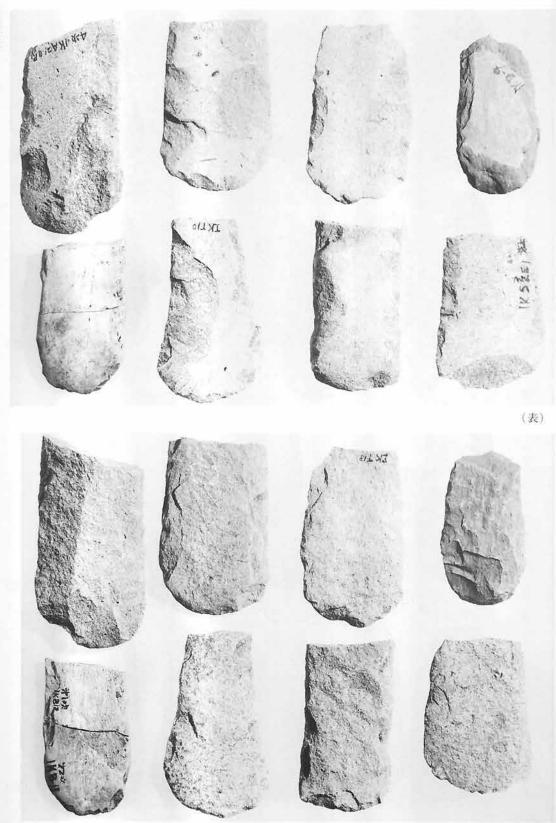
▲打製石斧



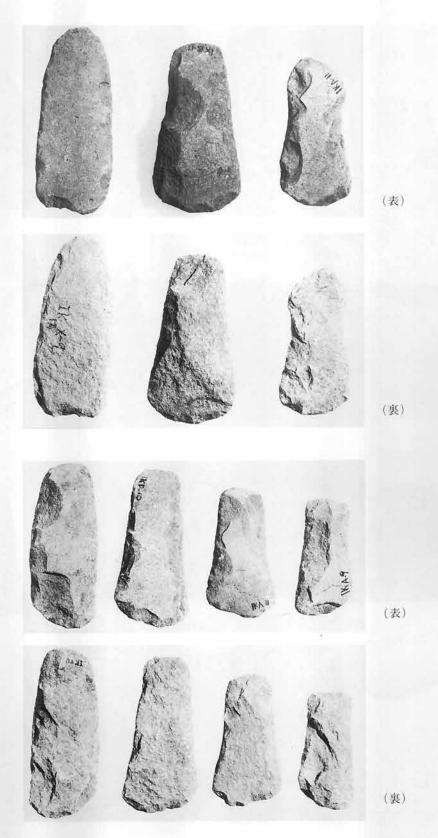
▲打製石斧

(裏)

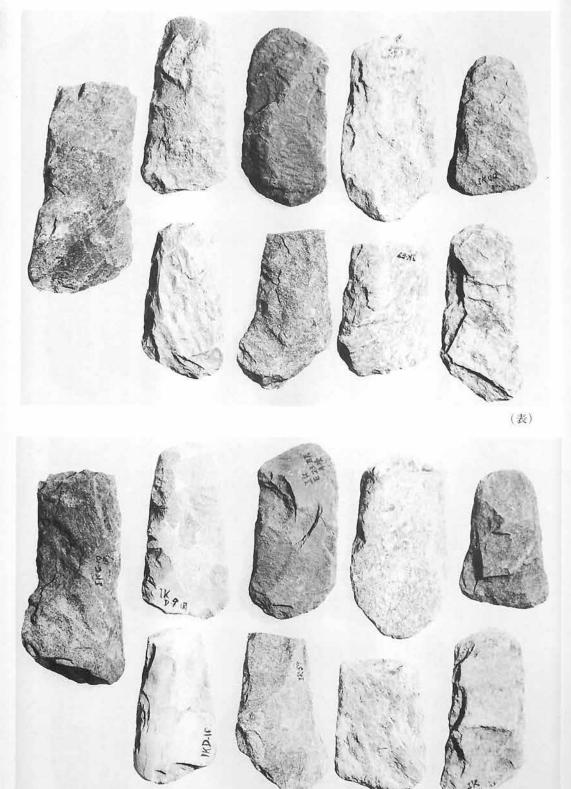
▲打製石斧



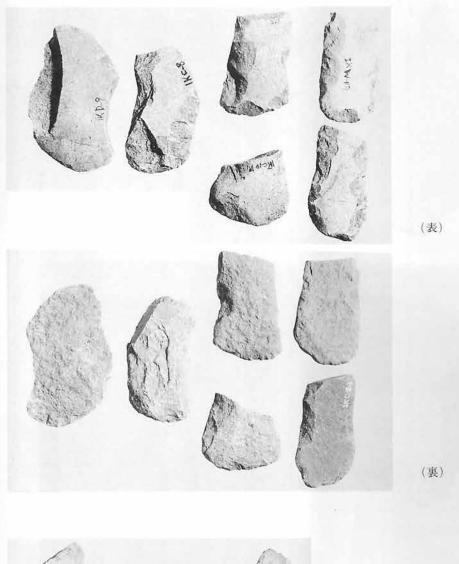
▲打製石斧

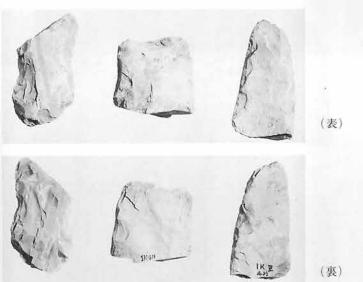


▲打製石斧

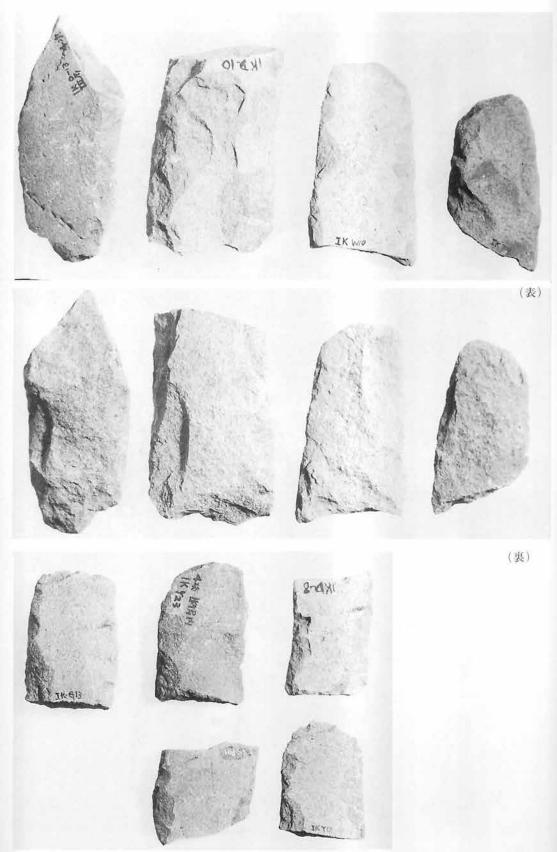


▲打製石斧

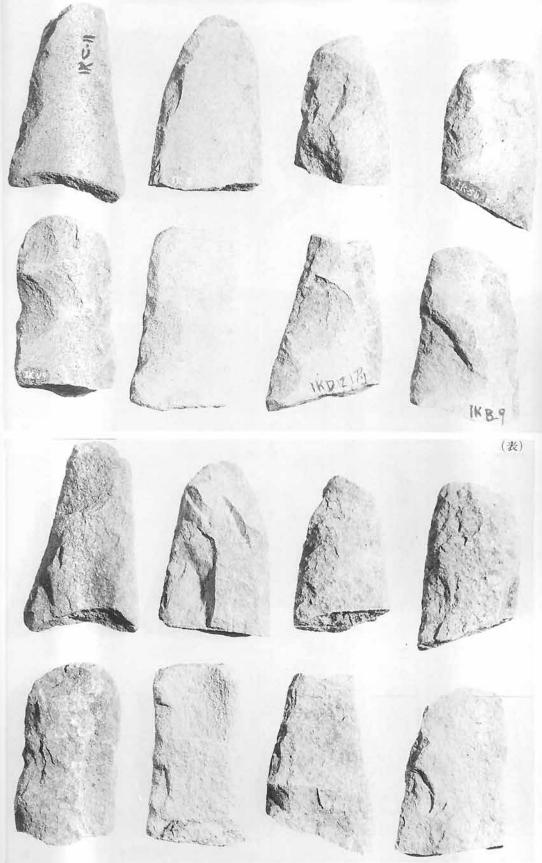




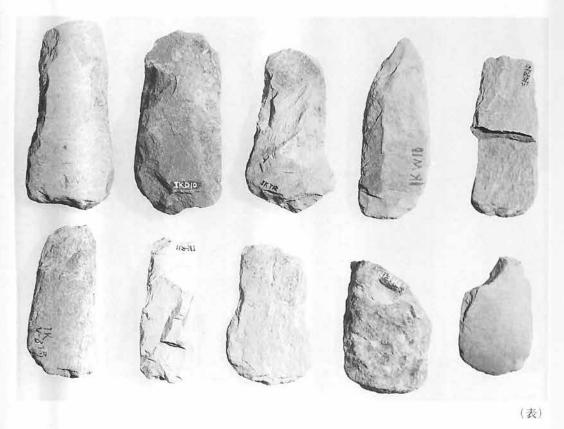
▲打製石斧

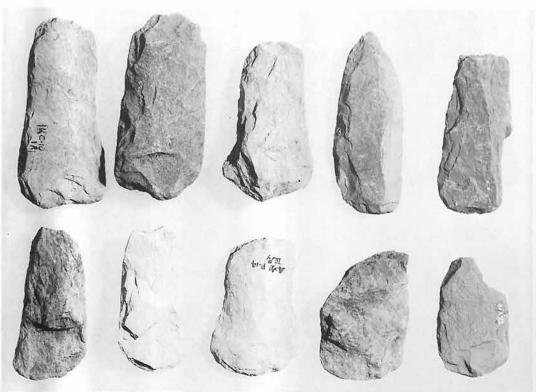


▲打製石斧

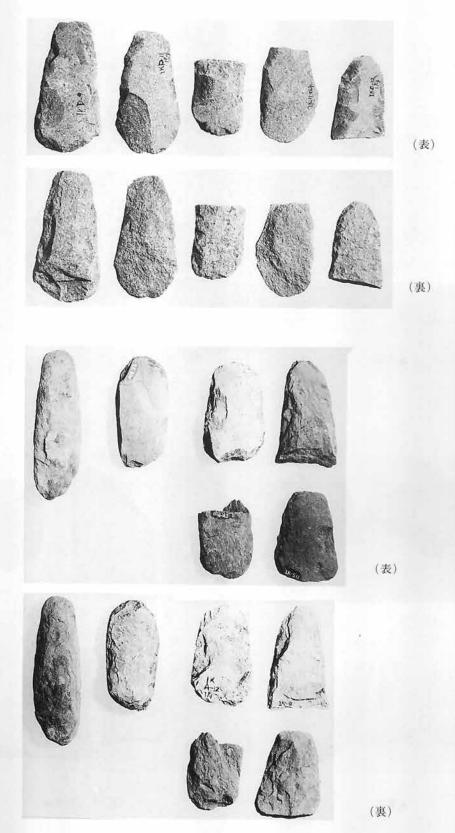


▲打製石斧

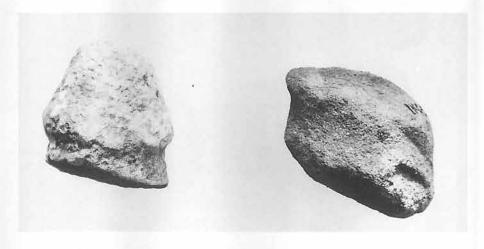




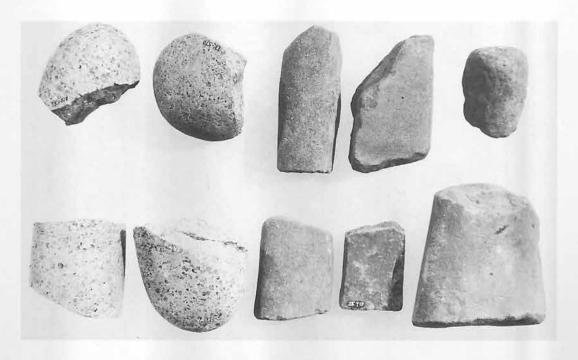
▲打製石斧



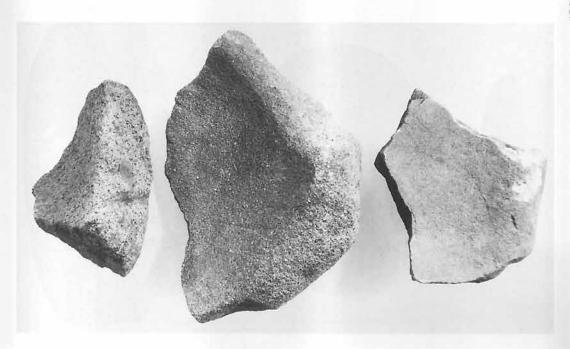
▲打製石斧

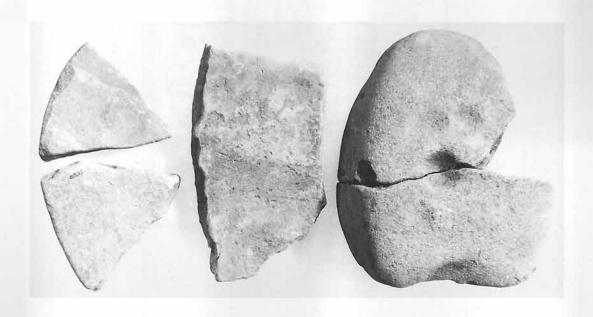


▲石棒

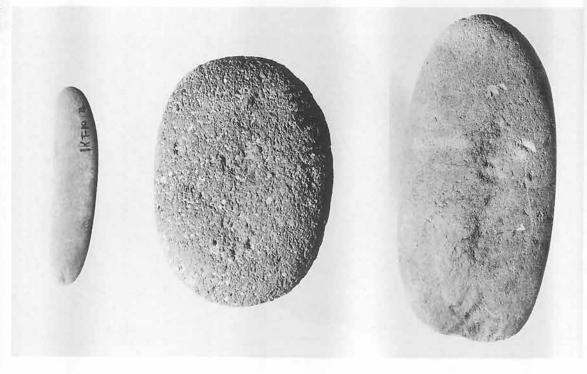


▲磨石





▲石皿、多孔石



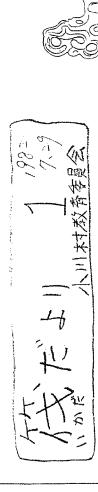
▲敲石・凹石

調査日報

『筏 だ よ り』 1~43



千曲川水系古代文化研究所編

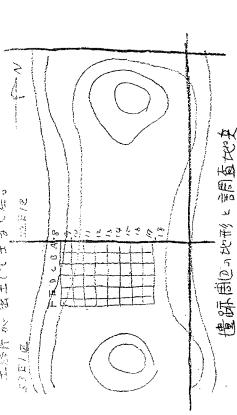


公路にの発展部衙座かり

B下午の三里童言商を発之、7月27日本38月6日子での子をでて発展部屋をすることになりました。

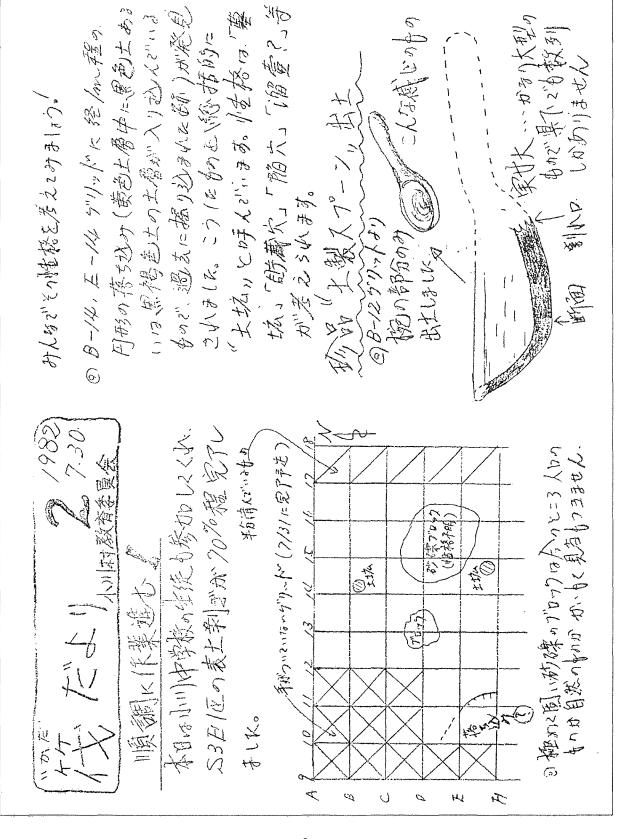
教育本更会、皆立人と対元の皆っ人、地立の留立、つご協力に 2月28日、 造跡の東正成の西条中の不をなりまた。 ていた日、エーテン大戦、異倫を、1月を出まるくな。 2月日は、9時半に第合、10日まり、千中重も9月5月、 当日の第事を祈露して、1月日まりで。

午のたらバンスホールコリナ技長は数は前台、中人



241-14268517 CAL-14268517 CAL-1

今回の調査を13を支付期(4000 へ4500年かりの前季の時期が13 ないかとまわれるす。 お表の存 (1) 725年2 (1) 725年2 (1) 735年2 (1) 736月2 (1)





《芳石草の用語》 遺跡、運輸漁物

(1) 東湖一、過去から密ひかた人間の生活の膨散を地下める

このおけて何らかのあび、カガタスニのあるい

故學、旗縣、田殿、住馬刘治之衛與仁勉力可入

アの出状だっかのと観察からか

本日内的研究の共踊打破かいたい

するななしななしが樹をでして、林崎、こへしかの 十四時など城海の一四座の四人、海勢ヶ将が 了、弱難二年五十一年五十年前前路の一世世、多月

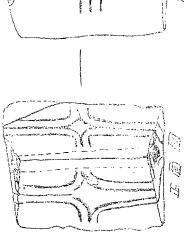
海療が、珠中、スーンの海球となるが、衛 海ノコール米町の現るとなる。

持ち質び出伏るもつ。るお浴がなどのよろい、樹葉 の人格なちゃいないなんたんなおおみ かいうりゅう からだい からん 3)通船…海倒少公出土了土部工格、压棉、纸碗杯之图也

2年八重次三十两五十十日明台七百三。

ことによっていること

(9)三角拳型土類品出土 MC P- Amminimin



時代中期仁夏多代3 (4) 三角型型工製品有影 みるか、中での光に発 たるこ、在路板不明之"

色通し、梅哉の寒寒かる寒寒かる祭りた 英田さめた 老之50日子.

(F)

举作面图

ま(ぶ、 (天), りかがマショ子、 マゴ朝音下でい。(1) 次,本日办公铺等发动,管门



依米、絶文時代は存命は探集のはんし巻文公でますに、十当によったのでは、いらか、3日は会会したちに、 大道によったのは、いらか、3日は会会したちに、 なん変に、 はの変に、 なん変に、 なん変になるを、 なん変になるを、 これには、 いずかるる名をすが外のことである。 后谷下花部的一

の食とは文字とう、「あのれの」と、大きくろうをは何によりとこかできます。 これただい かまとがらない いまりになってい かましゃくらい ちゅうしゃ ちゅうしゃ ちゅうしゃ ちゃんしゅ ちゅうしゃ ちゃんしょ ちゅうがんり る人本面は、致い力をかえる。(で、常」以代派 がほうの後、このます。 おしっが、無難不然が、打製万条とのは立

こた風いは、妖なか、ななかといぬとからる

存に「より徐かいしのられ、ハンダーのように人気もれました。 これような年は、人気のよすいように、おんがれまったようにを

打製石条の出土の物は、農村生活のあった 金正明ではないで、しょうか。

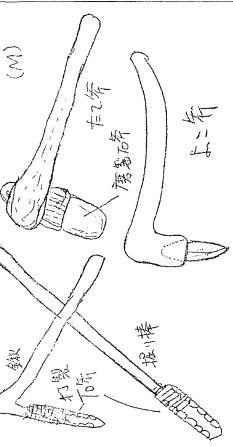
万器のお話

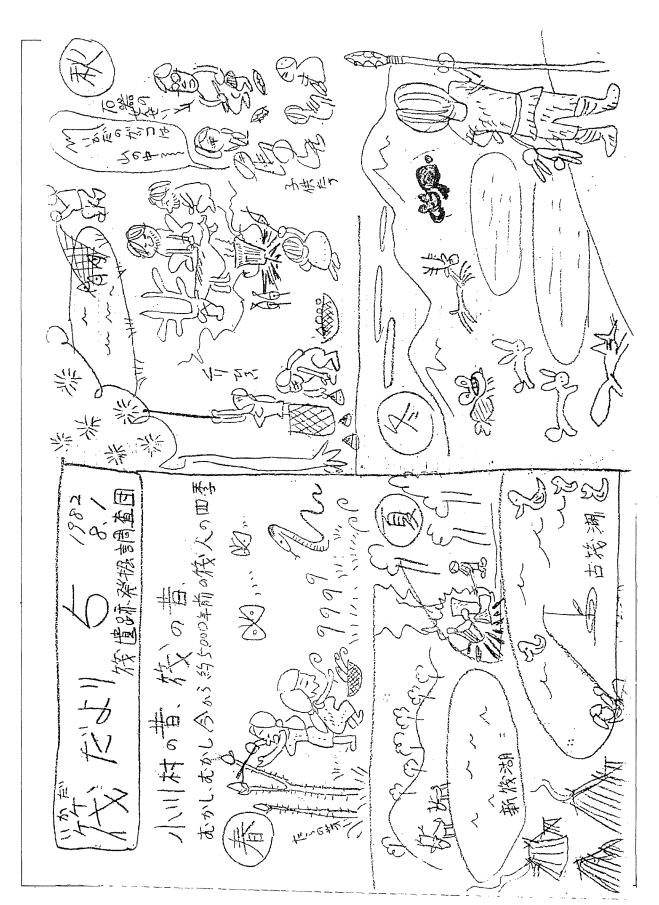
今/伊七九スニ3道具体 銀 930以、より、日とくと、ならのになった。 そのぼかる、金米ギのダイス おるには、ステンレスメイルとおい、えきおり、たらは、金米のは、これので、これらが、しょきなり、なり 随身の よべいに できょう ているすか、これは、林能を一大はて力感が値かく

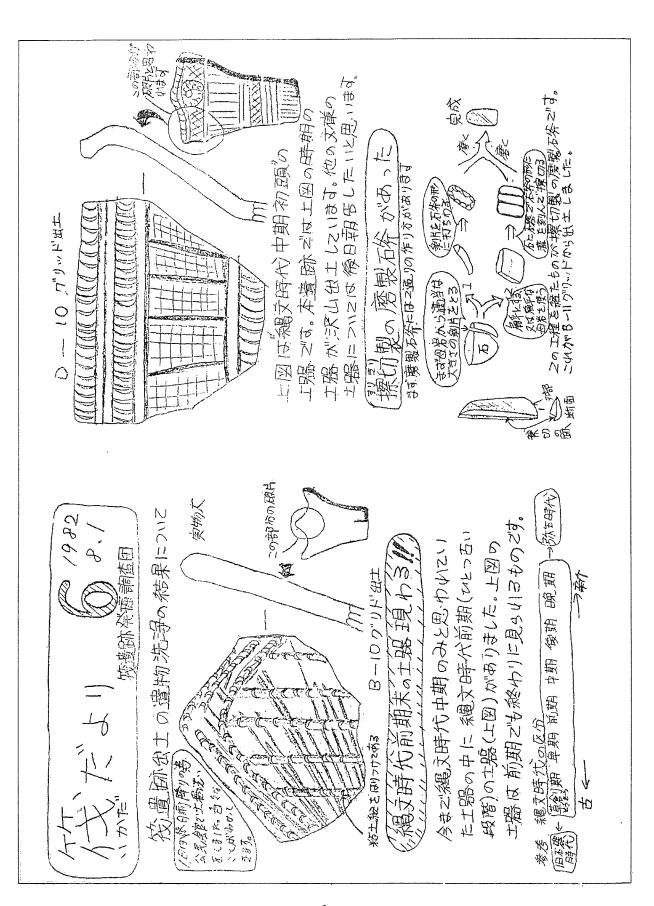
部、金田、石田、大田か、コハマハ各十小田、その値与ったン特が生が、ヨとんと、役立ちません。今年の本のでかのたまりた なったいががかる)

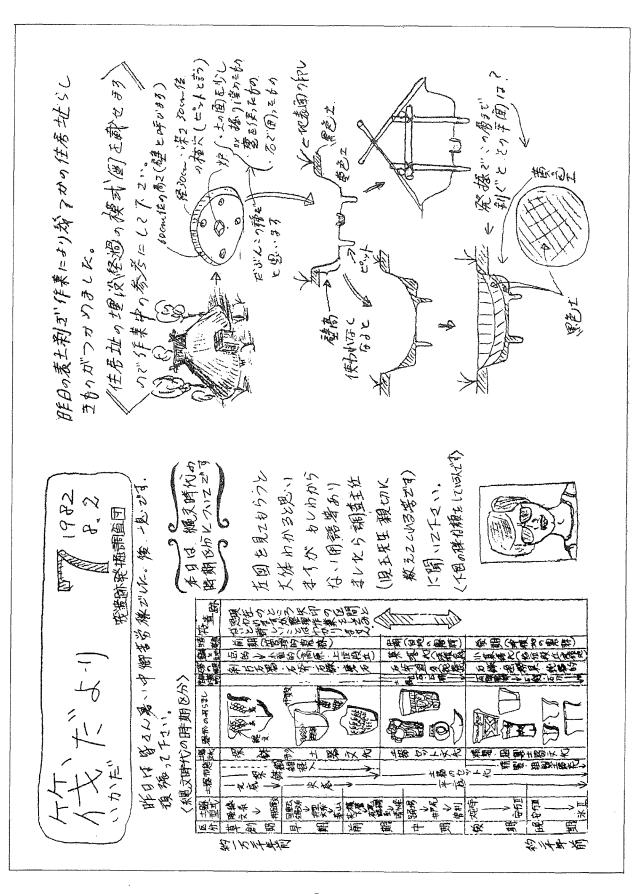
の水できた、かかいてから歌館の布は、下はたの一個 七て、な、個野をこは多くれ打雑の万名が機動が ない出れています。打ちかれてかた石をは、羊やくは、根のようなどのもっなりれてもなりたころを料のような用値の石器 おおの下衛かれたとなるられてになり

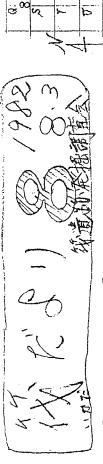
そのみのつけカニキリたて気になる外がるりをはる











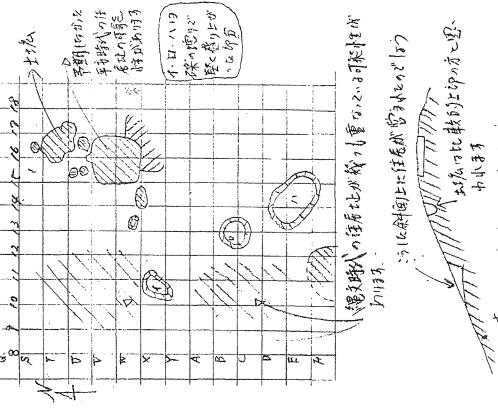
明的作客址調查八点 ボナログがアク

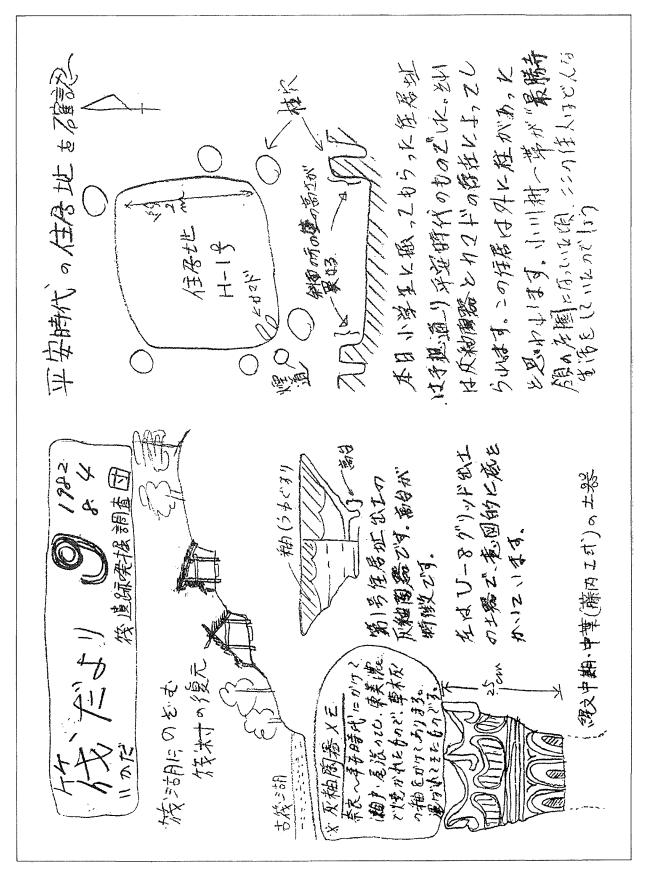
重州進行。明阳的任务址、天观施設 處外人にもかれらず、保何奉定題り調 のあるないれるしで様、中学校生徒の 教養に満ちな二部かより分別で一日 ハ調査がでまる運びとでりました。

全国しかい、まかいなよい面にあし任存此等 明確以有多次的明日日子對全員で草かきにかり 本日まごに分れが何日を国かりジャが、かと 調査いるいま作物に入るという対です。 も探りないと思います。

"分八點、住民社办与管工人、接以上公事务"

③具中の地を新聞しく住民の記するしい、たのではない





(個人小部面) 節交機加減之江北人

出土海都についっは、女父のいの古国直区域以からまたかんたいかの名文土然だし、主に名存在

とのる器が、校立かれました。これとはグランド(年1月)毎に集牧かれ、この残選隊の時代判院か

特色づりに影動なる者となります、遺物の整理、検討状分後雄かられるしかではかいない

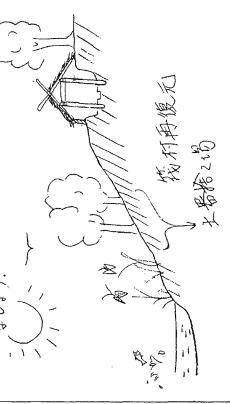
《戏员》斜面以は住居处西与了"》

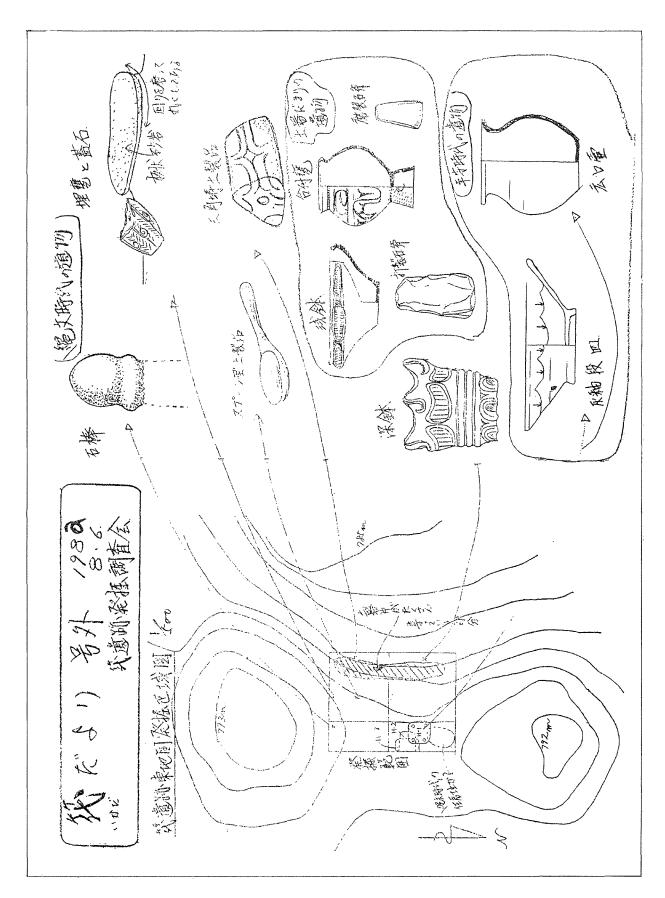
今年で個針面に住居地らしを港込みが繋むの個直の結果が歌めらいましたが、昨日の間直の結果それは単行3目然地形であるとが、判明しました。この事から当時の人の住居は、郵面でははしより高い、頂上附近にあったのごはないかいと思いかいます。東京の調査に期待し

1、加土正七(年、今回の言問直に参かとすれたみ たちんの作業あす(はころです。 本有以後に続けられる放置所の言問直にかるこの言格はかり下さい。

編集後包

地位の1952年の割角にそうべく一部整合物が133でんでは、そうないが、東京中間の住住を検出するには、23でんの部での非常に残らに対し、分割が高に、一般、185年に、東京に、195年に、1





九"年11年李成月

一次中華(人名多古里斯) THE CHASA

学们第一节不好礼格

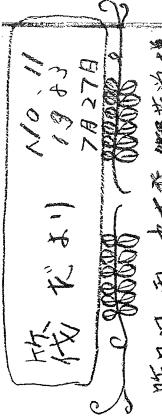
THE WINDS

O THE FACE OF THE COLOR

の子をされていない、上電子は日野の一番の一番を見るのでいるをといる中間。

注監 (別數書職業) な形のあらまし 12 × た 温型式 定 豆

麺文時代の時期区分



· ラかば 込の峰に位置する年子時がつ住名 社のでんらは 松をかにいるので 1,5から 東側、根のこからからにもう、 と軒同時期、住居社が、増入いる可能するがかります。 。 圏 (下(た) 手がが、か(をんたって) (型)かと に 面(例) し、作をなれるを、込からしま もれが、 見られるす。 この に格を明らかに することも、 う 美久の電子の目的 ハーフだ することも、 う 美久の電子の目的 ハーフだ

。ことで去年の割事小りまとのもにかまました。 く当初考とにおい面斜向には道構の意と との針向はとうやら発手的のができて発 用工水といたおじる。 2. 山小中ちか、指着の電子を道見にある 名様 (知度る)が、かまいかりにん。人がに打造る斧、校がかなりをいい、いい、はた地方の七老女にか、かなり、現してたから、ます。

八四年後於海極四次

monormone

野年展の総有野に、機械で四岩いおして も倒いりかな大木が、路田道い、路当との 人からり、倒いました。 機械が緩がいる 日ですが、かはり 機械を造った人間の能力 の方が一杯とだったよりです。 谷松調査力 機械のもではできせん。 でからかい だっちん いるいる年日は、昨日精査して頂いた道、 構を統計下げます。何か、でてくるか期待も ませて年日の調査に望みたいにうてあり ます。

3. 黒腹がものがです。これは失のれにつけて使用したかです。石鹸が検がないに事から解除治力の行うかが、ないになるが、ないないないのは、ないにいくないがあいます。

野りの発展成果について報告します。

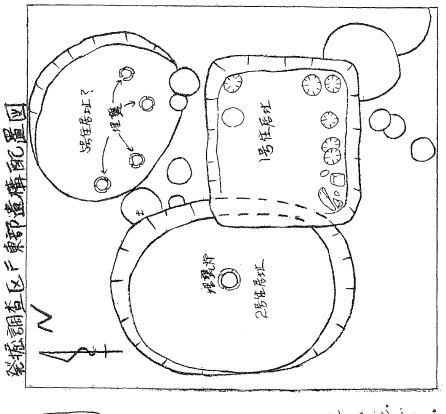
(2号任居址)

在住居此は衛門柳左行方大生的の住居此で、中央に程鏡がが出する。母盤かと持つ住居此は、梅文時代中期の初頭に弘現します。このことから本住居此り村期初頭の住房此であるうと死かいます。在日の調査にまり、在穴等かより明確に付ると思います。

〈5号任居址?〉

春蓮様は、海崎の住民にとは異れる様、なけ要素をわってあるとに、その特徴について述べてみたいたのはあります。 春夏の住居はにある物、在穴が、緑似さかていけいと、の、母類の 住居ない、一名との、「個(ない、個)が一般的で、あるのに対し、在整備とは、の個様似ながいること。しかしたのの個が、年間、簡に重備の様におって、「毎を一様にかっていること。

以よの事を終してすると、本産構は住居は年来の性格と果れる状務をもっていたのではないかとれるのかます。能して、むら作者はでははし、何か他の意構である、飲食線の



可能性好為一方面。

非常にめて類例もまりあらいていないので、月後、より詳細か調査を必要とするでありまれたり。

M C L 199 1983

昨日の調査結果について

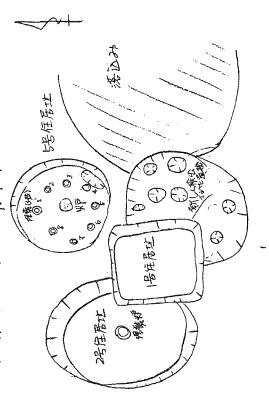
1 工器格(場

鉄道紙における観天時代十期の人なは、台地のよどに住宅に下! - 新田と上部を振っていまいた、そのでは深からからなっておびないなれていまり、おりかけ、現地作の後の部のでは、北部のでは、海が、東西人なは、とう、これがの部分をあっている。1上部と終っていたのとのことは、あるとのことがある。

2. 5SERIL

一年日年十年存在といるるのかどうか、発売を残していた遺構へるか、野日の舗査により任存にと続かる事では、本意構の技には、本道構の技に対象がが、大田をいる。とのののの、大田のの、大田のの、大田のの、大田の から 橋田から橋いている事が明かにない。

3 新しく様とさかに歯猫ー ちまで年辺時代の住居近の東側にあって海辺かけ、設 だと思かれて、すいなが、野畑の間角とより、住屋はである 尊がわかりました。歩の野かは野野のの住居なし様な えかで残っていません。存は非常にデュボコレ、大名の存代 があります。検がなかているおは、縄文時代が開係集 のかのけので、からくこの解則の住居だと思かかます。



{ニューステッスク} 本日をり編集をが誇ります。今までよりをいちのから できると及いますので、よろにお願い歌(ます。



森山なーな、アングニアンチをなく ガダナト かしなーな にゅうとうじゅう

長野市が太没社を(ている 大い土人の東玉土外路

> 1257 ACBBA (5)001 E13 C10 古が、政在は多ので) 143です。 小治教のわれるれたの

森嶋 統先 お欠ままです。

たムコエへ要単中とか。 上田の去推立人。現在 言的直讲的更

官的值子楼

あったの一年年の大学をでれていまするとなっているのであるという。 よく笑ったもこれ大衛

かエルのかいほかろの変が変を 新業年の女権(マッコするかかいの大・大変 極海軍看海河海水

」 三面がかの青年周大(年生・ 三日野にで、部首に条かの 森嶋光月またっかもの。事件。

主任

茶合在高のセンセン 存れかによううちの

カアチャンがよれた口のますない。 (分子が対して) (分が) はっかい ないがい かいかい せんしゃ せんしゃ せいかり

調面員

核とかは不川れのはない 國際院大司3年.

一かたがより回の統領部

を中ででして上生が強かべいるりと日母だり

んがくく、個もく下かかといるということがある

1 /2 -53(1274) Ed Ch2-

本の、ようやくないないまいりました。114時間でいてまりではいまるを見るまず、そのはこまらまりまりではしました。

20年がまずおど名になるは第5号件おがと、す。このなおりにお子の名が表えなからのできしている子の名がなななからないところの多いものがした。

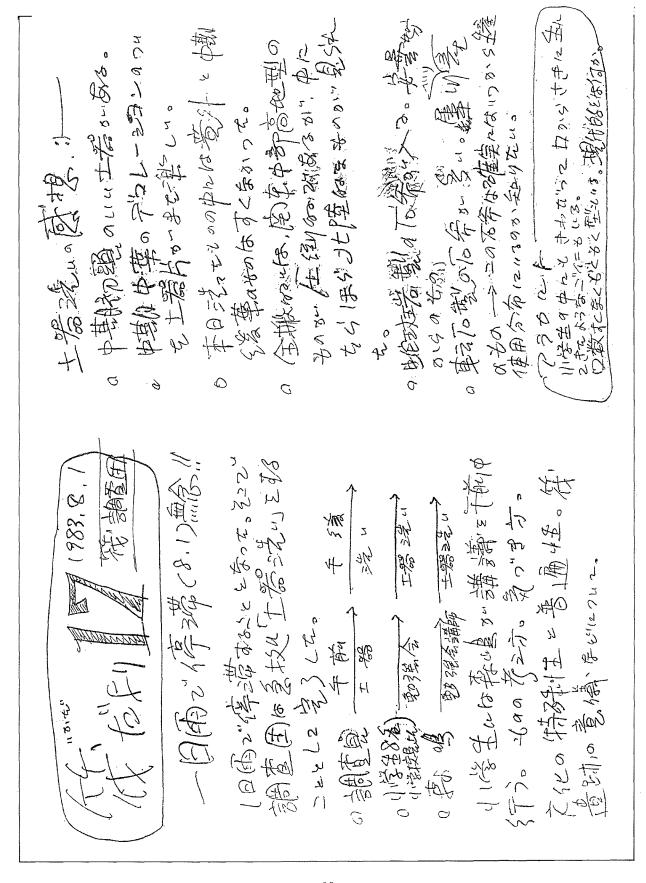
こと。とかんだなないろう

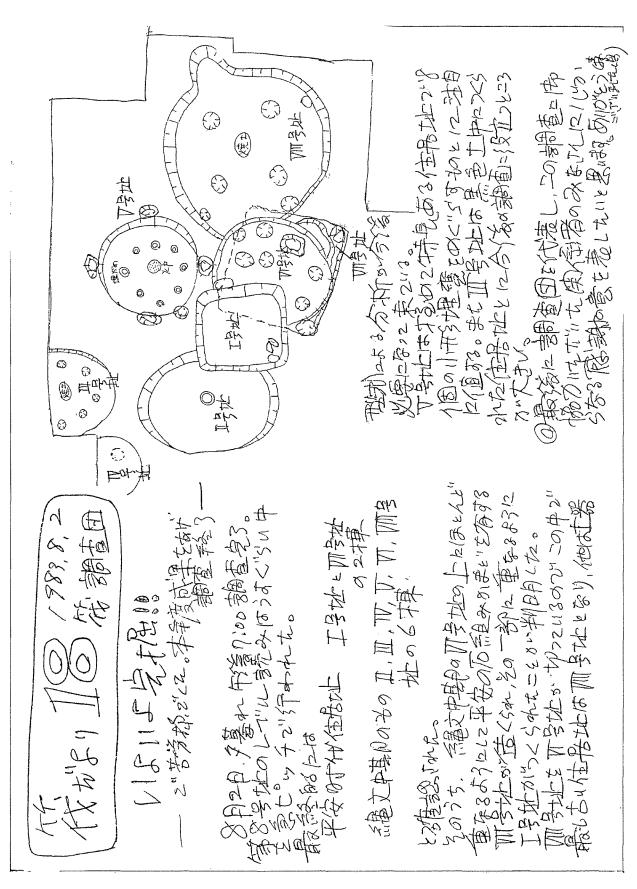
そのがするが、産ったましゃがかりのあるままとれる いるのもご主目されまして。しこの人多男のものなが日

21 本代在日本中一个100gs外 3)そのつま"は各意にたことは、本面に地床が から自分がでいたれる 5 miles たてなかし

みがいない。みなんだことれとしただけのの海感 と大きくがけなかれるり方をになっての変がするます。今後の特重が必要がす。 あれます。今後の特重が必要がす。 のなれとからんで、この任格なが、直径3加(13) ロコの温度や指統を手掛(皆利丁へ回到土器が) おばなくなり。なるい、意のまか、この後になられた かれる。この(主持な上土/同の自給が(乗ってが、温まえ人)をもれていたころひが、するしかをここ こうしてなりにおってくがあれてなっていまないかととれれます。土ままたをはかますには、重いているによるによるいますが、なかいの著名 おめて存在なりでもしゃいるとも言えるように のものの中がは、かなり、小田をでがあることも沙生意

関取りつ現れ、児子生、翌川七人去ろう、初日が荒れるく、九つ、鬼五名はと、遅川て人が、昨日 かりました。どれずいがでうこさいました。変わって関取りことを過かの独立がから必ずかが得かい 帰られました。後遠野調面のために大変御苦労 新花, 717、柳鹤、风牌的、是 アンセル







され、本日はおいかに発掘された。 本地で大力にに対した。 を多した。 関係に 所の まがた かった ですが、とうから、大々は 天の神様に か、後ろした。 関係に 所の まず かりだっている おっても 天の神様にあ かしたいない。 また たいか ないか

TO THE TANK THE PROPERTY OF THE PARTY OF THE

の別により、大学社

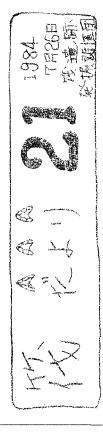
調算である。

然をまい家出すらしいるがみなからいとれた利 三周直主任人いけつ 大は陰調を可いたとないて 当局か後か、き間塩の食が回むのこうにと聞きないであ そうなれて、かし、その日からを発達さらかに 強をすたりの問題はかんなくないれた終うしな る水も風をも続きました。か、ないこうなら戦病 放放 横随在至行下口保多户门了其近户楼上口入 なれるのはまななないにもいるというなんな 引きはいまれていく数はないないにいるとという いものと思われるる。不人のな事、教える違いるの 院邁 師網看に対し、九四時幾級都屬之。

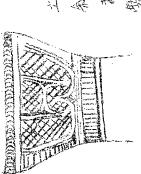
小為生產心、教養生養也獨多心衛人们かも大の小子也 (ず、我の海道にままに、海の、カラ、先端との金響人 んし、子供養人務には成成でかかしないませんかとはれ と引き結かれてかく教育の親でも一年数の場で 大二、ここの大変をからのこのとの場でもあるのだ。 小此子首。(高剧在出任、照正章文共生) 200226

スしずいました。本村内の布をでして衛れてい、教養がいるといって、省後も大食は、と思われる 日路なせんなかがかれたないないないないの 高間にから、1174のでいちいあるとでまるでけることのあるとはないには、まずかいは、まずかいは、まずいます 聖北のにおり、海川部有馬の次の東 CB 1年 的 1000 以公教教院校司上 在でのここととの歌に行為は

かがるす、それにするないかな、は高間をに然かのるこ



一衛文時代中野公園之上聽上出人一



現在されのとろ、投資調では「額久時代は関の信息が、「新作金のかている」でいるは、こからは、工船、住産があかずがあれる。こからは、工船、住産はかれるかます。

二院遊園心和有衛家時代中期の權稱二

工題、中間をかれて器を登録が下して深めて経典を経過し、機構は小橋田和を見しい(記号注)

五群 中朝教女子學之母女子在在打了 175.

>衛文野人の五谷(秦然編)う

鶴文町木の人かは、一般に 正くに たる水の水やででに繋で在席の織な たいとなんと、いたと雑成とが回す。 住居北麓田、10、1日、中央に広場なか これように召らんで、2、一位の観 たれた回線も 規則をして機大のた の、の野舎に強着していることがか 数り3日。



くとなっているというと

横浜ないた土器は絶え時代中期前様 平華の様相を呈するものでおります。特に ろヨで、後蓮路にかずり存在しれいと思い れていた中華の土器が必要に確立かれ ことは、後蓮路の世紀があるとでたちな 収穫で放りました。またこのことは、中期 中華の住居址の存在の可能性をも含 (本日の人人) (本年 1867) (本日の人人) (本年 1867) (本日の人人) (本年 1867) (本年 1867)

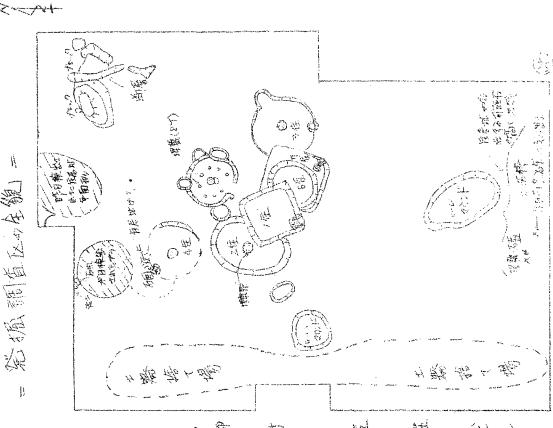
北側偏斜面板張客之連切棒之

Broke. 歌遊客腦 低海军

Ĭ,

金人专主部件、打製石管之前,以出工厂。信居在的存在当多可能提 シンシンが明らかになった。然って、それのが通路にな 与松路也、在結果下一日中下下了一下一個大個國 作日のなかけって、飲みないの何一、ななの父との一般(機動 一路社かい事、在居也七月院門の田田りの一野大様のゴスか。 る女文の機能は難勢のみではに、福勢へはか、舞園に 無何間にありてかり、極智に何かの尊働から隔離だけ、ありまし 白いなければならない。とこれ、をはは熱極なと強無軽極 一切、こん好動、梅石、石掛が依然のいた正然には称しかるな を大方 分日日 北個人衛衛日衛衛及之衛衛一次衛展 一本日の外外の展出 で着くなってから

以よのことを考るか、経典ない郷田の日の日の日が確定 山下の口が不同因の係為り、我該の我然打傷につ おけらればれかけいだねった。





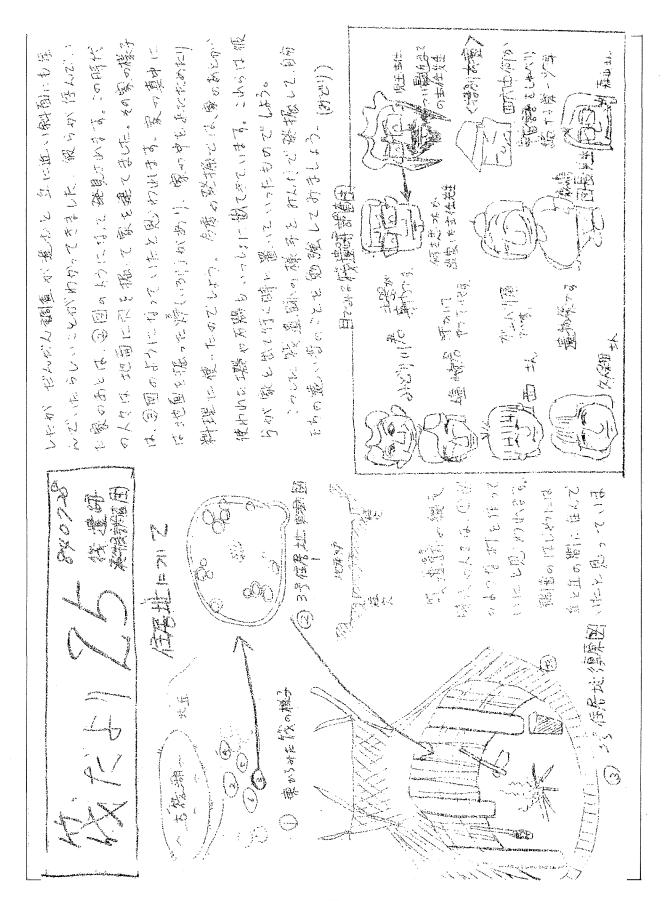
土務の原業は日の治生は無難とこれではない、現代の在文化ではなるのではなないの数はいる数はいる数はの名ののでは、然後には数なののできるのできるのできるのできるのできるのできるのできるのできるのできる。

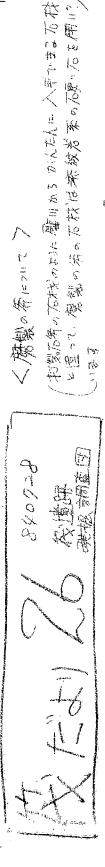
から大谷山の大山村、湖内地に1714 治に疾性(四州井、村川海)を南中市(中城市) 2 近年 (1712) 110 上 機文明の上は opportをお記明されて おので、石で子は単のじの、成的を作り、織り 粉子を帯水、ある、1は、雑がドロけいにかか、次々とよるへ

ながないよるよといいなられなからは発を光がらいてまった。との際、上部に大変をして、上帯をあいなられたというにものいないのたが、一大なな、強べ、の圧がのはあるはいしいにいいてかからまる。

この日歌を製化中 京称 原館にいってはい、ラルイスなの「だけ」ではなった。哲学のか、後の一般かにこくからはす

大学などのかは、今日のからのでは、



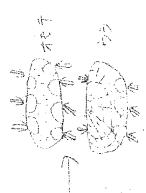


の推験でもあります。在上した「ある」が発発のようはいるをは、また、80%が動業を、関るたる」にのをからない 二次、分次の電動かった石布のあこいの大山田上外 けられた、強勉の年で、ちのなど打強の年かは。 のの作品物の

のあるらかままずる

日打場不能のおみを大される

原数個の数はた所 山山地の下谷川



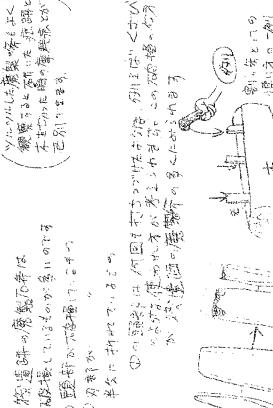


三 后點 林葵

おなか 花ましい







明五年之

上楼一里

施布なる

李口心遊 和

學士などなな大は聞人になれてあったべるは

八大蘇の本でのこ



一次海部中部海湖



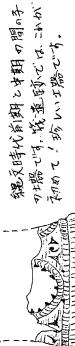


41光灯野力 KEPO为向 らかている.

く正面図〉 G-9 デッッド出土(南側の場番の場)

れています、年本的は寛都もヨお何かられが覧いており、短む 工網)证明价约付约 为3小阳祭犯関係必使用之外多之考之分 災者間、かかて工風が後のるれるした(母がは水前とも いましたいるいろですがし、いかり倒は機及の年代中期のものです。 して使用したと見かれるよう

----- 總文時代前期?中期?二



Q-10 ア"リンド 出土(面板の糖格で現)

いない?と見いまる。(内)

使用した固いだかれっています。また、生活機物からは、名町 ·热力、床面的分板也至水之1、干了。住居址1的態、土粉水、網文 一昨年度力調査工理難の検出るいて、、作角則料的の港方込かを 小砂料しまといて様々かつドを住居地の壁として使用し、砂岩を 探リナげなところ、住居なごあることがわかりました。この住居はは 一面間一件で了!一面間||年面に住居地配記 時代す期後茶の住居北と見かかりる。

にかいの住居などもつくるのが 中期後極らいるななmxxm なまあってなれどいれた 一軒でかくういのんが、住ん 旅光期、七十、絕別的代 然の強ったものでん。 カセゼンセストでう ていなのていしまりかりろ 日 學 帮 第12号住居址 録なかいが 模松如作理覧 躁されば 石風、水戶

"30歳くらいかな?"とか、"妻子も、「たか---- 帯のも若者をつかまシス. 並母、来調直補助員についての奇怪な晦がとんています。 こしな癖が一体どこから出てくるのでしょう---? 某調直補助員 はパリバリか22歳で、まだ学生で、す。といかく若くて妻子は (編集局より)一言 一来うわたにフィスー

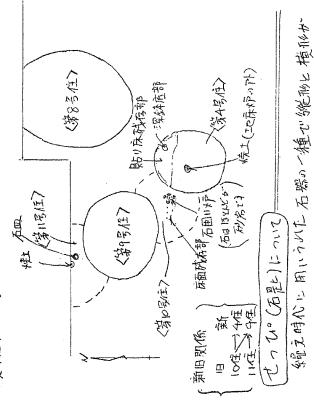
(三瀬)

(大) 1 2 (188,7,30

コに個」金月面の住居此について

第4号住房は二一、8幅文時代中期後葉の住居はて 昨年度に約35と 据り上117であったものですが、削り注で 貼り床を 先ってしまい 段差かつにて しまいました。北側に 展 3貼り床の面が 本来の床面です。(第二ムも 梶り 注では 4分注意して下二、) 第10号住を ひかて (変し、) 構築さ 水でいますが 西側は 流これでいるうしく アーランが はっきりしまた。 遺物 としては 実験粉土巻の 危許が、灑土内に、また上下より 打斧、石鹸、 治髭、 (たの・ジンが、出土しるした。 第10号住居江 … 先日、石囲い炉が発見されて初かて存在と知ることのできた線を時代中期中華の住居此です。 週の悪いことに 東側と第4号なに、北側12第9号を住に、それを山切られ、西側143元れていたは全く不明です。(恐うくんと同じく 円砂の ブランたったと 思いいます。)原面も指金したのり、ほんの一番 覧り床と 競引の 30です。 従って 本住房 はに 所属 33 雪輪は 13とんど、ありませんで、「たか」 数点の土装りと

がのの年をかる旅か一点出土しているる。 明日31日より等85位、第9号柱の根り上げに入る予定で3かるかるかなが、難い作業になるかと思かれる。暑い中で3か注意に有るがと思かれる。暑い中で3か注意に有るがと思かれる。暑い中で3か注意に



「日出土したのは 古4で十数の横形です。 (たちか) (たらか) (たらが) (たらが

存在します。皮はさがかを手は用金だと考えられています。

(あらかると) 今日は中央に見会が不能日だ。 たそうです。 厳念にはおかり でした。何次でしょうか? もしや、传格式の準備ではない。 さしか、

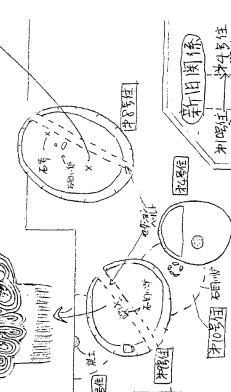
調查田路数

北南年面のスンの経路はたついる 本日の成果

北侧斜面に検出北北十岁8岁,79号住居址の調査が平日 本格的に分かるした。母のにから業は並中のすき切り上かる たか、小かった事を幸に当す。

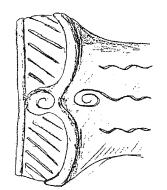


ららものだったと思われます。 工器片の装飾はい 次9号任如3出土1年



不同學 上回の分前の住民なは石区のように、みるよろ 300時期にかけることが、マンきます。

788年



縄文時代中期終まのもの

年面 と接出てれた土場から

书8号(王居江》)

/ 才を写在の床面から検光 ご以た工器。

こからは 図aloな線に インレジョンか、「ほどこされた土器

\$12. 博製石谷主出工112113日。

(为95位居证》

万国、华、石智智、江北之、守万、

11七下十分1十つもかまとんかい と打定されます。またいはか

ゆ、多量に出れています。梅出された土器のら指定して縄文時 けず月の巻のものと見しれます。土然の結片にあいてみれば、半ろろはよりややるいといえます。ここからも石園、かかる香館です れ、もろんなつのよる、四角がに回られたかたらもにいると思 これ当有.

疾者がかかがは4つのタイプがありますが、弊代により下回のような死が大いかられます。

万町小 (世界なりな。) 4 石町、沿い四路が入り

麻酔にに取って作む地深が大き 水土器が石を用いばいてい

今日は、敷しい雷雨によって、作業か1"中上にも、2(まい)また、 カミナリ こんを 呼んたごのは一鐘でしょう ネ・・・・



1と個人一面に新たに井町の住居並も確認。

今年度(第3次)の、終産助発掘調直の最大の目標は、昨年度に発掘、1七年居址群の北側に続く傾斜面に 住居址の 北限と探えとびした。

当初の予想としては、北側約面には住居ははほとんど存在しないであると思われましたが、4~6川、アルドと 柳葉 した に続いた 総果 第43位以近に 第8,9,10,115の各住居近と 発見し 校置跡の 鑑立時代 集落は、北側は面一帯に 広がっていることが 確められ 我20予想は 見事に要むられたので に。

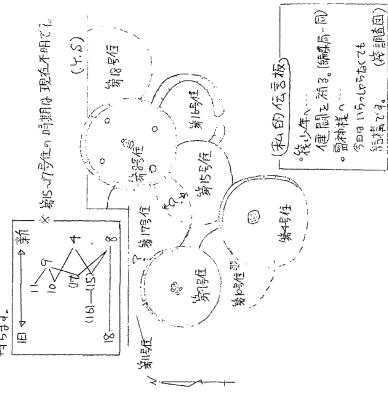
さて、以上の5軒の在居びの他にも北部面には、いくつかの落ち込みか、存在、精査と説は3一方、昨日、台口、第8、9号位を掘り上掘り上げた結果、新たい4軒(第15~18号位)の住房による部により、11号でのアランと一部 知ることができまれ。これにより、北台面に存在する住房には「113」では、11年にですがるり明確ななり、11分に。全て経文時代中期の住居はで、があり明確ななり、11分に。全て経文時代中期の住居はで、変化していく在居の様子を知ることが、でき、絶かい時期で

われており連期の出土生とかないと込んいりる。

北約面の住民江君の様とは非常、難以、3年間続れ、犯、五層の様子を知るいた為、ここかで検出できからはいかといた為、ここかで検出できまからといかさん。

くら日、新たにかかった 名位 Ro 找引 と新 旧 関係 シ

為18号任一届全元コントにコリンムで介らい、発表時代中期が頭の埋露之



於5克戰 有日 次省院 108078

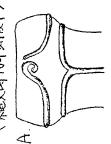
縄文土器の作り方

-3. 施文

七ます。その衣装は十二単であったり、単版であったり、ミスカートであったりします。それでは段強跡の縄交んがどのように またどん打着物も着ていたのか、本日北側|斜面の土路橋で場よ 縄文人は流儀・流行により、土格に様々は衣装を着 り出土した土器を例にみてみましょう。



絕文時代中期後半 -87.1.1.出土



けらかています。そこでこれらを、つけらか いの土路しかは、 ユンの下込が文様がっ た順番にみていきたいと思います。

ますが、複雑なので、簡単にました。 「本当は4つ以上の方法で、「つけられてい

シに水を?けたり.レッかり栂を之っけ ご表面と整こて、粘土級をはりつけ 土職の形式できました。指かへ ます。この時、裕土絶かいはかいれたいよ



◆ 粉土板をつけたあい、植断のセンイで、探り、 を に を を がいて 縄目をっけます。 表面が 新 ますぎ ていたり 湿り すず ているとうな 縄目 がっきません。 個 (年的は 独しを かがした うかかす)

C ハラマ"表面をミか"キその後、棒状の工具 ご 和線を播きます。 124 D 棒状の工具で、刻み目を入れて完成で ち。ユは鋭い先の工具·スは断面形が 田形または半円形の工具で、クけています。

〈問題〉

11 左回の窓かストナッカーボールと野球の || ボールが、あたりました。さてどっちか、先にあた> が、野球でボーラ たっていしょうから

いることかいとはまする。よへく工器をみてみましょう。 (地の大学の場合は、後からっけたものが、だこっけたものをものはまり) この問題のようにここ新・旧をみっけて文様の施文=順序をさ

分編集後記分

K^むにカミナリの落ちて来た方へ総 Orの いる、 カミナリに接近 まいました。集調査島は、カミナリヤーたいへん、好きちもうZ、 今日日,昨日六月三統六雷雨12日,乙於服如一中新之以己 (市場などを)といるでは、一般価格のになっていました。(ながじ)

大 た ナ フ ス 独画 当 人 大 た ナ ナ フ ス 独画 国

後遺跡第3次調直終了。多謝學

今灾。発概韶直。目的は

- ①北の小丘彩面にかけての住居址の北限を極めること。
- ②南の1近斜面で見のかた住居近様の落ち込みを明確 にし、南限を極めること。
 - ③東側小袋色面入の 杭かりが 在3分前が石をかること。
 - ④黑色土的の住居址下推元多二七。

等にありました。そかは、この南北に連右る鞠部についてだけ でも英指のあり方と彼原するには最成限火事な資料である

見られますか務免なから精直の手を入れることかできまと ました。東側部的については住居近か規定さいる落ち込みが しかし、北山丘にかけての金河のでは、4mかの旅発とにただけで にかけは一断確実なものにでうスマ軒相当分が確認さか 状泥如知己水,新山課題如将来に残己小主にた。南了近 今年新たにフ軒分の住民生が確認され、こうに抗かる

幸也事长、农の全体像主語的中調查区如小範囲村

ますが、その姿は東に大きなもので、内容要かであることは (調隆主任 尼王卓之) 最後に網協力下さいました方のに表心より厚く能別的上上 想像ものる故、将来上夢とたくこごるを得せん。

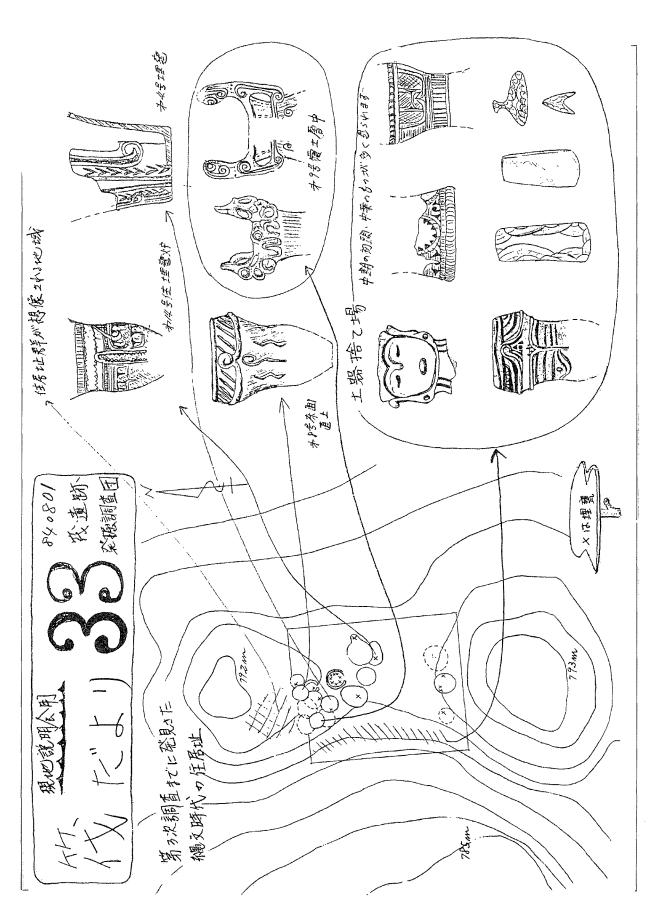
○経文土器の、作リ方一完紹編一の

今日はいよいまな無いの最終工程である控き上げです。

入了己目小宫小人生的身的空冷却的土然外口的向生生化。 三百七烷、時二月加工は小引き在一種燥中仁瀬了と七一小 施文を紹立た工器は日晴い教風間乾燥させま、短いす — 5. 蒸成

縄立場は電を使けれ、地面を外掘りくは、かは中の水気を 23為15 30分程空过生日期、各份人工器主置于、国川新区特別 自然に考えるのと待って取り上げずり。土然の焼放は天気の良い 4~5時間焼き続けず最後に一時間接置まかの中に廃し 日を選んで、旧かかりの作業となります。もし、計別の水るんか、 明したら水の角には十分に注意几行い。

預とさせていただ、きました。いい村教育各員会の皆様をも台かとする 10元の 住居止。確認という大王存成果之収別3、とかいで、生、私達も大変良い色 面雨に開ふれ続けた調査でした。しかし枚煮物、部田の杭は多数の B学院と駒沢の OB,学生が、前いなから、神仏の加護に見放こい 皆様の御脇ににり慰餅致はる、有難うございました、(編象長) -(約6条份名)------





以外には、そば、むそいがか、つくられ、また明ますり30年6月

おび 杯も かられるいて

大丘にはかってから、個人は、1まつとられていたことははし、米

して、因か、盗られまして。しかし、ままりにも、木か、丘くはん花からいる棒が、実易ならの液発なか、この地をからてまり用するには困難は倒かっ

ありついに海原の水量の少でであるほうにしてい理由で

まか、農業については、明治30年からから、残る過度を利用

240.5 1273-75.0 山水事などについてみてみると、2、3軒の祭の人やからなみ除さのたかに今一用していたやひであり、それはほんといれるから、する、それははんかなもので、たろうで、す。

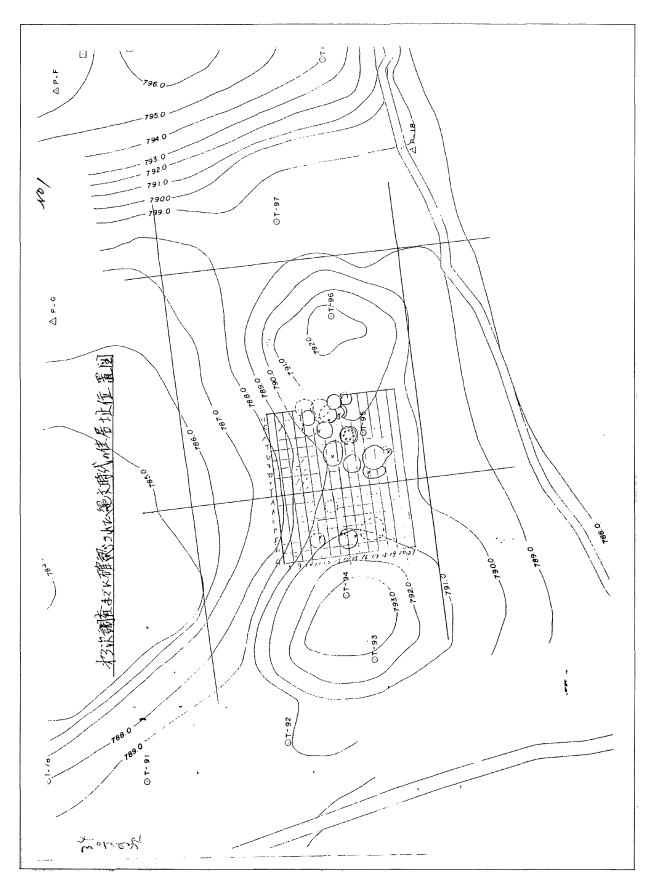
この地、また、足いでいる。からないなり、おもの、おしなく、あしなく

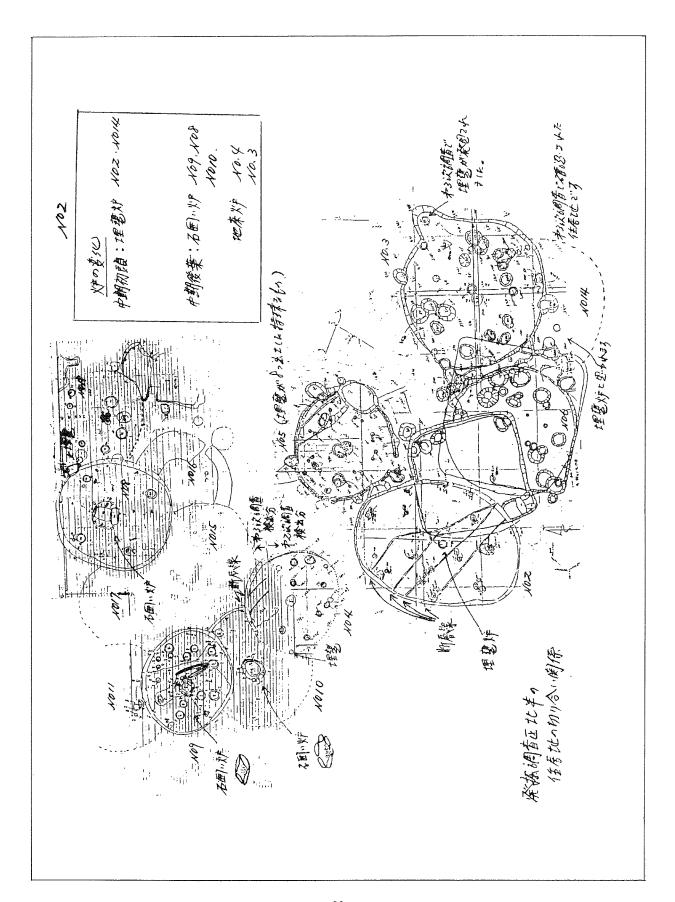
また、たを戦ますで、射撃場が、 あり、いかだ。130分の一」と呼 は水・野専用に手)用なれて いたそうです。(いみを西、8年の)

(| やなおろうし前11ましいたいとうたったのことでう。

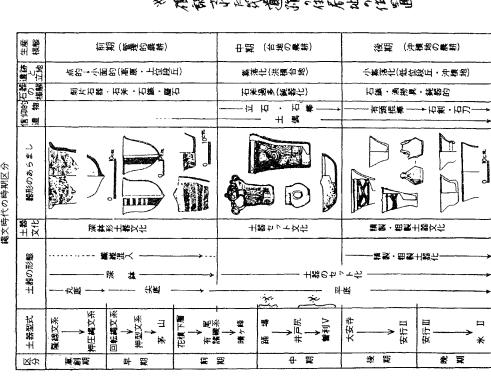
12.12.02.15. 17111 AJAKB·天

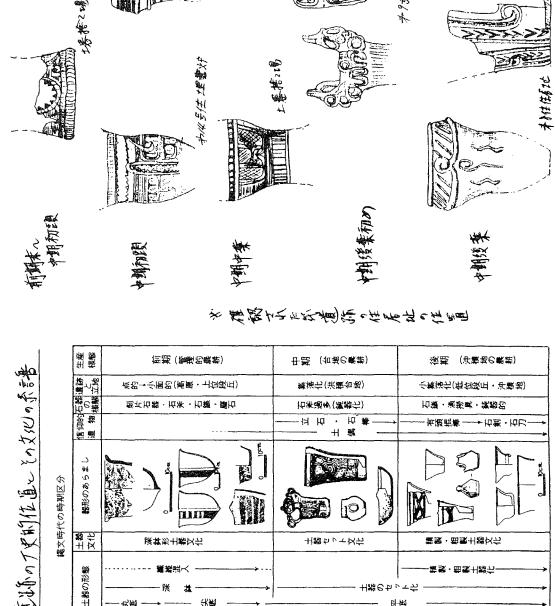
かえん(73イ)ほこのように記むてたいま

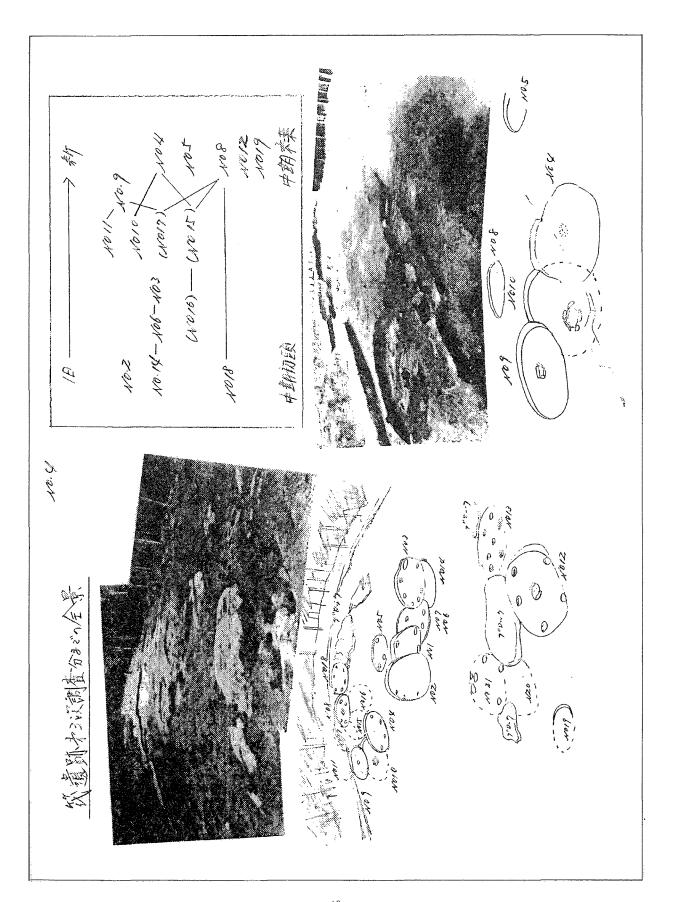


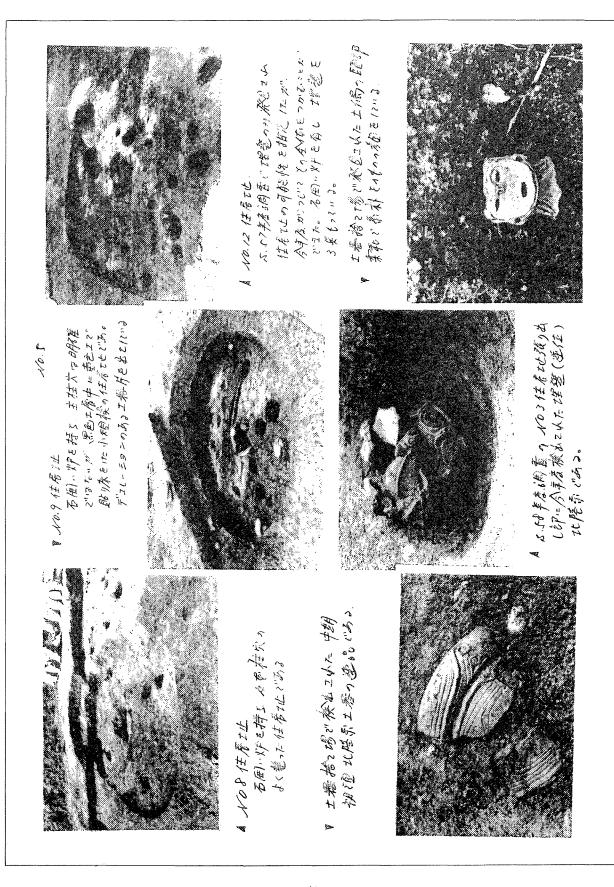


然遺派の大大的佐追していないのか言者









1X (+ 1) 35 Water 以海、污

大山以衛直10533-15×19112以以1513-1887. 7.30

春紀書を一日年早へ作り真一、残遠海の いたのむつもりでおりまには、当えのよんじころか、事情 肝年を分まで、家林、報告書を完成コセス、 今年度 李月和与8月5日月11日至京小平定之市上次部首的行品批对 BV 3U倒~,住后的,抗水り医猪皮12.12野.33 今年度,目撰一, 序主义成据之统机,来也部分上, ストを知をつかむ事とかります、そのとからの東海

本日の出来いとく

かけてずか、我々は月年以上にかんはるつもりでするとい 皆本義の御功のにか、本日子定されたとかりのケ 業は充ろしました。暑にさかりの中と光石りかとうこざい ました。これから約一週間の発振調金、うなられる 皆なんも、ますますはかき、そ為からして下さい。

野球舒節にあまえたらかりよく動くを」と高さや3つ なとと、おしいています。しかし、年当に小り不すの子はたち Co.frp-の方の、先かのLでいるのと見つけ、見正、先生は非棒 口感激心活。夏休天终了线口作学治上高校。 月日の調査に、楽石上高校野珠部と対戦、た 体於鄉化 私电影小音

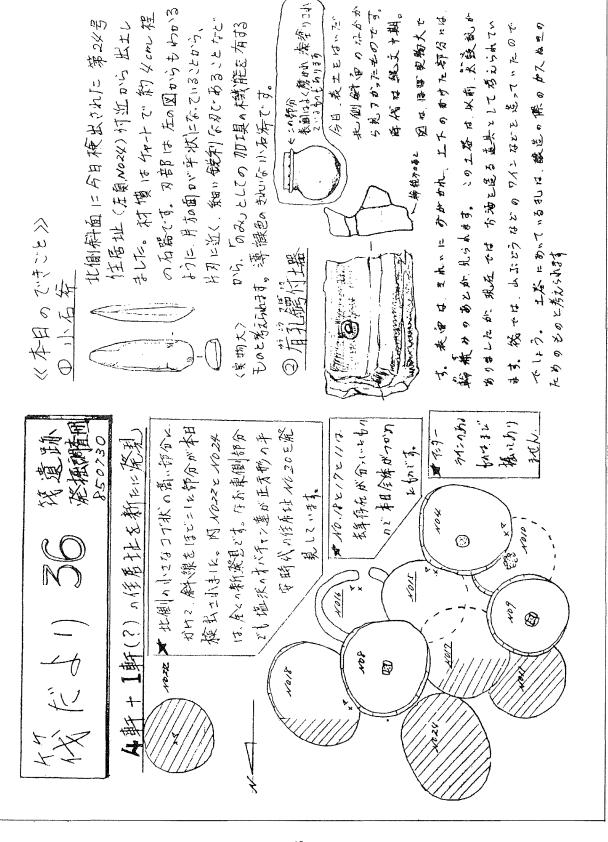
30mm新人招介 30mm

25只要好。物数面为《西西》 なのだ、かなりの今年の、かりかしたが 当我の政でかいかいブかいで、鬼 ~ 中でのはして、~

介を参加なせていなかくことなかり母しな でなられるはいるたいします。いい、梅女との大 なる、とてもなるといまち、よろしく いながれなしているからいからいという

二部力至万度。1、12133 (里元)

みんなのかを充明に、豆、ひ、こ、まる.



東側林張区。校出作業難航少

本年後衛権の目標の一つにコ東国」に住居北州あるから、外を確認することにありまず、が三日も思ずに 現んもすびは、生りに来るせん。理題が一英出土にこいるので、住民社の在りとうちかですが、掛土が上に対が、一番機に請けしからかい、コルに前っている機があって、からが上に様々があると来いからからにあれる。 前にいる 機がから 横立如 しゃい うけいり 原因がありまる。 電母 直前 にあいかい、心角を削り下げるにから、 34、12、14 明 12 日曜、をははリコイをいくかい。 ある。 気がから (でんり) ((しょり) ((しょり) (しょり) ((しょり)) ((

GBO FEWOR

川灣生机石製模造品左発見

12 12 14 16 11 1

面側の掛土の中から、左の国に示すようなる関機をあか、発見ないました。 発見名 は難をおる、小学と年生。 免扱 調 立のお土をとして 雑土の中から採集しまれると、調査手にの じょうまに 取り上げいいて まいま

した。 囚主、の様な物をしていますが たのところ この遺跡で 考えられる 時代とには平安時代ということにかける。 片別は ほほびふてすか、もう片面は重面にも磨かれています。 解記 割ずいはおま 持つもかと考えられ、、核遺跡に関するを多り、貴重な 首科 であるときえます。

各局的上C27人巷外编、"多0分0七5,72"

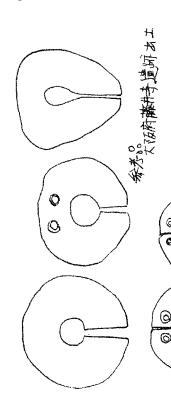
去る つはら/ B. 来倒 n. 突然' 窗 米面 空, か. 発記 4 かました。 との 磯 か. O 千枚 D S 放かて. 1 両にはりきず、ちのみに、よる M か ない らかたのではかっていか。 37 時代中間以降、 幕末記 使用立かに触ですが、 いんは事に下れる 15が、 とかいましい事に 段とし、本い、この事がある。 55 カッギー あっちが、「 13が、 55 カッギー あっちが、「 13% 多たけ、 まっちょう。 もか、 「 13% 多たけ、 まっちょう。 まんが、 13% 多たけ、 14 をした。 14 をした。 14 をした。 15 でもの 15 できっちゃく 15 できっちゃく 15 できっちゃく 16 できっから 16 できっちゃく 16 できっとん 16 できっとん



珠状事飾について

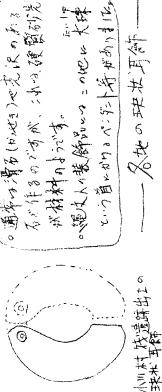
NO、3アで石鉄模品かの発見を紹介しましたが、ため、検討の必要 球状 可なや(けっごからせかびで)ないなることが、たかいまかが、まった。

672·Lま3为10 ける、その五大大田かっと」は

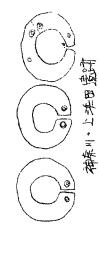


とは孫林の王、の一雄にものれ目をもっての一下、日たぶっまけたろしにものれ目から過に、垂下すせる合うまであるしまる。一九は、耳た八に、金み、する智念のなれたたくとかかいかせるそのそので、する

※・現(けっ)とは古代中国の玉、(ままく)の一番の名です。 その珠によくかんだが E(Tいるので、おれまれてかまま。

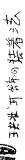


阿山南·拉斯斯湖湖 8 一山餐。珠状形饰一



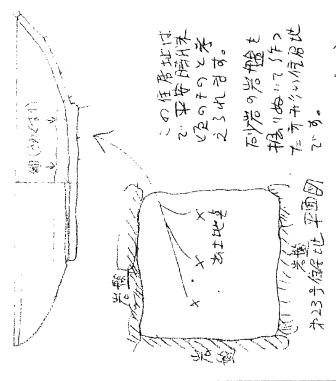
見るる

まずしつもかもありいから、細いから びんびんないりんとないろんが大きった 8866212





可認明時以一年日の東京の子 を放出れたかいれる



一様と言うとなること

2日、在原於日期有到日口報鎮力鎮死的行於中日上 有33年在各班中 昨年被3個在七九日在在八分班 不想海上軍軍四次大類八斤在北上一即第一次衛士 開了不停かれているる、この職は衛の大日の前在公司 あるり発倒からなからいものです。

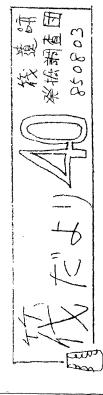
一概的二代各次は海底以為一部八七八日本之八五年二十二 題気を降去るたかに、有事に対して非常は神経からは からているる。その何にして不知に参に明、尽もない 作先生加工工作司

砂岩質の壁を利用し、麻癬も砂粒をしりごおることから、か 以上のことも考えておると、奉任居在下、都和性的影 いかは中国の衛生的地の穴名に似た於過してもあった なり味動は住居なかかいとからみたいよう。

~~ 反省個路のは…~

グのでとなる。

称の母人は、独立かけいないではれい。就にからい、西郷、教園 この勧落は奈ら、安時代のかので、概で、年気のれ、歌を教と派 34.2、四土地去了,要口下又来在,为既n面微弱了在你口 はかいのいち、1八のとも、衛のは、



查书靴 多 1/1/0

のこび)を売りる上でるなるな情報提供をいるかます、いかかっ るのに非常と苦致しています、複合しな住居なけ、編年(時のも 極はいいと思っています。それにする層は横の時間巻を教び 校,達断心下教外,任岳虹以瀬合(時間差を 調角国かにはなかれも新田を間海ションけん造構を 有古を信名ががかったうし、名なの住民などの投機を確める てくれるエ目の相異が明らかにわることか、望まかます。だから 名母兒 +6 調査田の人産に三面が入ると 水ず、おてく 大・神様、用をかかんでするいませい H ー ボ ム H "灰七种.

本めて行人様は SIT 3 どこせかめたらなば存はしがないます。なけらがないます。そけらば後のははなるののおはまないのは、 De (m) と一十招くたれよう 2× 70 == たいよう 遺録の白く清けまは月の光に明えてれては雪の山野に得は落とて

HE 6

書いるサダフ

B

田がからか 野に子 遠、昔の物語 動語 夕べの皇見てほのばのしのか遺跡 本めて行く候は

47 大照 目で升る株、遺師、調直面 女民コムをそのか下土110。 小川木丁から美人の女女女女子 はけい いのて、すっといかい ので、すのなるか、く オッハッイの大ゴハ 国学院 大 乙年生 41 助北本学了年

學三品

要かなお彼み

(をなっての)

回極でかっ

が一大

する「ハンはかけい」 からせて大三年十一年に かの林人のからのお 即城中之五五十二 並压大學 海生 原な

エア

· 大人· 为林野沙山村村大人· 大人· 为林野沙山村村大人· 大村村

3(-1)-人村面が投三とたい中 スでからない歌ーグーローサーは タンな、お、たいかん、ア イカダンタ中にこれ 深一少年

この様かのところなりてから、あったが、本しいるしんな 古る七、多人強 はこ

> てているお父さる。 院立と休めての回にで

海町かけるおもたとろれる

海谷を大のかっかっか

な発用な

発してして

入了左巴里、生子机压的松、前属者之一面 金がも田院松に 2.1エートないろ 67 アリレン1 が連盟

小川木すからみた極島 美生。90Kg余に存ったそうで、す。 ちのもれたれ が大格之を団毛 ((⟨€

海馬船

なられいけつけ でかないかの一回れにキー

日上、一年上日日 今日~ NESO

彼の面としてはする

明日は引えが待ろいる発格がればなればないなって

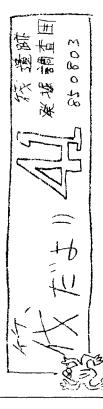
田城中西北西山

令核应

つをない

は飲け明られがなっている

Ti roi w



今日は、遺跡に発かりているおま学徒の表がなでへのアナッロー4ままついまがます

久保田數子(嗣沃五年)

ちょうち車はしようと思いた動機は、その理由からよりにも了となんあるうな、気がでいて自分でもとのところか、はいかり上路というからなっているとうか、はいかでもからなっているとうが、ためいまりになったことが、からには、大角に、いた同いのものとはれかい、はいい、大海の講教が範囲で、行なかれているだる境にはを境にはす。しかし、大海の選表が範囲で、行なかれているだる場に、といい世にはするが、差して、大学では毎日毎日旬かのアホスかいないに、134~2113

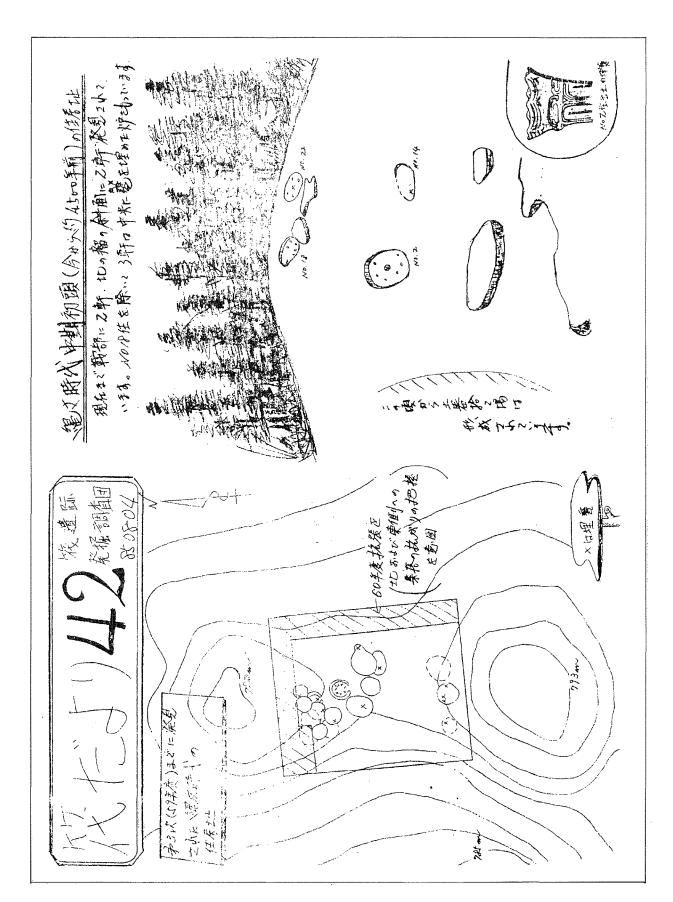
前島、草(文正大/年)

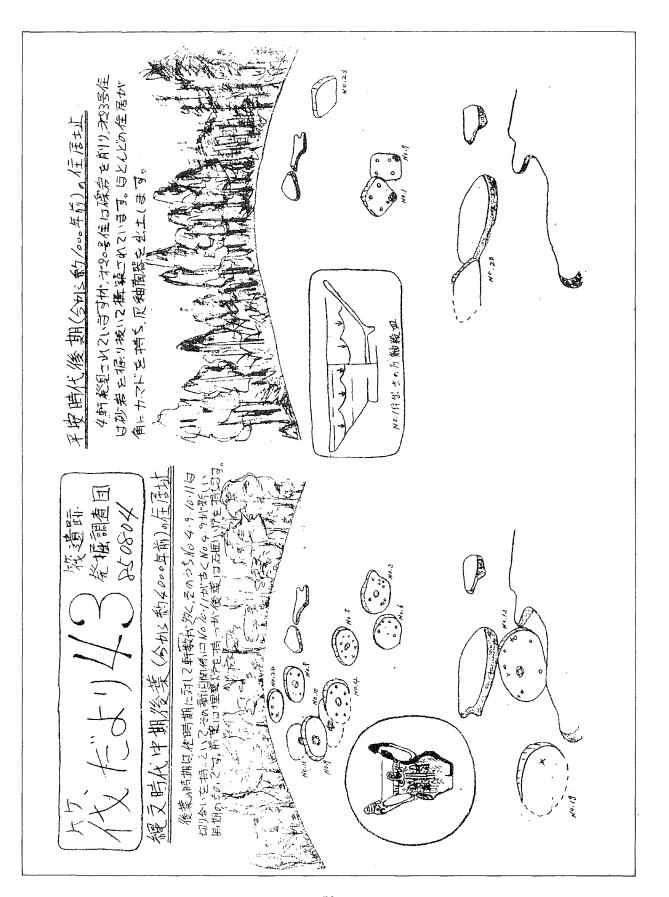
中型の頃、自分の強大が釣せんと思い込み、治校へ学校、自己はく、改用班に入り、大兄輩のおる職はもんのご告毎もと覚り、発務に参加していたり、対かいた略には、おかの母の皮に入ってやした。

※ 為数的代,日本文の改統の平均 9~5 (10枚円弁定) でした。

なる、大方なは現在と題をとの対象であり、

面看中(國際院大公年)





筏遺跡の調査とわたし -『筏遺跡』IV(1986)より―

筏遺跡と私

小川村文化財審議委員会委員長 松本 史 筏遺跡については、大正の末期に栗岩英治先生を 講師として、坂井典敏先生や金井喜久一郎氏が中心 となって調査したことがあり、私もお供をした。沢 山の遺物を発見して人々の注目を集めた。その後村 の考古学愛好者も遺物を掘り出して喜んでいた。

昭和二十年代、信濃史料編纂の時永峰光一先生が 調査に来られ、私がご案内した。縄文中期を中心とした遺物の多いことを指摘された。そのことは信濃 史料第一巻に出ている。

昭和四十年頃、上水内郡誌の考古調査一行が現地を踏査され、また公民館に保管してあった遺物を調査され、講師の森嶋稔先生は重要な遺跡であることを指摘された。また発掘調査の必要性を強調された。森嶋先生によって点火された発掘調査の燈火は村人の心の中に燃え続けた。もう十年以上も前のことである。私が教育委員会に出ていた頃、発掘には地主の諒解が第一と発掘承諾書を頂いたこともあったが空振りに終わってしまった。

その後徒らに年月は流れたが久保田耕平教育長の時、いよいよ機は熟し準備が整って、待望の発掘調査が行われることになり、団長に森嶋先生、主任に児玉卓文先生をお迎えし発掘調査団が結成された。

忘れもされない昭和五十七年七月二十九日感激の発掘調査鍬入式が行われた。席上森嶋先生は「発掘については今は亡き楠恵教さんが長い間非常な情熱を燃やして、常に私に強く要請された。また此所においでの松本史さんも毎年の年賀状に、"今年こそ筏の発掘を……。"と書いてよこされた。それがいよいよ実現されることになり感慨に堪えない。」とのお言葉があった。楠さんがご存命だったらどんなにお喜びであろう。

着手早々、森鳴先生の見当通り縄文中期の住居址 が何軒も発見され凱歌があがったのであるが、また 全く夢想だにしなかった平安時代の住居址も発見さ れた。瓢簞から駒とはこのことであろう。

かくして今年で四年目、学術上貴重な成果を収め られたことは誠に感激の至りである。

これ偏に調査団長森嶋稔先生、主任児玉卓文先生、 大学生諸君、塩沢区長さんはじめ地元の皆さん、小 中学校の先生、生徒、児童その他ご協力頂いた多く の方々のお陰である。また常に周到な準備と運営を 計られた教育委員会のご尽力の賜物である。謹んで 敬意と感謝の意を捧げる次第である。

筏遺跡に思う

前塩沢区長 小林 光良

二三年前に筏遺跡の事で分館誌に知れるだけの事を書いたことがある。筏については子供の頃古老より度々伝説めいた話しを聞かされたものである。それはアイヌ人が多く住んでいたとか、山犬が行列を作って登り降りした等の話だが、幼な心にも山犬は兎に角土器片を見て万更ウソでもない様な気がしたものである。

ところで測量より今年まで五年が夢の様に流れて 了ったがその結果は正に一喜一憂の連続であった。 今考えるとつまらぬ心痛をしたものと苦笑せざるを 得ない。"共に掘り又学び"との団長先生に従った 多くの人々は一様に遠く縄文の時代を偲び、そして 出土した貴重な資料により最初にして最後の体験を し学び得たものと思う。たべこの作業は経済効果の 乏しい又実に地味な内容故万人に向かなかった事は 事実であり付け加えなくてはなるまい。調査が一応 終わったとする今、振り返ると最初の意気込み程手 伝いの出来得なかった事に後めたさを感じてならな い。幾人かの村人が今年で土器掘りが終わったそう だと云う話しを聞いてそんなものかと思う。尤も土 器等の出土により解明とするなら止むを得まい。ど うもこの私には調査が終わったとする実感が沸かな い。その為八月過ぎより数回現地を訪れているが多 くの人が見学に訪れた跡があった。山々又木々が四 季を教えると云うのは本当だ。落葉が舞い木枯の時 機となるとあの酷暑の発掘作業はウソの様な気がす る。山の端に佇み追憶を走らすのだが、ここで私は 恵まれた現代の人といえども一と皮剝けば縄文時代 を逞しく生き抜いた人と余り変わりがないのではな いかそんな気が沸くのである。終わりに晩年この遺 跡発掘に執念を傾けた楠恵教氏、松本史氏の功績を 高く評価するのだが、とりわけ発掘を目前に他界さ れた故楠氏には此の成果を報告せずにはなるまい、 そして成功裡に調査を終了せしめた調査団の諸先生 方又村当局のご努力に対して心よりの敬意と御礼を 申上げて止まないものである。

父と遺跡

塩沢区 楠 洋明

私たちの地元の者は、子供の頃に、親から筏には、昔の人が住んでいた証を示す土器が出ると聞いて、 足を運んだ記憶のあるものも少なくないと思う。 そして幼な心なりに、このままの状態で放置され、俗にいう、あらされてもよいものかと誰しもが思っていたであろう。

おりしも父は筏ケ峰の歴史に魅せられ、三院旧蹟 と並ぶこの筏遺跡発掘調査に想いをよせ、この調査 の発端ともなり得べく、役場をはじめ関係機関にお 願いにあがっていたことを思いだします。

父は奇しくも、本調査が緒についた昭和56年の春、基本調査に森嶋先生がお見えになる日を目前に病に伏して、病床より、地元の区長さんに調査にあたっての段取りなどのお願いをしておりましたが、それから間もなく現地調査におもむくこともできずに他界しました。

ここに昭和55~56年度に亘る入念な予備基本調査をふまえ、昭和57年度からの四ケ年に及ぶ筏遺跡の本格的学術調査が滞りなく実施されましたが、これは偏に村当局、森嶋調査団長をはじめ、地元塩沢区及び地主の方々の御尽力の賜であり、又、このような財政の厳しい折り、村当局の御高配により、本事業が、着実な成果を挙げられましたことに対し深く感謝を申し上げる次第です。

情熱に燃える調査団長の森嶋先生をはじめとする 調査団の先生方、そして学術調査の所以とする地元 小・中学生を中心とする各所各層の皆さんのあの炎 天下での正に汗の結晶として、筏遺跡のほぼ全容が 解明され、平安時代の住居址の発見に続き、縄文時 代中期の住居址が次々と数多く発見され、これと並 び出土した石器土器類からみる当時の生活文化様式、 文化の交流などがひもとかれたことは、感慨深いも のがあり、また、この調査に携わっての体験で得た ものは、計り知れぬものがあるとおもいます。

この貴重な文化的遺産を、自然、開発等と調和のとれた正しい姿で後世に伝えることは、大事であると思います。出土した土器石器は歴史民俗資料館に保存展示され、住居址の保存についても検討が加えられておるやに承っておりますが、地元の一住民として筏ケ峰三院旧蹟とこの筏遺跡の歴史的二大文化遺産の活用をより一層高められ、ひいては村の発展の一助となることを念願せずにはおられません。

今は亡き父も、草葉の陰で、さぞかしこのような すばらしい調査結果をひと目みたかったと残念に 思っているに違いありません。ここにあらためて父 に代わりまして、関係当局、数多くの皆様方に厚く 感謝を申し上げます。おわりに本誌編さんに際し、 このような機会を与えていただきました御配意に対 し心から厚くお礼を申し上げます。

筏が原の思い出

小川小学校 6年 徳和 一男 ばくは、夏休みに、筏が原に行って、生まれては じめて、土器を発掘しました。どうして土器を掘う うと思ったかというと、友だちにさそわれたからで す。友だちがたくさん行くからぼくも「行ってみる か。」というような気持ちになりました。 朝、でき か。」というような気持ちになりました。 朝、行き、マイクロバスに乗って、塩沢の方へ行き、マイクロバスに乗って、塩沢の方へ行き、そうの道がなくなって、でこばこがひどいうニャーに が見えてきました。バスからおりてテントで わられてみると誰もいませんでした。 リックをおはした 大人の人たちはもって友だちの後をついて行くと、大人の人たちはもう 発掘をしていました。ばくたちが発掘をする前に、大学の先生が発掘のやり方を教えてくれました。

ぼくたちは教えてもらったとおりに、こてを使っ て土をけずりました。一人はけずって、もう一人は 運ぶというように二人一組になってやりました。三 回ぐらいけずった頃に友だちが「あった。」といい ました。大学の先生に見せたら本当の土器でした。 ぼくはほんとうにあるんだなあと思いました。ぼく は絶対に見つけるぞと思って頑張って掘りましたが、 なかなか見つかりませんでした。すると、また友だ ちが、「あった。」といいました。先生に見てもらっ たらやっぱり土器でした。どうしてぼくだけ見つけ られないのかなあと思いました。ぼくは一輪車押し をやりました。みんながけずった土をのせて運びま した。一回目は意外と軽かったけど、二回目は友だ ちが、ふざけてのせて山もりになったので、ヨタヨ タしてしまいました。でもなんとか押すことが出来 ました。

お昼を食べて、少し休んでからぼくはまた一輪車で土を運びました。だんだん土を運ぶのにもなれてきたので、「少し多くしてもいいよ。」と言ったら、山もりにのせられちゃって、仕方がないので運んだら、大人の人たちが「すごい、すごい。」と言いました。ぼくはてれて一輪車を倒しそうになりました。でも倒したら恥ずかしいので頑張って運びました。

少ししてから住居あとを掘りました。すぐに土器を見つけることができて、ぼくはうれしくなって一生けんめい土器をさがしました。一輪車押しもやりました。

「終わり。」の声に、後片づけをして、テントの方 へ帰りました。きれいな水で手と顔をあらって、お わりの話を聞きました。

マイクロバスの中で、パンや牛乳をもらいまし

た。ぼくは、おなかがすいていたので、すぐに食べました。ぼくはバスの中で発掘は意外と面白いなあと 思いました。できたらまた行きたいなあと思います。

いかだいせきのはっくつ

小川小学校6年 宮野尾隆光 夏休み中にいかだが原のはっくつがあった。ぼく は、そのうち三日間行った。

去年も一日行ったので、だいたいは、分かった。 はっくつの先生もぼくの事を知っていた。一日目に 行った時は、小学生は、ぼくたちのクラスの人だけ だった。行ったら、すぐに、ほらせてくれた。去年 ほど土器はでなかった。でもこくよう石が、二個ぐ らい出てきた。お昼を食べてから、去年行こうとし て道にまよって、行けなかった近くの池に行った。 去年、すごく苦労してけっきょく行けなかったのに 今年は、すぐに行けた。

二日目は、四年や五年など、たくさんの人が行った。その日は、平安時代の住居址をほらせてもらった。ぼくのほっていた所から、黒よう石が一つと、 土器が出た。そのうちに四年生がほっていた所からおさらが出てきた。先生が来て見ていたら、「これは平安時代のおさらだ。」と言っていた。その日は、ほかにも、だんろのあとのようなものも掘り出された。

三日目は、いかだいせきの説明会だった。その日は、小学生は、ぼくたちだけだった。説明会と言ったので説明を聞く日だと思ったのに、はっくつの手伝いをさせられた。でもぼくは、説明を聞くよりも、はっくつをやっていた方が楽しいのでよかった。

来年は中学生になるけど、中学生になっても、またこのいかだが原のはっくつに行きたい。

筏遺跡の発掘調査で学んだもの

小川中学校三年 小林 栄一

速いもので、4年が過ぎました。小学校6年の時から始まった、筏遺跡の発掘調査も今年でほぼ終了になりました。自分の中学校生活の中で一番印象に残る事は沢山ありますが、筏遺跡の発掘もその一つです。どうしてかと言うと、毎日筏に通い続け筏の人々の生活の様子を知る事ができ、自分の生き方や考え方に大きくプラスになったからです。それに、近い自分の将来に、例えば、職業選択する事に対して、大きな事を発掘調査で学びました。

一つみなさんに理解していただきたい事があります。筏遺跡の発掘は、多くの人の協力があったからできたものです。そうでなければあれだけの発掘調査はできなかったでしょう。自分一人の力ではどう

する事もできません。多くの人の参加があったから できたんだ、その事を忘れないでほしいと思うので す。発掘をして、多くの人たちと、学んだり考えた りした事もありました。小学校六年のころから現在 の自分へとだんだんに自分が大きくなってきました。 心が広くなってきました。発掘の仕事が、やだなあ とか思った事もないわけではないが、自分に似合っ ている仕事だなと思うから、最後までやってみよう と言う気になりました。やる気になって実行するの は良い事です。ですが人間は、計画しても実行せず に楽な方向へ進んでしまう。これは良くない考えで す。楽をして良い事に合うはずがないわけです。自 分に勝つ事が大切だと思うのです。これは、すごく 大切な事です。自分に勝った時に見たものと、負け た時に見たものでは、同じものを見てもちがったも のが見える。これと同じだと思うのです。

自分はこの四年間夢中で学んだ発掘も今となって は良き思い出となりました。筏で学んだ事をこれか ら生かしていきたい。またいつか筏遺跡の発掘をや りたい。これが今の私の考えです。

筏遺跡発掘調査に参加して

中条高校一年 松本 哲弥

夏の暑い日ざしの下、小学生からお年寄りまで、 参加し筏の土を掘る。ぼくも、その中の一人です。 ぼくは、毎年、参加し、今年で4年目です。毎年参 加すると、すこしづつちがう所を掘りいろんな事が わかり楽しいしおもしろい。

一年目つまり57年の発掘調査の時は、とても多くの土器のかけらや石斧などあり掘っていてもとても楽しい時間が過ごせた。あとでわかったのだけれどそこはむかし土器捨て場だったんだそうです。この年は、平安時代の住居址が見つかり、みんながおどろいていた。

二年目はそんな所がなくあまり土器も出てこなく てつまらなかった。その代わり住居址が掘れてそれ が楽しかった。

三年目もあまり土器とかはなく、住居址があった。 住居址を掘れてよかった。

そして四年目の今年も、そうだった。筏遺跡には、小林栄一という名物男がいる。この男、朝は、一人で遺跡まで走ってくるのです。そしてよく働き(?)お茶の時も一人でなにかやっている。仕事中でも、よくしゃべり、あまり仕事をしない。こっちにいたかと思うと、今度はあっちといったぐあいにちょこまかと動き回りさわいでいる。雨で発掘が出来ない日に、栄一はやってると思い遺跡までいって

みたりするありさまだ。栄一の考古学に対する熱意 はたいしたもんだ。

後遺跡の正体もだいぶ明らかになった。矢じりがあまり出土しないということから、狩をすることは少なかったのであろうということもわかり、とてもおもしろい。また調査する時があるならば、ぼくはまた参加したい。

夏と筏遺跡

西沢 久徳

太陽をさえぎる木立も発掘現場だけはすべて切り除かれている。遠い縄文時代にも夏はこうして暑い日射しが降り注いでおったのだろうか。すでに発掘されている幾つかの住居址を見ていると、当時の人々の生活の姿もなんとなく想像されてくる。自然の中に身を置いて自然と共に生活した縄文時代の人々。いつ、どこからやって来て、そしてどこへ去ったのか。

今年の夏も私は筏遺跡の発掘調査に参加した。昨 年も一昨年の夏もそうだった。妙なもので、最近は 夏になると発掘調査に参加することが当たり前のこ とのように感じられてくる。夏の一日を筏の発掘現 場に身を置いてひたすら土を掘り、そして運ぶ。発 掘調査には、「どこに何が埋まっているかわからな い」と云う期待感がある反面、長い歳月の間に降り 積もった土を慎重に取り除いて行くと云う地道な作 業がいつもつきまとう。思えば長い間興味本位の乱 掘によって荒らされてきた筏遺跡。そんな筏遺跡を 本格的に調査保護することは私達の長年の夢であっ た。土の下から掘り出された土器や石器。それは故 郷の遠い先輩達が私達に残してくれた文化的な遺産 でもある。今回の発掘調査によって得た成果をどの ようにして後世に伝え残したらよいのか。ある意味 では私達はその見識を問われているようにも思える。 筏ヶ沼を中心としたところの、云わゆる「筏ヶ原」 に限らず、峯を越えた萩野の池附近をも含めた 「筏」とは一体何だったのか。今、筏の研究はあら ゆる意味において、やっとその緒についたところだ とも云える。

雷雨に見舞われた夏。暑い日射しに悩まされた夏。

私にとって、夏の筏遺跡で体験したそれらの事々も、 調査に参加出来たことの喜びの前には極めて小さい。

筏遺跡調査開始の頃

前社会教育主事 大久保 豪昭和57年7月の末、真夏の太陽が照りつける筏遺跡に初めて学術発掘調査の鍬入れが行われました。この頃は遺跡の緊急発掘調査が県内の各地でも盛んに行われるようになった時代でもありました。森嶋稔先生を団長にお願いして、筏遺跡の解明が行われることになったことは、小川村にとってまさに画期的であり、村民待望のことでした。

故鎌倉六衛氏、故楠恵教氏、松本史氏をはじめ、 遺跡発掘にひたむきに尽力された方々、また村当局、 議会の皆様方の熱意により、文化的な研究が村の事 業として実施されたことは、小川村の歴史に新しい ーページを記したといえましょう。

調査団の方々には、団長の森鴫先生をはじめ、調査主任の児玉卓文先生ほか多数の方々に大変ご苦労をいただきました。発掘地が人家から離れた丘陵地帯であったため、何かとご不便をおかけしました。にもかかわらず、精力的な調査をしていただき、新しい発掘地の開拓がなされ、今なお感銘深いものがあります。

地元の役員さんをはじめ皆様方、地主の方々にも、 大変ご協力いただき感謝しています。何しろ最初は "あんばい"がわからないもので、お願いする事務 局も、何かと不安でした。レールが敷けるまで大変 でしたが、皆様方のご協力があって発掘調査が実施 できたと思っております。

発掘には、調査会の委員を努められた、教育委員、 文化財審議委員の皆さん、学校の教職員、児童生徒 の皆さんにも参加をいただきより多勢の皆さんに、 古代のロマンを求めて掘っていただきました。

初年度の発掘で、住居址がみつかり、幾多の土器 片が出たことは、向こう何年間かの発掘に明るい希 望と期待をもたらしました。発掘開始の日の感激は、 参加された皆さんにも、私にとっても終生忘れ得ぬ ことであります。

おわりにあたって

本年の4次調査をもって、筏遺跡東丘陵の発掘調査を終わりとします。この4次にわたる調査によって、東丘陵の全容が明らかになったとは言いがたいけれど、前後5年間の調査にひと区切りをつけるためであります。本東丘陵の調査によって、平安時代及び縄文時代中期中部高地の中央山地北辺における資料は増大し、新知見も多く把握することができました。これは一重に、小川村村民各位の筏遺跡にかけた情熱の賜である。記して感謝の意を表するものであります。 (森嶋 稔)

参考文献

寺村光晴他『鍋屋町遺跡』 1960 柏崎教育委員会 中川成夫他『小坂遺跡』 1961 十日町教育委員会 「縄文文化の発展と地域性・中部」 1965 『日本の考古学』 II 河出書房 永峯光一 藤森栄一他『井戸尻』 1965 中央公論美術出版 笹沢 浩 「長野県上水内郡信州新町宮平遺跡出土の縄文中期の土器」 1967 『信濃考古』17・18 原 嘉藤他『長野県塩尻市焼町遺跡発掘調査報告書』 1970 塩尻市教育委員会 武藤雄六他『長塚遺跡』 1971 岡谷市教育委員会 岡田正彦他「本城遺跡」 1974 『長野県中央道報告書」諏訪市その1、その2 長野県教育委員会 小島俊彰 「北陸の縄文時代中期の編年」 1974 『大境第5号』富山考古学会 末木 健他『山梨県中央道報告書』北巨摩郡長坂・明野韮崎地内 1975 山梨県教育委員会 森嶋 稔他『信州新町史』 1976 信州新町 南 久和「北陸の縄文中期前葉の編年に関する一試論」 1976 『石川考古学研究会々誌』第19号 森鳴 稔他『上水内郡誌・原始古代論』 1977 上水内郡誌刊行会 神保孝造他『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』 1977 富山県教育委員会 鵜飼幸雄他『よせの台遺跡』 1978 茅野市教育委員会 武藤雄六他『曽利』 1978 富士見町教育委員会 福島邦男他『下吹上』 1978 長野県考古学会研究報告書11 森嶋 稔他『更級・埴科地方誌 第2巻 原始古代中世編』 1978 更級埴科地方誌刊行会 平口哲夫他『上山田貝塚』 1979 宇ノ気町教育委員会 長崎元広他『中部高地縄文土器集成』第1集 1979.12 中部高地縄文土器集成グループ 森嶋 稔他『編年』―中部高地における型式― 1980 千曲川水系古代文化研究所 長崎元広他『山梨・長野における縄文時代中期後半の土器編年』 1980. 12 中部高地縄文土器集成グ ループ 日本考古学協会編『北関東を中心とする縄文中期の諸問題』資料 1981.10 松本 史他『小川村誌』 1981 小川村 「新保遺跡」 1981 『内浦町史』第1巻 内浦町 平口哲夫 金子柘男他『羽黒遺跡』 1982 見附市教育委員会 綿田弘実 「北信地方における縄文中期後葉より後期初頭の土着土器」 1983 『須高』17 甘粕 健他『新潟県史』資料編 I 1983 新潟県 森鳴 稔他『筏遺跡』 I~IV 1983~1986 小川村教育委員会 堀田雄二他「町東側遺跡」 1984 和田村教育委員会 森 秀典 「北陸の縄文時代中期後葉〈串田新式〉に関する編年試案」 1984 『大境』第8号 佐藤雅一他「信濃川中流域を中心とした縄文中期土器群の様相について」 1985 『三条考古学研究会機 関誌』3 塩入秀敏他『戊立遺跡範囲確認調査他』 1985 東部町教育委員会 南 久和 『北陸の縄文時代中期の編年』 1985 転形書房 寺内隆夫 「縄文時代中期中葉土器の分類と検討」 1986 『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会 戸沢充則他『梨久保遺跡』 1986 岡谷市教育委員会 小林達雄他『新潟県史』通史編 I 1986 新潟県 寺内隆夫 「勝坂式土器成立期に見られる差異の顕在化」 1987 『下総考古学』第9号 『長 三上徹也 「中部・西関東地方における縄文時代中期中葉土器の変遷と後葉土器への移行」 1987 野県考古学会』51 荒木勇次他『万條寺林遺跡』 1988 塩沢町教育委員会 「王冠型土器をめぐる諸問題について」 1988. 4 『新潟考古学談話会報』第1号 品田高志 「新潟県長者ケ原遺跡出土の縄文土器」 1988 『新潟考古学談話会会報』第2号 寺崎裕助 戸沢充則他『長野県史』考古資料編 1-4 遺構・遺物 1988 長野県 寺崎裕助 「新潟県中越地方における縄文中期後半の土器について」 1989. 5 『新潟考古学談話会会 報』第3号 福島邦男 『平石遺跡』 1989 望月町教育委員会 高橋 保 「県内における縄文中期前半の関東・信州系土器」 1989. 10 新潟考古学談話会会報』第4号 「北信濃における縄文中期後葉土器群の概観」 1990 『長野県埋蔵文化財センター研究紀要』2 綿田弘実 森嶋 稔他『円光房遺跡』 1990. 3 戸倉町教育委員会 寺内隆夫他『松本市坪ノ内遺跡』 1990. 3 松本市教育委員会 「三十稲場式土器の現場と課題」 1990. 5 『新潟考古学談話会会報』第5号

高橋 保他『清水上遺跡』 1990 新潟県教育委員会

能登 健他「赤城南麓の歴史地震」 1990.11 『信濃』第11号

筏遺跡 東丘陵の調査報告書を上梓するにあたり、本当に感慨深いものがある。その感慨は脳裏に去来し、人との交わりの機関の奥深さをも改めて思い至るものであって、そのただごとでなさに、唯更に又、こうべを深々と下げるばかりである。まずは関係者、関係機関に謝意を述べねばならない。

思えば小川村に筏遺跡の存在を識り、その重要性を追求するため、調査の機をうかがってからすでに二十数年が経ようとしている。ふた昔なのである。その間、当初からの懐かしいお二人の名前、松本史さんと楠恵教さんのうち、楠恵教さんは幽明境を越えてしまわれたのである。松本史さんの胸に、そして楠恵教さんの霊前にこの一書をまず捧げたいと思うのは、私の人としてのごくあたりまえの道であると思い込んでいる。ありがとうございましたと、つぶやきのように心をこめて申し述べたい。

毎夏、1・2週間、4年間、調査主任の児玉卓文君をはじめ研究所の若い調査員諸君は、よく頑張ってくれたと思う。とりわけ児玉卓文君には無理を、無理に強いた。しかし、その中には私の秘めた願いもあったのだと、これもまたつぶやいておきたい。人間児玉卓文にとって、筏遺跡の調査がバネになってほしいと息をひそめて願ったことを忘れない。児玉卓文にとっても森嶋稔にとっても、それは人間自分史の中の消し得ない摂理のようなものと、今も再び思うのである。

昨秋、矢島宏雄君と二人で、ほぼ自然に遣った筏遺跡東丘陵にたたずんで見た。茅は生い茂り、熊笹は又勢力を回復していた。雑木林にまでは成長していなかったけれど、自然は何事もなかったかのように、そしらぬ風情であったことに心なごむ思いであった。自然回帰、たくまざればおちつくところにおちつく、の感が又一入であった。

本書の上梓によって、一まず多くの方々との多年の約束は果たすことが出来たと思う。しかし、総括の最後の項でふれたように、筏遺跡の調査はその緒についたばかりなのである。さてそれではどうするかについては英知を集めねばならぬところでもある。しかし、これ以上筏遺跡に調査の鍬を入れぬままはるか後の世まで大切にのこして行くことも又、現代人の大きな英知でなくてはならない。

1991年1月10日

于曲川水系古代文化研究所 主幹 森嶋 稔

筏 遺跡

----北信濃中央山地における縄文中期集落址の研究----

発行日 1991年2月14日

編集者 千曲川水系古代文化研究所

(〒389-08 長野県埴科郡戸倉町黒彦69森嶋稔方)

発行者 小 川 村

小川村教育委員会

(〒381-33 長野県上水内郡小川村高府)

印刷森出版

(〒381 長野市吉田 4 - 3 - 4 ピアハウス内)